
Fate/Unlimited silver Soul

ギンタマン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Fate/Unlimited Silver Soul

【コード】

N2910L

【作者名】

ギンタマン

【あらすじ】

万事屋銀ちゃんのオーナー。坂田銀時とその従業員、志村新八と神楽は、江戸一番のクラクリ技師平賀源外から依頼を受け、源外のある工場へ向う万事屋一行。

その工場に着いた銀時たちが目にしたのは、源外が作った「瞬間転移装置」と言う人間をいろんなところに転移できる装置だった。その実験台と呼ばれた万事屋一行は源外に言われ装置の中に入り、実験をスタートするが。突然装置が暴走し、銀時たちの世界とは違う世界に飛んできてしまった！！

そして、その先で待ち受けていたものは…。冬木市と呼ばれる町で7人の魔術師と、マスター英霊と呼ばれる者たちが何でも願いか叶うとされる聖杯を求め、殺し合いをする恐ろしいモノだったのだ！！

これは、天人と人間の戦争。攘夷戦争と呼ばれる戦争で鬼神の如き強さを誇ったという白夜叉、坂田銀時とその一行が運命と出会い、戦い抜いた記録を語った物語である。

プロローグ「発明家の発明品は大抵ロクなモノがない」（前書き）

どうも初めまして、ギンタマンといたします。

この作品を書くことになったのは、自分があこがれている赤夜叉さんやそのほかの素晴らしい作品を書く作者さんたちに触発され、自分も書きたい！！

っと思いついて、今回この作品を書きました。

まだ未熟ゆえ至らないところがたくさんあると思いますが、精一杯頑張ります。

プロローグ「発明家の発明品は大抵ロクなモノがない」

侍の国、江戸という場所がそう呼ばれていたのははるか昔。

この土地に天人あまんとと呼ばれる者たちが往来してからというもの、侍たちは衰退の一途を辿っていった。

そんな江戸のかぶき町に、未だに昔と変わらぬまま、侍の魂を持ち続けている男がいた。

その男の名は坂田銀時、万事屋銀ちゃんなる何でも屋を営んでいるオーナーで、銀髪天然パーマと死んだような魚の目をして白い浴衣をだらしなく着ている駄目なオツサン（マダオ）であるが、ここぞというときはきっちり決めてくれる今作の主人公。

「そういえば銀さん。ついさつき電話をかけてきた今回の依頼主は一体誰なんですか？ そろそろ教えてくださいよ」

銀時の後ろから声をかけてきたのはイマイチ目立たない顔立ちに眼鏡をかけた少年は志村新八。

彼とはもう一人、赤いチャイナ服を着た少女、神楽の姿もある。

「源外じーさんだよオ。何でも新しい発明品を開発したとかで来てくれだよ」

「またですか？ またどんなの開発したんだろうあの人」

「ど〜せまたロクなモンじゃねえだろうよ」

銀時のメンドくさそうな返答に、新八は苦笑いしながらもその依頼人のいるとある場所へと銀時と一緒に足を進める。

「銀ちゃん。依頼早く終わらせて定春ただはるの餌買いに行きたいアル」

「…そっぴやア定春の餌もうそろそろ切れるんだっけか？ すっか

り忘れてたわ」

「ついさっきのことを忘れないでくださいよ銀さん」

「…ったくしゃあねーな。依頼終わったらペット屋によっていくか」

ちなみに定春とは、万事屋銀ちゃんて神楽が飼っている規格外に
でかい犬のことである。

んで銀時たちは現在ある場所へと向かうため、かぶき町を歩いて
いる。

なんでも、その人物は発明家で新しい発明品を作ったとかで、銀
時たちに依頼をされたようだ。

そしてしばらくあ歩いている内に、銀時たちは目的地である工場
についた。

「お〜いじいさア〜ん。いるかア〜〜?」

「おお〜、来たが銀の字」

銀時が少々大きな声で呼びかけると、工場の入り口から作業服と
ゴーグルを掛けている老人が出てきた。

彼は平賀源外、江戸一番のカラクリ技師であり幾つもの発明品を
作っている。

新八は源外に軽く会釈をして挨拶すると、早速本題を聞き出す。

「こんにちは、源外さん。今回の依頼は一体どんなご用件で?」

「おう、まあここで立ち話もなんだ。とりあえず入ってくれ」

源外に言われ、銀時たちは工場内に入ってゆく。

そこには工場の半分を埋め尽くすほどの大きな装置があった。

「おお〜! すごいアル!! なんアルかこれは!!?」

「すごい装置ですね！ これ、源外さんが作ったんですか？」

「ああ、これは俺が半年掛けて完成したんだ」

「随分とドケーな。んで、コレはどんな装置なんだ？」

「この装置はターミナルと同じ原理でモノを転送するんだが、それを生身の人間で転送させるシロモノだ。名付けて『瞬間転移装置』ってところだな」

「へえ〜。大方今回の依頼はこの装置の実験台を俺たちがやれっ
てか？ メンドクセーな」

銀時たちは喚声を上げてその装置を見る。

神楽が興味深く装置を見渡し、新八は源外が作った装置を見て関心している。

銀時は源外が自分たちを依頼によこした訳を悟り、めんどくさそうに頭をボリボリ掻く。

「そうだが…何か不満があるのか？ 銀の字」

「ったりめエーだろがア。俺達アテメーの発明品の実験体にされてロクな目にあっちゃいねーぜ？」

そう。銀時たちは彼の発明品の実験体で、色々とロクな目にあっ
てはいないのだ。主に小槌とか小槌とか小槌とか。

語りだすと長くなりそうなため、割愛させていただこう。

「そうつれないこと言っなよ銀の字。金はそれなりに出すつもりだ。

それに、俺とテメーの仲じゃねーか。頼むぜ、銀の字」

「ったく、しゃあね〜なア。わあ〜ったよ」

「ありがとよ、恩にきるぜ」

「いいってことよ。…さて、よしお前ら。その装置に釘付けになっ
てないで、そろそろ仕事すっぞ」

以前銀時の愛刀『洞爺湖』を改造してもらったとき、柄を押したら醬油が出てくるように改造されたのだ。

前回とデジャヴな展開に銀時は源外にツツコム。

「一体なあゝにが不満なんだ？ まあそんな冗談はさておき、無線機はそつちのボタンを押しやちゃんと使えるから安心しろ」

「…つたく、最初からこのボタン教えやがれってんだよ」

「それじゃあお前ら、この中に入るんだ」

激しくツツコミを入れてくる銀時に何が不服なのかイマイチ理解していない源外であったが、一応ちゃんと無線機が作動するボタンを教えて実験に取り掛かる源外にさり気なく愚痴をいう銀時。

銀時たちは装置の中へと入って行き、全員入ったことを確認すると源外はドアを閉める。

「…おい、なんだこれ？ 何かすつげえ〜見たことがあるような中だぞおい」

「うおおおお！！ すごいアル！！ ガ ダムアルか！？」

「ちよつとおお！！これ著作権的に大丈夫なんでしょうねえ！！？」

上から銀時、神楽、新八の順に反応はそれぞれだった。

銀時たちが中に入ると、どう見てもガン ムのコックピットとしか見えない。

つと言つかまんまが ダムのコックピットの構造だった。

しかもちよつかりコックピットが三人分ある。

『あ…、あ…。テスト…。テスト、テスト。あゝ、銀の字。聞こえるか？』

「ああ、聞こえるぜじいさん」

『よし、操作はこつちで行うから。おめえら各自コックピットに座

るんだ』

「わあ、よかった。よし、お前ら座るぞ」

源外の言われた通りに銀時たちはコックピットに座り、その後には源外から連絡があったので銀時はボタンを押して応答に応じる。

「お前ら、座ったか？」

「ああ、全員座ったぜ」

「よし、それじゃスイッチを入れるぞ」

源外が言い切った後、すぐには中は真っ暗になり、次に赤いライトが銀時たちを照らす。

神楽は何が起きるのだろうかという期待に満ちた顔をし、対して新八は緊張した顔で辺りを見渡す。

そして、銀時はいと。勿論相変わらず、やる気のきの字の欠片もない無気力な目をしてあたりを見渡していた。

まあそんな色んな感情を待っているメンツに、源外からの通信があった。

「よし。今目的地を設定した。場所はテメーらんとこの事務所だ。無事に転送できたら連絡してくれ。そいつはたとえ宇宙空間や別次元の場所でも通信可能だ」

「ねえ、今別次元をつつた？ 今言ったよね？ 別次元って。これって別次元にも飛ばせんのか？」

「いや、そんなところには飛ばせねーとおもうがその通信機能はもしもの時だ。そいつを組み込んでいるおかげで、たとえ何処に飛んだとしても通信可能だ」

「へえ、そいつは便利なことだ」

「つつつてもあまりに遠い場所に居ると、こちら側しか通信できんがな」

「ただ俺らの事務所に飛ばすだけだろ？ だったら何にも問題ねーよ」

『ただ、間違つて別世界に飛ばしちゃうかもしれないがな。がっはっはっはっは！！』

「マジアルか。一体何処に飛ばされちゃうアルか！？ ブーチアルか！！ それともワ ピースアルか！？」

「バーカ、んな訳ねーだろーが。本当に別世界に飛べたら、時をかける少女もびつくりだ。だが行っちゃうとしたら恒例の装置が暴走うんぬんで、もしかしたら別世界に行っちゃうかもわからねーなア」

無線機で他愛のない会話をしている途端に警報が鳴り始めて赤い証明が点滅し始めた。

『銀の字！ 緊急事態だ！』

「どーしたじじい！！」

『装置が突然暴走しだした！！ このままじゃゲートが開いてテーマーらがどこか別の場所に飛んじまう！！』

「おいおい、マジかよ…！ 悪ふざけ半分で言ったらマジでどこかへぶっ飛んじまうのかよ！！？ ねえ、これって俺のせい！！？ フラグを踏み抜いちゃった俺のせい！！？」

「お、落ち着いてください銀さん！！ こんなところでテンパって立って何にも解決しませんよ！！」

「じゃテメーが解決してくれんのかよコノヤロオオオオオオ！！！！？ ちくしよー！！ こんなことなら依頼断って何時ものようにジャンプ読んどきゃよかったアーーーー！！！！」

源外は予期せぬ事態に焦り、銀時は悪ふざけ半分で言ったことが本当に起こってしまい、涙目で魂の叫びを訴える。源外は迅速に対処しようとするも装置の暴走は止まらず。

そのまま装置は転送するためのゲートのようなものが開いてしま

った。こうなつてしまつては源外でも取り返しの付けようがない。

「あああああ！！ 銀さん！！ 僕たちの体がどんどん包まれていきますッッッ！！」

「銀ちゃん！ ヘルペス！ ヘルペスミイイイイイ！！」

「ヘルプミーな！！」

『いいか、銀の字！！ よく聞け！』

「なんだ！！？」

『もう装置が作動しちまつて、お前らを転送させるゲートが開いちまつた！！ このままお前らをどこかに飛ばす！』

「そのゲートとやらを潜つた後は！！？ その後はどうすりゃいいッッ！！」

『とりあえず後はてめえらで何とかしろッ！ 俺は暴走の原因を突き止めた後にてめえらを戻す！！ 一応その無線機にも転送装置がついていて、そいつがあれば俺のところで操作して戻つてくれるはずだ！！』

そうこうしているうちにゲートは銀時たちを包んでゆく。

「わあつた！ 早くその原因とやらを突き止めて俺らを戻せよクソジジイッ！！」

『あたりめえだ！ それと銀の字ッ！！』

「ああ！！？」

『……死ぬなよッッ』

「……あたりめえだ。俺アくたばりやしねえよ！！」

『健闘を祈るぞ！！ 銀の字ッ！！』

そして、ゲートが激しく光だし銀時たちを包んだ。光は装置ごと眩く光り、そして段々弱くなると装置がオーバーヒートを起こして故障したようで煙を上げて動かなくなつた。源外は急いで装置のド

アを開けて中を確認するが。
銀時たちはどこにもいなかった。

「……また面倒ごとに巻き込まれてなきやいいだがな。必ずおめえらを戻してやるからな。それまで待つてる、銀の字」

源外は必ず銀時たちをこの場所へ戻してやると決意し、源外は早速装置の修理に取り掛かった。

今回のN・G

そうこうしているうちにゲートは銀時たちを包んでゆく。

「わあっただ！ 早くその原因とやらを突き止めて俺らを戻せよクソジジイッツ！！」

『あたりめえだ！ それと銀の字ッ！！』

「ああ！！？」

『……死ぬなよッツ』

「……あたりめえだ。俺アくたばりやしねえよ！！」

『健闘を祈るぞ！！ 銀の字ッ！！』

そして、ゲートが激しく光だし銀時たちを包み。——ものすごい轟音と共に装置が大爆発した。

「……あ」

操作室で、源外はなさけない声をあげながらその場で唾然とたっていた。そして、煙が晴れると銀時たちが真っ黒コゲでアフロヘアで

プロローグ「発明家の発明品は大抵ロクなモノがない」(後書き)

今回はここまでです。

プロローグは次回に続きます。

…まだ小説を書いて日が浅いせいかな全然グダグダですね(汗
ですが、失敗も糧にこれからも頑張って行こうと思います。

ではでは。

第一訓「お金持ちのお嬢様は人遣いが荒い」(前書き)

更新です。

∴はぁ、ゴールデンウィークは終わってまた学校が始まって忙しくなりそうです。

めんどくさいです)ノ・(

更新が遅れることもあると思いますががんばります。

第一訓「お金持ちのお嬢様は人遣いが荒い」

前回と場所は変わり、現在は深夜。

ここはとある県内にある冬木市深山町、そんな深山町の夜の街の旅館が立ち並ぶ丘の頂点にある、とある豪邸がある。

その豪邸の地下室にて、一人の少女がなにやら怪しい陣のようなものを書いていた。

「……さて、こんなものかしらね。それじゃ、チャツチャと召還しちゃいますか」

その陣を書き終え。

そんななことを言う少女の名は遠坂凜は、この冬木市のオーナーであり、魔術師でもある。

彼女が聖杯戦争なるものに参加するために、サーヴァントと呼ばれ、聖杯戦争において魔術師を守るための重大な役目を持つ使い魔を呼び出すための準備をするための魔方陣を書いていたので。

そして、その準備ができたらしく。呪文のような言葉を言う。

「素に銀と鉄。礎に石と契約の大公。祖には我が大師シユバインオーグ。降り立つ風には壁を。四方の門は閉じ、王冠より出で、王国に至る三叉路は循環せよ。」

凜がそう唱えると、陣は彼女の言葉に反応し赤く光りだす。

閉じよ（みたせ）。閉じよ（みたせ）。閉じよ（みたせ）。閉じよ（みたせ）。閉じよ（みたせ）。閉じよ（みたせ）。繰り返すつどに五度。ただ、満たされる刻を破却する」

そして少女は一言、手を自分の胸に持ってゆき、拳を握り締める。

「 Anfang (セット) 」

彼女の頬から汗が滲みだし、眉間に皺を寄せて何かの痛みに耐えるようにじっと堪える。

「

。 。 。
告げる
」

そのナニかに耐え、目を瞑りながらさらに呪文を口にする。

「 告げる。 汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。 聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ。 」

すると陣はさらに眩しく光りだし、その陣が浮き上がり凜の腰あたりに来て停止する。

そして、彼女は握っていた拳を前に掲げ、最後の呪文を口にする。

「 誓いを此処に。 我は常世総ての善と成る者、我は常世総ての悪を敷く者。 汝三大の言霊を纏う七天、抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ 」

その瞬間、あたりは見えなくなるほど眩しく光だし、凜の視界を遮る。

そして彼女は、何かを心待ちにして忌々しい光が収まるのを待つ、

つが。

「 ……はい? 」

そこに現れるはずのモノは影も形もなく、薄暗く当たりには本などが散らかっている光景しか見えなかった。

その瞬間、爆発音みたいな音が居間の方で聞こえた。

「なんでよー！ー！？」

凧は叫んで、一心不乱に大きなもの音がした居間の居間の方と駆けた。

そして居間へついて扉を開けようとするも、先ほどの爆発音のようなものが原因なのか、凧が必死にあけようとするも開かない。

「扉、壊れてる！？」

ああもう、じゃまだこのお……！！」

凧はめんどくさくなったのか思いつきり叫びながら扉を蹴り破り中へ入る。

「……………」

そして、凧は目の前の光景に絶句する。

なぜなら凧の目の前には、上から落っこちてきたのか天井に大きな穴が開き、居間は瓦礫にまみれており、赤い外套の男が白い服を着た銀髪の天然パーマの男と睨み合っていたのだ。

隣には睨みあっている二人を止めようとしている眼鏡をかけた地味な少年と。

やれやれ、と煽っている赤いチャイナ服を着た少女。そう、源外の装置でどこかに飛ばされた銀時たちである。

なぜ、このような状況になったかというところ、少し、回想に入ろうと思う。

〈回想〉

万事屋サイド

源外の装置で飛ばされた銀時たちは、ゲートを潜り、瞑っていた目を開けると。

何故か上空にいた。

銀時たちがいた高さは地上から約50M、一瞬の浮遊感を味わった銀時たちは、次の瞬間地球の引力に従い落下した。

「おいしいいいいい！！？　なんで俺たち上空にいんだあああああ
あ！！　何で現在進行形で落下してんだああ！！？　あんのジジイ、
帰ってきたときに一発ぶん殴ってやらあ畜生おおおお！！！」

「銀さああん！　そんな悠長なこと言っでないで何とかしてくださいよおおおお！！！」

「ふざけんあああああ！！　俺アサ　ヤ人じゃねえんだぞっ！
？　気がねえんだぞ！！　どうやって空飛ぶんだよこのやるおおお
おおおお！！！」

「あの〜ち〜〜へい〜〜せ〜ん〜。か〜が〜やく〜〜の〜〜は〜
〜。何処〜「おいしいいいいい！！？　神楽ああああ！！？　何悠長に
歌なんて歌ってやがんだ！！　空に上るどころか地に上ってるわあ
！　ボケがああああ！！！」

そしてとある豪邸の、しかも何故か屋根に大穴が開いており。
そこに落下していった。

〈万事屋サイド終了〉

??? サイド

凜に召喚されたサーヴァントは何故か上空から落下しており、凜の豪邸の屋根から激突する。

「っ痛、やれやれこんな召喚は初めてだ。まったくんでもないマスターに引き当てられたものだ」

屋根を突き破ってようやく何処かの部屋で止まり、あたりを見渡すと落下してきた部屋は居間のようらしく。そして、その男にとって見覚えがあった。

(……ここは、まさか遠坂の?)

あたりを見渡すように見て、そこで三人の姿があった。

今までなぜ気づかなかったのか、一人は白い服をだらしくきて、の中に黒い服を着ており、腰には木刀を差して銀髪の天然パーマで目は死んだ魚のような目をした男。

そして、一人は地味な顔立ちに眼鏡をかけており腰には銀髪の男と同じく木刀ではなく刀を差している。上は白く、下に青い和服を着た少年。

そしてもう一人は、赤いチャイナ服と自身の身長のお半分ほどある日傘のようなものを持っている少女。

サーヴァントはその三人の内、一人に唖然と釘付けになっていると、その見つめていた銀髪の男と目が合った。

「…ん？ お前だれ？ ってかこっちじろじろ見ないでくれる？俺そついう趣味じゃないから」

「誰、とは随分な挨拶だな。それに、私だって男に興味はないがね。」

おまけに天然パーマの男はこちらから願い下げだ」

「…ああん？ なんだとゴラア？ 俺だつててめえみてーなジジイみたいな髪をした男となんて願い下げなんだよ」

「…なんだと？」

「やんのかゴラア？」

「ちょ、銀さんやめてくださいよ！」

「銀ちゃん、そんな捻くれたヤツなんかやつちゃえー」

「神楽ちゃん！ 二人を煽るようなこといわないでよ！！」

そして凧がドアを蹴り破り、今にいたる。

く回想終了く

凧はこの状況に混乱しつつも思考を駆け巡らせる、この状況は一体何なのか？

誰が自分のサーヴァントなのか、そしてこの者たちは何者なのか。いろいろと思うところはあがあるが、なにより一番大事な事を確認しなければならぬことが一つある、凧は瓦礫の山を転ばないように慎重進み睨み合っている2人の近くまできて言う。

「お取り込み中のところ失礼するんだけど。この中で一体誰が私のサーヴァントなのかしら？」

「……………ん？」

睨み合っていた二人は、凧に声を掛けられ気づいたのか二人同時に凧の方に視線を向ける。

「さあ、バイト？ 何、お宅アルバイトでもやってんの？」

「サーヴァントだ。まったく…。君の耳は節穴かね？ いっその事

凜は気絶した銀時と赤い外套の男に近寄り、二人を蹴り起こす。

「くっ…痛、まったく誰のせいでもなかったと…」

「いつつ…。ったく、一体どういう教育されたんだよ…」

「ほら、おきたらさっさと起きる。ここじゃ、説明しようにも話し難いから。私の部屋ではなすわよ」

「ああん？ 別にここでもいいだろうが、ちゃっちゃてわか
つた？」：ハイ、ワカリマシタ」

銀時はこの場でもいいだろうとしたら、凜のものすごい威圧に銀時は片言になりながら返事を返す。

赤い外套の男はこれ以上逆らうと自分もまた先ほどのように痛い目を見ると思い、大人しく黙って凜について行く。

そんなこんなで、凜の寝室らしい部屋へ付いてお互いに情報を提供し合う。

銀時たちは昔、侍の国と呼ばれていた江戸に天人と言う宇宙人が往来するようになってからというもの、その面影も消えつつある中で、江戸のかぶき町というところがあり、銀時を含むまだいる侍たちが住んでいること。その江戸一番のクラクリ技師、源外の作った装置でどこかに飛ばされ、そして今にいたるということを説明した。

凜も約束どおり、自分の知っている知識を銀時たちに言う。

この世界には魔術や、魔術師たちがいるということ、そして、冬木市は二つの町で構成されていること、そして聖杯戦争と呼ばれる7人のマスターとサーヴァントと呼ばれる、英霊を使い魔に従えて殺し合いをする。

前回の聖杯戦争で大きな災害が起きたこと、その今回の戦争に自分も混ざっているなど、すべてを話した。

暫しの沈黙。

「……なるほど、貴方たちは江戸のかぶき町という町にいて。その町一番の……えっと、カラクリ技師だっけ？ その人が作った装置とやらでどこかに飛ばされてそしてここに流れついたと……」

「はい、僕たちの状況を大まかに言ったらこんな感じですよ」

「でも、まさか次元を超えて異世界に行くことができる装置なんて……。一体どんな世界よ。しかも宇宙人までいるなんて」

「それはこつちの台詞だぜ。信じられねえよ、ん〜と魔術だっけか？ そんなもん本当にあんのか？」

「確かに、そんなものが実際に存在するなんて僕も信じられませんよ」

「そうネ、なんかパツとしないアル」

「ん〜と、そうね。そこの眼鏡の貴方、眼鏡を貸してくれる？」

「え？ いいですけど、何に使うつもりですか？」

「こつするのよ」

凧はそういうと、新八から貸してもらった眼鏡を容赦なく床に叩きつける、それにより眼鏡は完全に大破した。

「アアアアアアアアアアアア！ ！？ 何するんですか！ ！ 今日ス

ペア持つてきてなかったのに！ ！？」

「おい！ お前なんてことするんだ！ ！」

「そうネ！」

「銀さん……、神楽ちゃん……」

新八は心配してくれる銀時と神楽に歓心する。

しかし、次の言葉でそれが崩れ去る。

「今叩き付けたそいつは新八の本体なんだぞ！ ！ ここに立ってるただの眼鏡掛け機だけ残っちまうだろうが！」

「あれええええええええええ！ ！ ！ ？ 銀さん！ ！ ！ ？」

「そうアル！ 新八がなくなったらこいつはただの眼鏡掛け機ネ！」
「ちよ、神楽ちゃんまで！！？ 本体こつちですから！！ 少しでもアンタらに歡心を抱いた俺がバカだったよ！！！！」

新八が必死に抗議しようとするが、それを完全にスルーされる。
悲しきかな、彼の地味さゆえにこのような扱いを受け続けている新八に合掌。

「悪かったわよ。ちよつと待ってて、今元に直すから」

「ああ？ 元に戻すつたつて一体どうやって…」

「まあ、見てて…」

銀時に訊ねられた凜はそういうと、壊れた眼鏡を拾い、ほんの少しだけまじまじと観察すると。

「*Minuten vor Schweissen*」

つと、魔術の呪文を言い。

指先をほんの少しだけ残っていた眼鏡の尖った欠片で指先を切り、眼鏡にガラスを零すと、粉碎した眼鏡はひとりでに組み合わさってあつという間に元通りに直ってしまった。
その光景に、銀時たちは啞然となる。

「はい、直ったわよ。 念のために確かめてみたら？」

「あ…はい」

新八は呆けながら曖昧に返事をし、眼鏡をくまなくみる。

「…すごい！ 本当に直ってる！！」

どこにも傷ひとつなく修復されている眼鏡に、新八は感心の混じった喚声をあげる。

「おお〜！　すごいアル！　これからは姉御と呼ばせてくださいませ
！！」

「普通に、名前でいいわよ」

神楽は江戸っ子のようなしゃべり方をしながら凜に詰め寄る。
凜は、少し照れくさそう言葉を返す。

「……こりゃ、否でも信じるしかねえみてえだな」

銀時は頭をボリボリ掻きながら目の前の現実を認めざるを得ないと悟り、凜に近寄り言う。

「さっきはあんなこと言って悪かったな。信じてやるよ、お前が魔術師だつてこと」

「信じてくれてありがと。それと、お前じゃなくて私には遠坂凜つて言う立派な名前があるのだけれど？」

「そりゃ悪かったな。俺は坂田銀時。つま、適当に名前で呼んでくれや。どうせならぎんs「私は神楽アル！」…あの、最後まで言わせて？」

「僕は志村新八つて言います。よろしく、遠坂さん」

「…無視？　無視ですか？　泣くよ？　銀さん泣いちゃうよ？」

いい終える前に神楽に邪魔をされ、さらには新八にまでスルーされて傷つく銀時。

「えっと…。銀時、神楽に…眼鏡ね。わかったわ」

「って、ちよつとおおおおおおおお！！　何で僕だけ眼鏡なん

ですか!！」

「何言ってるアルか新八。お前の名前は眼鏡であって断じて新八ではないネ」

「そうだぞ、そんなんだからお前はいつまで経っても新一になれないんだよ。少しは学習しろ眼鏡」

「んだとゴルアアアアアア!」 新八そのものを全否定かつ!

許さん! 許さんぞおおおお!!!!」

「……つぶ、あはははははは!！」

凜に眼鏡と呼ばれた新八は傷つき、さらには銀時や神楽から新八の存在を否定されて、激しくツツコム。その光景におかしかったのか、凜は御腹を抱えて笑う。

さすがの新八もそれを見て心が完全にブロークンしたのか、膝と手を突いてがっくりと頂垂れる。

さすがに悪ノリが過ぎたと、少々申し訳ないと思いつつようやく笑いが収まったのか新八に歩み寄り改めて。

「あはははは……。ごめんごめん、ほんの冗談よ。よろしくね、新八」

「まったくもう……。ホント勘弁してくださいよ」

「わかつてるわよ。 さて、次はあのサーヴァントだけどつ……
つて」

凜が赤い外套を着たサーヴァントの方を見ると。

しばらく放置されて凹んだのか、どんよりとした空気を漂わせながら、一人ブツブツと独り言を言っていた。

「……ふつ。所詮私は贗作者^{フェイカー}。このような仕打ちはなれているさ、あ
あ慣れているとも。でもこれはさすがにきついものがあるというか
なんというか、つというかも無理。ごめんセイバー、俺は限界み
たいだ。ごめん爺さん、あんたの約束は守れないや。あれ? 爺さ

んが目の前にいるあはは…さてよ爺さん。今そっちに向かうよ？
え？ 駄目だった？ そんな硬いこというなよ、アハハハハ…」
「……あゝ、悪かったわよ。暫く放っておいちゃったのは謝るから
元気出さないよアーチャー。いつまでも気にしてたらその最強の
名が泣くわよ？」
「…ふん、せいぜい忘れるなよマスター？ 己が召喚した者がどれ
ほどの者か。知って感謝するがいいさ」

凜の皮肉げな挑発の言葉にアーチャーは少々元気を取り戻したのか、
皮肉げに凜に言葉を返す。凜はさらに言い寄る。

「ええ、せいぜい私を落胆させないように頑張ってるね？ アーチャ
ー。これからもよろしくね」

「ああ、こちらこそだ。マスター」
「そのマスターって言うのやめなさいよ。私には遠坂凜っていう
名前があるんだから」

「ふむ、では凜と。ああ、この響きは実に君に似合ってい
る」
「なっ ……！ へ、変なこと言わないでよねっ！」

アーチャーの言葉に不意を突かれたのか、凜は顔を赤くしてそっぽ
を向く、その光景に銀時はニヤニヤしながら凜に言う。

「へえゝ、凜はツンデレなのか」
「なっ…！ つ、ツンデレって言うなっ…！ このバカ…！」
「あさるとばすたあっ…！？」

凜は気恥ずかしくなり、銀時の腹部に渾身の右ストレートがクリー
ンヒットし、意味不明な悲鳴を上げて腹を抱えて縮こむ。

「り、凜……。ずいぶんいいパンチもってるじゃねえかつ」

「ふん……。銀時が変なことというからでしょつ。まあ、それはおいといて。アーチャーそれから銀時たちに仕事を頼みたいのだけれど」

「ほう、君は随分と好戦的だな。それで敵は」

アーチャーが言い切る前に、ホウキとチリトリを銀時たちに投げつける。

『（ん）（え）む？』

銀時たちはそれを反射的にキャッチして、同時にそれぞれ似たような反応する。

そして、凜が一言

「下の掃除、お願い。アンタたちが散らかしたんだから、責任もってキレイにしといてね」

凜のその言葉に銀時たちは呆然とする。

その数十秒後、アーチャーが思考を取り戻したのかガツと文句をあげにホウキを握りしめて反抗する。

「さて、君はサーヴァントを何だと思っている？」

「使い魔でしょ？ ちょっと生意気で扱いに困るけど」

「」

あまりの暴言に言葉が出ないアーチャー。

そして、アーチャーは意義を申し立てようとする。

「意義あり、そのような命令はことわ」

「令呪、使つわよ？」

「む」

「あなた、さっきこの部屋に移動している途中で言ってたけど、長い命令だと効果が薄いつて言ってたけど。私のような才能のある魔術師が令呪を使って主の命に逆らうと体が重くなるんでしょ？もし私がここで令呪を使って、貴方が掃除を断るのは自由だけど。そんなペナルティがある状態じゃ、明日から戦うときに危ないんじゃない？」

「むむむ」

そう、アーチャーは居間からこの部屋へ移動する最中、令呪のことについて説明を受けていたのだ。

もし、凜が令呪を使って主の命に逆らうと体が重くなるペナルティを抱えたまま、戦闘をするなんてそれは自殺行為の何者でもない。アーチャーは凜の無茶ぶりに何も言い返せずホウキを握り締めたまま、数秒唸ると、悔しげに目を閉じて。

「了解した。地獄に落ちろマスター」

そういい、潔く凜の願いを聞き入れることになった。

その後、神楽が眠たそうに目をこすりつけて言う。

「私、いろんなことがありすぎて疲れたネ。もう掃除する気力もないヨ…」

「あら、そう。それじゃあ神楽は掃除しなくていいわよ。一緒に寝ましょ？」

「ホントあるカ！」

「ええ、いらつしやい。ふかふかよ」

「ヒヤッホーイー!!」

凜はなぜか神楽だけ掃除をさせないで、高級そうなベッドに招き入

れると神楽は思いつきりベッドへとダイブする。

「うわあ〜!! すごいふかふかアル!」

「神楽、こっちにおいで?」

「うん!」

神楽は凜の毛布の中へと行くと、相当疲れていたのであろう。

毛布の中へ入り、目を閉じたら数分とかわからずに寝てしまった。凜は残った男性陣に「がんばってね〜」と手を振って自分も目を閉じた、また本日で何度目かの沈黙。そして銀時が新八に言い寄る。

「なあ、新八」

「なんですか、銀さん」

「 どうして、お金持ちのお嬢様はこつも人遣いが荒いんだろ
うな」

「 知らないです」

新八は銀時の言葉を冷静に切り捨てる。

「 ……まあ、いつまでも愚痴を言っても仕方がない。掃除をするしか
あるまい」

「 そうですね、頑張りましょう。アーチャーさん」

「 んじゃ…、めんどくせえが。チャツチャと始めますかあ」

そして、銀時たちは瓦礫まみれになり天井に大穴が開いている居間
へと向かうのであった。

今回のNG

「扉、壊れてる!？」

ああもつ、じゃまだこのお……!!」

凧はめんどくさくなったのか思いつきり叫びながら扉を蹴り破り中へ入る。天井に大穴が開き、瓦礫にまみれた居間には、白い服を来た銀髪の天然パーマの男と、地味な顔立ちに眼鏡をかけた少年と、赤いチャイナ服を着た少女がいた。そう、源外の作った装置でここに飛ばされた銀時たちである。

「えっと、貴方たちが私のサーヴァントかしら？」

「さあ、バイト？ 何、お宅何かのアルバイトでもやってんの？」

「いや、銀さん。それは違うと思いますよ……？」

「え……、何サーヴァントもわからないの？」

『しらねえな。(知らないですね)(知らないアル)』

三人は声をそろえて言う。その返答に凧は頭を抱えながら。

「……はあ、まさかサーヴァントというものから説明する羽目になるとは思わなかったわ。……まあいいわ。ここじゃ話し難いだろうし。私の部屋へ行きましょ」

凧はそういい、銀時たちは凧の後に続く。

そして、誰もいなくなった居間に一人だけ瓦礫に埋もれた人影があった。

「……………」

その男は赤い外套をきている。男は誰もいない居間で独り言を言う。

「…ふつ。所詮私は贋作者（フェイカー）。このような仕打ちはなれているさ、ああ慣れているとも。でもこれはさすがにきついものがあるというかなんというか、つというかも無理。ごめんセイバ、俺は限界みたいだ。ごめん爺さん、あんたの約束は守れないやあれ？ 爺さんが目の前にいるあはは…まてよ爺さん。今そつちに向かうよ？ え？ 駄目だつて？ そんな硬いこというなよ、アハハハハ…」

赤い外套の男は壊れたレコードのように止まることなく一人事を言つて、最後に「星が、星が見えた…スター」つと意味不明な事を言つてそのまま気絶した。

その後、凜に掃除を负かされた銀時たちが掃除中にその男が見つかり、凜が銀時たちと間違つたとその後赤い外套の男、アーチャーに謝罪するのだった。

おわれ

第一訓「お金持ちのお嬢様は人遣いが荒い」(後書き)

今回はここまでです。

さて、次回「ルビー」さて次回は！ 第二訓「喧嘩はグーでやるべし」！ それでは「

…予告の邪魔はしないでくだふあい。(お願い&泣き

感想やご意見をお待ちしています。

第二訓「喧嘩はグーでやるべし」（前書き）

申し訳ございません！

学校が忙しく更新がとても遅くなり申し訳ございませんでした。

今就職活動だとか検定試験でいっぱいいっぱい中々小説を書き上げることができませんでした。

今後から更新が遅くなるかも知れませんがよろしく願います。

それでは本編どうぞ！！

第二訓「喧嘩はグーでやるべし」

「んっ…。もう朝か」

朝の日差しに目が覚めたのは、昨夜アーチャーと一緒に自分たちによってメチャクチャになった居間を掃除をし、ようやく掃除が終わり一足先に疲れた新八だった。

ふと新八は柱時計を見ると時刻は6時を差している、新八がいつの間にか自分に掛けられていた毛布を取ってテーブルにおいておいた眼鏡を掛けると、ふと横から声を掛けられた。

「おや、おはよう新八。君は目覚めるのが少し早いのだな」

「あ、おはようございます。アーチャーさん、ええ朝の早起きは侍の嗜みですから」

「ふむ、それはよい心がけだ。それに比べ、このグウタラ男ときたら…」

アーチャーは新八の心がけに感心し新八を褒め、そんな新八と打って変わりソファに横たわり、鼾を掻いて寝ているグウタラ男銀時をジト目で見る。

「…まったく、昨夜は掃除をするとか言っておいて適当な言い訳をして自分はそそくさと寝てしまうとは。正直、このような男が君の師に勤まるのか？」

「……あはは、確かにアーチャーさんの言つとおり普段銀さんは無気力ですけど。ここぞというときにはちゃんと頼りがいのある人ですよ」

「…ふむ。そうか、これは無粋なことを聞いてしまったな。すまなかつた」

「いえ、気にしないでください」

「そうか、そういつてくれると肩の荷も軽くなるというものだ」

同じ家事や掃除をしているだけあるのか以外にもアーチャーと意気投合する新八は、ふと気になったことを口にする。

「そういえば、アーチャーさんは昨日寝たんですか？」

「単刀直入から言うて寝ていない、しかしなぜそんなことを聞くのだ？」

「いえ、深い理由は特、にないんですけど。ふと気になったものから」

「ふむ、新八にまだ説明をしていなかったな。サーヴァントは聖杯によって導かれ、召喚するマスターの魔力を借りて召喚される。ここまででは話したな？ サーヴァントはマスターが聖杯を手にするまで敵を倒し、その最中マスターも守らねばならない。そこでマスターとサーヴァントが睡眠をとり、突如敵に奇襲を受けてマスター共々サーヴァントもやられてしまうだろ？ 故にサーヴァントは滅多なことがない限り、睡眠をとる必要がなく。周囲を警戒して他のサーヴァントからマスターを守るというわけだ」

「なるほど、サーヴァントというのはマスターを守るために戦う従者のようなものですから寝てるなんて悠長なこととはできないんですね」

「そういうことだ。さて、説明はすんだことだ。私が漏った紅茶でもご馳走しよう」

「あ、いただきます」

アーチャーはサーヴァントの役目について説明をすますと、手馴れた手つきでティーカップを持ち出し、綺麗な赤色をした紅茶を漏る。

新八は椅子に腰を下ろし、アーチャーに差し出された紅茶に一口だけ口を付ける。

程よい熱さとあまりの美味しさに言葉を失う新八、すると横でアーチャーが新八の反応に満足そうに頷く。

「感想が聞きたかったが、その顔を見るとどうやら聞くまでもないようだ」

「……すごくおいしいです。こんなに美味しい紅茶を飲んだのは生まれて初めてです。アーチャーさんは紅茶を漏るのがお上手なんですね」

「それを言われれば、こうして紅茶を漏ったかきがあるというものだ。それにしても、どうやら生前の私は家事などをこなしていたよつかもしいな」

「へえ〜。生前のアーチャーさんが一体どんな生活をしてきたのかとても気になりますね。…それにしても」

新八はそういうと改めて居間のあたりを見渡す。

昨日アーチャーと一緒にしていたから分かっているが、あれほどメ

チャクチャになった瓦礫が跡形もなく綺麗に元通りになっていて新八は感心しながらも空いている椅子に座っているアーチャーの方を向いて言う。

「本当にすごいですね、あれ程瓦礫に埋まっていた居間が跡形もなく綺麗に元通りになってるなんて。本当アーチャーさんに教わりたくらいですよ」

「ふむ、家事ならば私が教えるところまでは教えられるだろう。聞けば君は料理もしているのだろう？ ならば料理も私流ののでよければ伝授しよう」

「え？ いいんですか？」

「ああ、私でもよければ教えるところまでは教えるつもりだ。…ただし、私の教えは厳しいぞ？ 果たしてついてこれるかな？」

「もちろん受けて立ちますよ。どうぞお手柔らかに」

新八はアーチャーの視線を真正面から受け止め、さらにやる気を出したのか新八もアーチャーに不敵に笑いながら見る。

そんな挑戦的ならみ合いをしていると、突然居間の扉が開かれ二人はそちらの方へ向くと、凜と神楽が入ってきた。

「……うわ。見直したかも、これ」

「おお、すごいアル。メツチャ綺麗アル」

凜と神楽は入ってきたところで立ち尽くし、元通りになっている居間に感心していると。椅子に座っているアーチャーが凜と神楽に挨拶をする。

「おはよう、凜、神楽」

「おはよう、アーチャー。それにしても随分とリラックスしてるわね。居間をすき放題使ってくれちゃって」

「ああ、一晩過ごした部屋だからな。どこに何があるかは把握したよ。それとついでに厨房も片づけておいた。もう少し荒れているかと思っただが、なかなか気の行き届いた厨房だ。一人暮らしの洋館にしては上出来だな」

「何人ン家でふてぶてしく言っているアルか。お前は家政婦さんかコノヤロー」

「…別に、私は家政婦でも何でもないのだが…。まあいい、私が漏った紅茶をご馳走しよう。これで眠気も覚ますといい」

そういい、アーチャーは席を立ち、淀みのない仕草でまた新しい二人分のティーカップを持ち出して紅茶を漏っている。

そんな光景に二人は色々と突っ込もうと思っただが、不思議と横やりを入れる気になれなく、そのままアーチャーの一連の仕草を見入る。

「…まあいいけど、疲れてるのは事実だし飲むわ。座りましょう、神楽」

「うん」

凜と神楽は空いている椅子に座ると、ふと凜は新八に気づいたのか新八の方を向いて、その目線に気づいたのか凜の顔を見ると挨拶をする。

「あ、おはよう。凜さん、神楽ちゃん。アーチャーさんの紅茶は絶品だから一回飲んでみるといいよ?」

「ああ、居たのね新八。存在感薄かったから気づかなかったわ」

「つてちよつとおおおおおお!! 何で朝から僕こんな扱いな?!?」

「何言ってるアルか新八、存在の薄さがお前のウリアル。いつになつたら気づくアルカ?」

「それは地味って言ってるのか!!? 舐めるなよ!! 空気は個性って何処かの偉い人が言ってたんだぞこのやるおおおおお!!」

新八は必死に抗議しようとするも、悲しきかな誰も聞いちゃいねえのである。否、一人居た。白髪頭の赤いブラウニーこと、アーチャーが新八をフォローする。

「そつだぞ、いい加減にしたまえ君たちは」

「……アーチャーさん」

新八は唯一、自分の味方が居てくれたことに猛烈に感激していたつがしかし。

「もう手遅れかもしれないが、彼だつて必死にその存在感の薄さを少しでも下げようと努力しているのだ。そのこと（存在感）だけは触れないであげようじゃないか。世の中には彼と同じような者がた

くさんいるんだから……」

「アーチャーさん!!!? フォローになってるんですかそれ!!!?」

微妙にフォローになってないアーチャーの言葉に、新八は大声で叫びながらシャウトする。そんな大声でツツコンでいる新八の声ですら、ソファで寝ている銀時はまったく起きる気配がない。

ある意味アーチャーよりというか、今更ではあるがアーチャーよりふてぶてしい。

「まあ、そんなことより今日学校に行くから。神楽たちは家で待機してて、一応地図は渡しておくけど、下手に動かれると他のマスターたちに勘付かれる危険性があるから。まああんた達是一般人と差ほどかわりないから、多分大丈夫だろうと思うけど　　って、美味しいわねこの紅茶」

「待て、凜。学校に行くだと?」

「ええ、何か問題あるかしら、アーチャー」

「……問題はないが、しかし」

アーチャーはいいよどむが反論はしなかった、昨日の晩で遠坂凜という人間が一度決めた事を覆さない性格と理解したからなのだろう。

アーチャーは皮肉屋だが妙に素直なところがあり、認めた事柄に文句をつける事はない。　要するに不器用な忠義者なのである。

　　つとは言っても、これは彼女の直感のようなものみだが。

「別に、あなたが霊体化して影から援護してくれればそれでいいわ。

まああれだけ人が多い場所では下手に手を出さないでしょうし、それにマスターはもう一人後継者はいるけど、そいつはマスターになるだけの魔力がないから大丈夫よ。他のマスターの大半は外からくる筈だし、そんな連中がまさか学校にやってくるなんてことは流石にないでしょ」

「確かに、今の段階ではそうかもしれない。が、しかし凜、世の中には何事にも例外が存在する。もし、学校に君の知らない魔術師がいたらどうするすのだ？」

「だから大丈夫だって、それじゃアーチャー。あなたは霊体化してついてきて、それで新八たちは…。そうね、その格好じゃ出かける時町の人たちに怪しまれるから、銀時と新八には父さんの使ったコートを渡すわ、神楽は私のコートがあるからそれを着て。カギだけど、玄関の上履きの引き出しの上においてあるから出かける時はそれでカギをかけて」

「分かった、ありがとう凜さん」

「どういたしまして。それじゃあコート取りに行くわね」

凜は居間を後にしてコートを取りに行く、残っていた三人は暫し沈黙したが、アーチャーは新八に訊ねてきた。

「新八、一つ訊きたいことがあるのだが。…このグウタラは何時になつたら起きるのだ？」

「ああ…、それでしたら無視してもいいですよ？ 多分その内起きるだろうし、起きたら神楽ちゃんと一緒にこの町を少し見学しに行くつもりです」

「ふむそうか、君たちは魔術師ではないしおそらく大丈夫だと思うが…、だが気をつけたまえ。もしもの時もある」

「はい、わかりました」

「お待たせー、コートとそれと地図取ってきたわよ」

新八とアーチャーの会話が丁度終わった時に制服姿の赤いコートを着た凜がコートを取りに戻ってきた、それぞれロングコートとコートを3着と地図を持ってきている。

「それじゃこの長いコートが銀時の着るコートで、この丈が短いのが新八、この赤いのが神楽のね」

「ありがとうネ、凜。大事に着るアルよ」

「そこまで大げさに言わなくてもいいわよ、それじゃ私は学校に行くわね」

「分かった、気をつけてね。凜さん」

「行ってらっしゃいー」

「…うん、行ってきますー！」

少し間が空いたが、凜は清々しい顔で新八たちに答えると凜は居間を後にして学校に行く、凜は前回の聖杯戦争で凜の父は死んでしまい、母も同じく死んでしまった。

昔は妹も居たのだからあるときに別の魔術師の家に養子として引き取られてからというもの、今まで凜一人で生活して来たのだ。凜は、家族ができたようで嬉しくなったのだ。

そんな気分が有頂天な凜にアーチャーは霊体化して後に続いた。

さてつと新八はこの後どうするか考えていると、ソファで寝ていた銀時が起きた、上半身を上げてくあつと欠伸を掻く。

「おはようございます、銀さん」

「おうっ」と返事をした銀時は、部屋を見渡す。新八はそんな銀時を不思議に思い訊ねた。

「どうしたんですか？ 銀さん」

「…いや、夢才ちゃんて展開はねえなっと思ってただけだ」

「まあ、銀さんの言うことも分かる気がします。僕もまだイマイチ実感が湧きませんし」

「そんなことより銀ちゃん！ 外に出かけようヨ！！ 私色んなところ見て回りたいアル！！」

「んなこと言ったって、この町のことよくしらねえし、出て行ったら迷子になるだけだろうが」

「実は凛さんから地図を貸して貰ったんですよ、ですから一応出歩くことは可能です」

新八の言葉に少し間をおいた後、銀時は行くことを承諾する。

「マジでか、ああ…んじゃまあ行くか」

「ヒヤッホーイ！」

「そういえば凛さんが、この格好で出歩くのはさすがに目立つから銀さんはこのロングコートを着てくれって言っていましたよ」

新八はそういうと銀時にロングコートを手渡し、新八と神楽はすでに準備ができているらしくそれぞれ多少ぶかぶかな赤いコート、新八は黒いコートを着ている。

ちなみに、地図を持っているのはもちろん新八である。

銀時も黒いロングコートを着ると、ほぼ丁度いいサイズだったらしく綺麗に入った。

そして、銀時たちは外に出てカギを閉めて冬木市の町を歩く。

ここから先は歩いて回るだけなので、こちらは割愛とさせて頂きたい。

なんやかんやで色々歩いて回った銀時たちは、
新都のとある公園に着いた。

「どうやら、ここが新都の中心みたいですね。それにしても広いなあ、こんな広い公園だったら子供たちの遊び場やペットの散歩スポットになってもおかしくないのに……。人気がないですね」

「ああ、それに。ここはア確か」

「はい。凧さんが言っていた聖杯戦争、その前回の聖杯戦争の終決の地。現場をそのまま公園にしたところらしいです」

「なるほどなあ、通りで胸糞わりい訳だ。こんな公園、誰だっけ居たくねえわな」

「…確かに。正直僕ももうここから居なくなりたい気分です」

そう、ここは前回の聖杯戦争が終結した場所なのである。

凧自身もそのことはあまり詳しい事情は知らないようだが、その聖杯戦争によってとてつもない大災害が発生、この市の大半の町が焼け野原になり大勢の死者を出したのだと言う。

すると、銀時の横に居た神楽が怯えており、銀時に抱きついてきた。

「…銀ちゃん、ここなんか嫌アル……」

抱きついてくる神楽の頭を優しく撫でる銀時。

銀時は、とある戦争　攘夷戦争というものに自分も参加し、敵からは大いに恐れられ、味方からは畏怖されていた鬼神、『白夜叉』とうたわれる程の修羅場を潜ってきたのだ。

なまじ、彼自身も鋭い靈感の持ち主故に、この公園から漂う異常な空気に気づいたのだろう。

新八や神楽も銀時と共に幾多の修羅場を潜ってきた、銀時程感じると言うわけではないが、それでもこの公園から漂う只ならぬ雰囲気、不快感と共にちょっとした恐怖を感じていたのだ。

「それじゃ、行くか。こんなところに何時までも居てもしやあねえしな。…神楽もそれでいいな？」

「……」

神楽は銀時に抱きついたまま首を少し縦に振って承諾して、新八も「わかりました」といいこの公園を後にしようとする。

「……（それに、この公園に着く少し前あたりから俺たちの後をついてくる奴がいるしな）」

「銀さん？」

「……んや、なんでもねえよ。早く行こうぜ」

未だに立ち止まっていた銀時に新八は振り返り問いかけるが、何

もないと言つて一人そそくさと足を進める。

そして、銀時はさつきから自分たちが何者かに後を付けられていることを知っていたのだ。

その者が何者なのかは分からないが、とりあえずはその後をつけている者をあえて振り回そうと考えている銀時。

暫くの間銀時たちは先ほど行った場所を回り、これでもかというほど付きまとう者を振り回して、ついでに凧から予め貰っていたお金で夕食も済ませる。

そして、時刻はいつの間にか時刻は8時になろうとしていた。

深山町に戻ってきた銀時たちは、凧の家まで歩いている途中コンビニを見かける。

「ん？ コンビニか」

「あ、本当だ。やっぱりこの世界にもあるんですね？」

「何アルか銀ちゃん？ またジャンプあるか？」

「ああ〜でもなあ〜この世界にジャンプがあるかどうか……ってジャンプウウウウウウー!!」

銀時は、コンビニの陳列の裏側に飾ってある雑誌の中にジャンプが混ざってたのを見かけると目にも留まらぬ速さでそのジャンプに食いつく。

「あの〜銀さん？」

「わりいな、ぱっつあん。俺暫くジャンプ立ち読みしてくるわ。お前らは先に凧のところに帰っててくれや」

「もう遅いですよ？ 早く帰りましょうよ銀さん」

新八の言うことを無視して銀時がそういつとそそくさとコンビニの中に入り、雑誌が陳列されているところにつくとジャンプを手に取りそれを読み始める。

「…はあ、全くあのダメ侍は。仕方ないや、行こう神楽ちゃん」
「分かったアル」

新八と神楽は銀時をコンビニに放置して先に凧の家に帰って言った。

そして、銀時がなんやかんやとジャンプを読んで、ふと銀時は時計を見ると時刻はすでに11時半刻を回っていた。

銀時は「やべっ、そろそろ帰らねえと凧が怒るな」と言ってジャンプを買おうとするが、お金が足りなくて銀時はジャンプを買うのを諦めてコンビニを出て行く。

夜の肌寒い風が吹いてきて「さぶっ」っという銀時は、深山町を歩いているときにとある武家屋敷の近くを偶然通りかかる。

「すげえ広い屋敷だな。こらぁ新八んとこよりでかいんじゃないか？」

そんな悠長なことを言っていると、ふと銀時の向かいから2人の影が見える。

その影はどんどんこちらに迫ってきて、そして電柱の蛍光灯の明かりでその影が何者なのか、言わずもがな銀時も知っている人物だ

った。

「凜じゃねえか、どうしたんだ？ 何か学校に忘れもんでもしてきたのか？」

「なっ、銀時！！？ アンタ今までどこに言ってたのよ！！」「いや、どこってコンビニに居たけど。新八たちに聞いてなかったのか？」

「そりゃ聞いてたけど…、ああもう！ 今はそれどころじゃないのよ！！ 言いたいことは色々とあるけど今は」

「うお！ なんだ！！？ この光は！」

「うそっ、まさか7人目のサーヴァント！！？」

「なっ？ おい、7人目のサーヴァントってもう出てきたのか！！！」

凜が言いかける前に、武家屋敷の塀向こうが眩く光りだした。そして、光が止み。暫くすると塀の向こうから一人の影が飛び降りてくる瞬間に銀時たちに迫ってきた。

「っ！！！？」

銀時はずつさに洞爺湖を抜いて防ぐ体制をとると、ギリギリのところで見えない何かを防ぐがその瞬間。

まるで、大砲でもくらったかのような物凄い衝撃が銀時の木刀から全身に伝わってくる。

「(っく！ なんて重い一撃してやがる！！！？)」

銀時は辛うじて踏ん張り、とめるとその重い一撃を放った人物が声を放つ。

「……おいおい、いきなり人に刃物を向けるなって。父ちゃんに教わらなかつたのかいっ？」

「ほう。私の一撃を止めるとは、中々の腕前だ。だが、次はないぞ」

凜とした声で銀時に言ってくる人物は青い服の上に銀色の鎧を付けた騎士の少女だった。

そして言葉を言い終えると続けざまに2撃目を放とうとする少女、銀時は勘を頼りに少女の放つ剛剣を辛うじてとめるが、さらに追撃を続ける少女。

こんな可憐な少女がありえない一撃を放つことに驚くが、銀時にはそれよりももっと驚くべきことがあった。

「ツチイ！！（一撃一撃が重くて早い上に、獲物が見えねえ！！）」

そう、少女が持っているはずの獲物が見えないのだ。

通常は、獲物は見えて当たり前のだが、目の前の少女の持っている獲物は全く見えない上に、なにやら風のようなものを纏っている。

銀時は、彼女が持っているそれを剣であると推測する。

そうしているうちに、銀時は少女の放つ剛剣を9合も止めると、

少女は一旦攻撃をやめて間合いを取る。

まだ余裕らしく、全く息切れしていない少女に対して、銀時は受け止めるだけでも精一杯らしく肩から息するほど体力を消耗していた。

「敵ながら見事だ。私の剣を9合受けきるとは、人間にしては大したものだ」

「こっちは止めるのに必死だったのに、お宅はまだ全然余裕ですかい。何食ったらそんなに馬鹿力になるんだ？」

「これから死ぬ貴方には知る必要はない。このまま貴方は私に倒される運命なのだ」

「嫌だね！ そんな運命、あいにくと最後まで天寿をまっとうしてやるよこのやるおおおお！！」

銀時はそういうと少女へ突っ込んでいき、一撃を入れようとするがいなされ、体制を崩す銀時に終わりの一撃を入れようとする少女。

「銀時！ 避けてええええええ！！」

「アーチャーのマスターよ！ もう遅い！！」

そして、その一撃は銀時を一刀両断　　をすることはなかった。

「なっ！！？」

「えっ？」

体制の崩れた状態から銀時は身を振り少女の一撃をかわす、少女は避けられて呆気に取りられている隙に剣を弾かれて少女の懐はがら空きになる。

「な、しまった！！」

少女は弾き飛ばされた剣を一瞬だけ見て再び銀時を見て、そして驚愕した。

さっきまで自分と対峙していた男は、無気力な霧困気に死んだ魚のような目をしただらしない男だった。

しかし、今日の前にいるのは死んだ魚のような目は獲物を狩らんとする鋭い目をした獣が少女の目の前にいた。

そして銀時はそのまま木刀を振り下ろし直撃　　はしなかった、寸でのところで銀時は止めたのだ。

「はあ〜い終了お〜、あ〜銀さん疲れたわ」

銀時は木刀を腰にさしてやる気のない声で言う。

少女はそんな銀時に納得できないのか、食って掛かる。

「待て！」

「ああ？」

「あのまま振り下ろせば確実に私は直撃を受けた、のになぜあそこで止めたのだ。情けをかけたつもりか！」

「情けだあ？　そんなもんお前にかけるぐらいならご飯にでもかけ

るらあ。…それによお〜」

銀時は少女に向き直してやる気のない、しかし真っ直ぐに少女を見て言った。

「喧嘩つてのは誰かを守るためにやるもんだろあ？ 俺はもう守つたよ」

「ではあなたは、何を守つたのですか？」

「凜と、そのいけすかねえ白髪ヤローと。」

俺の武士道だ」

少女は銀時の目を暫く見据えていると、目を閉じた。

「……完敗しました。これでは、私が負けるのも領けません。なるほど、あなたは強いんですね」

「別に、俺アただ守るもん守つただけだよ」

銀時少女の後ろを向いて啞然としている凜の元へと向かった。

すると、屋敷の方から制服姿の赤毛の少年、衛宮士郎が出てきて少女の名前を呼ぶ。

「待て、セイバー！！ ……つてあれ？ これ、どういう状況？」

「こんばんは衛宮君、ちょっと今から話があるから中で話さない？」

「えっ、と遠坂！！？ ……つて遠坂、なんか怒ってないか？」

「いいえ、怒ってないわよ？」

士郎は凜がいることに驚愕し、凜は笑っているものの目が全く笑っていないスマイルで士郎に言う。

その後凜たちが来たところから、凜の名を呼び新八たちが駆けてくる。

「何かどんどん人が増えてきなあ〜」

「そんな悠長なこと言ってる場合じゃないわよ…。はあ、頭痛くなってきた」

「お前はいちいちカリカリしすぎなんだよ。カルシウムとれ、そうすれば全てうまくいく」

「うまくいってないからこんな状況になってんでしょー!!」
「どぶろおー!?!?」

銀時は変な悲鳴を上げるとその場で崩れ落ちて気絶した、凜はそのまま振り返り士郎の近くへより。

「ね？ 早く入りましょう？ 外は寒いし」

「あ…、ハイ」

凜の有無言わさない笑顔で言う、衛宮の第六感がこれ以上凜を逆らってはいけないと警告しているので、士郎はぎこちなく縦にふり、銀時をそのまま放置して家の中へと入った。

第二訓「喧嘩はグーでやるべし」(後書き)

今回はあまり長引かせたくなかったので、急いで書いて色んなところ
が抜けてることがあるかもしれません。

アーチャー「ふむ、今回は私が次回予告をする番か。それでは、率
直に使命を果たすでしょう。」

次回、Fate/Unlimited Silver Soul。

第三訓「人の話はしっかり聞きましよう、お母さんとの約束よ！」
だ。 作者よ、あまり無理はせぬようにな」

…あい、善処しまふ…。(ガクツ)

さくしゃ は ちからつきた！

ざんねん！ さくしゃの しょうせつは ここで終わってしまった
！！(コラ)

それと、今回はNGコーナーはお休みです。

次回のNGコーナーをお楽しみに！！(できたら

第三訓「人の話はしっかり聞きましよう、お母さんとの約束よ！」（前書き）

そういえば、言い忘れていましたが。

最初の始まりが1日早まっている以外は、f a t e本編自体の時間帯は本編どおりにやろうと思っています。

オリジナル展開も混ざりながら本編を進められるか不安ですが、どうか最後までお付き合いください。

後、今回は少し短めです。

それでは始めます！

第三訓「人の話はしっかり聞きましよう、お母さんとの約束よ！」

士郎の屋敷の中に入った凧たちは居間へ付き、実は聖杯戦争のことや魔術師としても何も知らない素人と知って呆れながらも説明をしてあげた。

それを聞いた士郎は、初めは参加しないと云っていたが、その一言で凧はカチンときたらしく、士郎にマスターとしての心得と聖杯戦争について全て無理矢理叩き込み、士郎は渋々納得した。

ちなみに、その隣で新八たちは説明している凧たちに粗茶を出して、何時の間にやら復活していた銀時とセイバーと一緒に凧の話しの邪魔をしない程度の声で雑談をしていたが、自分たちも片耳をかたむけて凧の話しを聞いていた。

粗方の説明を終えた凧は立ち上がり士郎を何処かへと案内すると言う。

「それじゃ、行くわよ。衛宮君」

「え？ 行ってくつて、どこに行くんだ？」

「もちろん、隣町にある言峰教会によ。あそこで聖杯戦争の正式にマスター登録を済ませるから。ほら行きましよう」

こうして、銀時たちは外へと出て言峰教会というところへと向かって歩いていった。

「そういえば、銀さん。僕たちなんだかんだでまだこの二人と自己紹介済ませてませんよね？」

「ああ？ ああ、そういやあそうだったな。んじゃま、チャツチャと自己紹介すつか」

「了解です」

歩みながら新八はそういうと、土郎とセイバーの方に顔を向き、自分の名前を言う。

「俺は坂田銀時。万事屋銀ちゃんってこのオーナーだ、よろしく」
「同じく、僕は銀さんの営んでいる万事屋銀ちゃんの従業員で、志村新八です。よろしく、それと僕の名前は名前で呼んでもいいですよ」

「私は万事屋で可憐で一番セクシーな神楽アル！ よろしくネ！」

銀時たちは自分の名前を言い、土郎とセイバーもそれに答える。

「俺の名前は衛宮士郎って言います。どうぞよろしく」

「私のクラスはセイバーと言います。ですので、セイバーとお呼びください」

「おう、こつちこそよろしくな。んじゃ、土郎とセイバーって呼ばせてもらうわ。それと、俺のことは好きに呼んでも構わねえぜ？」

「それじゃ、俺は銀さんって呼びますね」

「それでは、私はギントキと。うむ、この響きは実に貴方に似合っています」

「別に言うほどいい名前じゃねえよ」

銀時は自分の名前をあまり褒められたことがなかったので、頭をボリボリ搔いて照れ隠しをする。

色々言おうと思っていて銀時だが、「ま、いつか」といって気にしなかった。

なんやかんやでお互い自己紹介をした銀時たちは、なんやかんやで言峰教会についた。

着いた初めに銀時が言峰教会を見た感想を言う。

「ここが言峰教会ってところか、でかかって言うほどじゃねえが何

か威圧感があんな」

「そうですねえ。僕はあんまり教会は見たことはないですけど、教会ってこんなに威圧感があるものなんですか？」

「ん〜、多分この言峰教会ぐらいじゃないかしら？ …まあ、この教会の神父がかなり変わってるから」

「変わり者？ 遠坂、それって一体どういうことなんだ？」

「まあ、会えばわかるわよ」

言峰教会へ入ろうとする凜と士郎に、銀時は「ああ、そういや」と言って凜に言い寄る。

「凜。そういえば、俺たちも中に入った方がいいのか？」

「当たり前でしょ。異世界から来たって言っても、あんたたちはあくまで一般人なんだから」

「だよなあ〜、ああ〜めんどくせ」

銀時は心底めんどくさそうにボリボリと頭を搔くものの、なんやかんやで言峰教会へと入っていきこうとするあたり銀時らしい。

後、セイバーはもしもの時のために外で警戒しながら待機するようだ。

セイバー以外の全員は凜を先頭にて教会の扉を開けて中へ入る、奥にある祭壇の近くに一人の神父服を着込んだ男が一人立っていた。

「こんばんわ。来たわよ綺礼」

「やっと来たか。もうこないものかと思っていたが。それで、凜。その者たちは？」

「こいつらは一般人よ。後、7人目のマスター登録をさせにね」

「ほう、7人目のマスターが決まったか。して、誰かマスターなのだね？」

綺礼は銀時たちの中からマスターを見定めるかのように見る。
銀時と神楽は長くなりそうな話になりそうな雰囲気欠伸を描く。
そんな二人を無視し、士郎は答える。

「俺だ」

「君が7人目のマスターか」

「こいつにはマスターとしての心得とか聖杯戦争のことは、大体のことはこいつの能天気な頭に叩き込んだから、後は参加するか否かだけよ」

「そうか、それで、少年。君の名はなんという？」

「……衛宮士郎」

「衛宮、士郎」

「……え？」

士郎が自分の名を口にしたとたん、綺礼の雰囲気が変わった。
先ほどはまるで虚無のような何も無い雰囲気から、まるで喜ばしいモノに出会えて喜んでいるように笑っていた。

「そうか、お前が。して、聖杯戦争に参加するのかね？ 衛

宮士郎」

「ああ、気乗りはしないが。十年前の火事の原因が聖杯戦争だっていううんなら、俺は二度も起こさせはしない。こんな馬鹿げた戦争を終らせてやる」

「この瞬間、今回の聖杯戦争は受理された。これよりマスターが残り一人になるまで、この街における魔術戦を許可する。 各々が自身の誇りに従い、存分に競え合え。それで、その一般……申し訳ないのだが。そこで寝ている者を起こしてはくれぬか？」

凜と士郎と新八がそちらの方を向くと、銀時と神楽が椅子でふてぶてしく寝転がっていた。

「って何寝てんのよあんたらああああ!!」

「あいるびいばっくっ!!!?!」

凧は驚くほどの脚力で銀時と神楽へと跳び、何故か銀時だけに力カト落としを決め、銀時はわけのわからん奇声をあげて夢の世界から戻ってきた。

銀時が顔を上げて見上げ、銀時の前で腕を組んで仁王立ちをしている凧に怒って声を荒げる。

神楽はその銀時の声に「うるさいアル…」と目を擦りながら起きる。

「いきなり何しやがんだテメー!」

「うっさい! 寝てるあんたが悪いんでしょ!!」

「しゃーねえだろ!! 今何時だと思ってるんだ!! もう深夜だぞ深夜!! もうガキは寝てんだぞ!? こちとら眠たくて眠たくてバーン いっちまそうなくらい眠いんだよコノヤロー!!」

「そんなの私だって同じよ!! 私だって今寝たらデーンにでも行けるわ!!」

「マジアルか、寝たらあのミーンに会えるあるか? デーンのキャラクターたちに会えるアルか!!?」

「おiiiiiiiiiiiiiiiiiiii!! 何色々とまずい発言してんですかアンタら!! 作者がかなり嚴重な伏字してるからってそんな発言ばっかりしてるとこの小説終わっちゃうですよ!!?」

銀時たちが色々この小説が強制終了してしまいそうなやばい発言に、新八が大声を上げてシャウトする。

そんな新八に銀時は冷静に言い返す。

「大丈夫だって、作者もきつとうまくやってくたろうさ。主に檻の中で」

「おいしいおいしいおいしい！！ それもう大丈夫じゃねえだろおおおお！！！ 作者捕まってるじゃん！？ この小説終了しちゃってんじゃねえかああああ！！！」

『……………』

平然とボケる銀時に、かなりの大声を上げてツッコミを入れる新八。そんな光景に士郎と、流石の綺礼も啞然としていた。

数秒後綺礼は何とか復活したらしく、割かし大きく咳ごみをする。銀時たちは一旦喋るのをやめて綺礼の方に向く。

「…して、あなた達はどうしましょう？ ここに入れば安全です。聖杯戦争が終わる間、ここに匿ってあげましょう」
「……………」

綺礼の覗き込むような目線を真正面から見る銀時、そして数十秒後銀時は答えた。

「別にココに居る必要はねえさ、自分の身は自分で守れるしな…それ」

「それに、なにかね？」

「それに。俺アたとえ英霊だろうがなんだろうが、俺アこいつらを守ってやるさ」

「守るつとは大きく出たな。サーヴァントは人間を超越した存在、そのサーヴァント相手に守れるのかね？ まさか、その衛宮士郎のように正義を語るつもりなのかね？」

「いや、俺アそんなそこまで言える程大層な人間じゃねえさ。…だかな」

銀時は一旦言葉を区切ると、腰から洞爺湖を抜き綺礼に向ける。

「俺のこの剣、こいつが届く範囲は俺の国だ。俺の国を荒らす奴は、たとえ英霊だろうが神だろうが。全力でぶった斬る」

銀時は真っ直ぐに綺礼を見据える。新八と神楽はいつもどおりの銀時の言葉に満足したのか、うれしそうな表情をしていた。士郎と凜は銀時に見惚れていた、その嘘偽りのない強い意志と。その大きな背中に。

「…つま、そういうこつた。だから俺たちアここに匿ってもらう必要もねえよ。んじやな、邪魔したぜ」

銀時は洞爺湖を腰に差し、後ろを向いて教会の扉を開けて出て行く。新八と神楽もそれに続く。

一足先に外に出ると、春が近いといってもまだ冬の名残があるのか肌寒い風が吹いていた。

すると、セイバーは銀時が銀時出てきたこと気づき、近づいてきた。

「ギントキ、話は終わったのですか？」

「ああ、もうそろそろ士郎と凜が出てくるだろうよ」

「そうですね。それとギントキ、先ほど剣を交えた感想をまた一度。ギントキ、貴方は強い。実際に剣を交えたからわかります。その木刀からは神秘を感じますが、あなた自身は何の神秘も感じない、尚且つ人の身でありながら、あなたはサーヴァントとほぼ対等の強さを持っている」

「……別に、そこまで言われるほど強い奴じゃねえぜ？俺ア」

「いえ、あなたは間違いなく強い。私は貴方ほどの強いものは見たことがない…とは言えませんが、それでも貴方の強さは私の中では五本指に入る。かつて、あなたは名のある武士だったのでしょ」

セイバーが銀時を大いに評価する、セイバーのその言葉に銀時は空

を仰いぐ。

「……俺は、そんな大層な人間じゃねえさ」
「ギントキ？」

銀時は綺麗に輝いている星空を仰ぎ見ている銀時を見ていたセイバーは、彼の表情がどこか悲しそうなのか不思議に思ったが、触れてはいけないと察して深くは追求しなかった。

新八と神楽は、銀時の生い立ちを桂小太郎という、銀時の古くからの知り合いから聞かされたことがあったため、二人も気まずかった。

「…そんなことより、羨ましいよなあ」

「？ 何がですか？」

「だって、サーヴァントつてのはアレだろ？ 魔力の塊見たいなやつなんだろ。それだったら、でっけー光線みたいなのとか卍解みたいなものとか、後某管理局の白い悪魔のでっかい魔砲とか使えんだろ？」

「銀さん、いきなりなんでそんなこと聞くんですが…」

「だってさあ、やつぱ魔力とか持つてたら何かエネルギー弾みたいなものとか放てそうじゃね？ ぶっちゃけかめはめ波とか打てそうじゃね？ 何か色々打てそうじゃね？」

「…いや、だから何でさっきの話の下りからいきなりそんな話に持ってくるんですかアンタツ！！ つかそんなことセイバーさんが知るはずないでしょ！！？ ……そうだよね？ セイバーさん」

すると、突然銀時は話の話題を変えてなにやら色々と言っちゃまずいものをペラペラと喋り始めた。

…流石に、つと云うか聖杯は必要な情報だけを提供するのだから、無論セイバーには卍解や管理局の白い悪魔など知るはずがないと思つた新八はセイバーに訪ねた。

「いえ、流石に正解は無理ですが。その砲撃みたいなのは私も放てます」

「そっかあ。やっぱ正解つかえねえのかあ。まあ、そりゃそうだ。って、お前正解しってんの？」

訂正、何故かそれを知っていた。ってかなぜ知っている。

「私にもよくわかりませんが、おそらく聖杯が必要な情報と思って提供したのでしょうか」

「何でだよおおおお！！ 全然いらねえよそんな情報！！ 何でこの子にそんな情報を提供しちゃったの世界！！？」

「西園寺？」

「スク　ズじゃねーよ！！」

「じゃあ、「世界の半分をくれてやるう」のヤツアルか？」

「竜王でもねえよ！！　はい・いいえどっちも答えても戦闘になるだけだっつーの！！　ふざけんのも大概しろおおおお！！」

キツパリと答えるセイバーや、銀時と神楽の怒涛のボケラツシュに負けじと、新八も怒涛のツッコミをする新八にセイバーはある感心を抱く。

そんなやり取りをしていたら、丁度凜がやってきてそれに遅れて士郎が早歩き気味で出てきた。

セイバーは銀時たちに一言「失礼します」と言っただけで軽く会釈をした後、士郎の元へと向かった。

そして、セイバーと士郎がなにやら話し合っている、すると士郎が手をさし伸ばした、これから二人で頑張ろうと士郎の考慮だろう。

セイバーは少々戸惑った後に士郎に向きなおし、しっかりと士郎の手を掴んで再度誓いを立てていると、凜が横から士郎をおちよくっている。

凜と士郎たちは会話しながら歩きだし、そして協会の坂道をゆつたりと下っている。

そんなやり取りを見ながら銀時の隣で歩いていた新八が。

「いよいよ始まるんですね、聖杯戦争が」

「そうアルな。…正直、怖いアルけど、もう後には引けないネ」

「ああ、メンドクセーが。てめーら、一丁気合入れていくぜ！」

『はい！（合点アル！）』

そして、士郎たちも話し合いが終わったらしく、凜は別の方角で帰ろうとして突然足を止める。

「ねえ、お話はもう終わったの？」

歌うかのような幼く、可愛らしい声が夜に響いた。

銀時たちも凜につられて前を見る、そして愕然とした。

目の前にいたのは、紫色の高級そうな服装と、雪のような白く長い髪をした少女と、それに不釣り合いな巨人が目の前にいた。

雪のような少女は驚愕している銀時たちに満足したのかクスリと笑って。

「ごきげんよう、紳士淑女の皆様方」

そういって銀時たちにお辞儀をした。

第三訓「人の話はしっかり聞きましよう、お母さんとの約束よ！」（後書き）

今回はここで終わりです。

NGコーナーは次回からやろうと思っています。

…っというより、ぶっちゃけNGコーナーを変更して番外編でもやろうかと考えている今日この頃。

っと言っわけで、次回予告よろしく桜ちゃん！

桜「え？ …あ、はい。じ、次回はfate unlimited

silver soul第四訓「戦闘前には用を足せって言っけど空気は読むのは大事だよね？」です「

第四訓「戦闘前には用を足せつて言っけど空気を読むのは大事だよね？」（前書

どうも、お待たせしました。

番外編についてですが、次の回を投稿したらその合間にたまに番外編を投稿するという形でやっていきたいと思っています。

それではごっごぞー！

第四訓 「戦闘前には用を足せて言うけど空気を読むのは大事だよね？」

目の前に聳え立つ巨人は淡黒い肌と、鋼のような強靱な肉体、の放つ圧倒的な威圧感を目の前にして、まるで世界が凍りついたかのようにならなかつた。

その中で、凜は声を絞りだすようにして蚊のようにはいた。

「……………バーサーカー」

凜の言葉に雪のような少女はうれしそうにクスクス笑いながら歌うように言う。

「そのとおりよリン、私の最高のサーヴァント、バーサーカー。そして私の名前はイリヤ。イリヤスフィール・フォン・アインツベルン。リンならこの名は知っているでしょ？」

「アインツベルン!?」

凜は、その名に聞き覚えがあったのか、かすかに体が揺れる。

「……………凜さん、アインツベルンって、昨日説明してもらった？」

凜の隣で何とか声を振り絞って凜に訪ねる新八、彼の顔はバーサーカーの威圧感に当てられ、真っ青になっていた。心なしか体も少し震えていた。

気構えながら、凜は新八の問いに首を傾げる。

アインツベルン。聖杯戦争を始めた三家の内の一つであり、主に錬金術などが得意な家系である。

しかし、その反面戦闘魔術は不得手であるのだ。

彼らが錬金術で作るのは他にもホムンクルスという魔術回路から作られた人も作ることができるが、それは失敗率がかなり高く、完成したモノは数える程度。

イリヤは今回の聖杯戦争においてマスターとして参加するために作られたホムンクルスなのである。

ホムンクルス自身は魔術師ではないため、比較が難しいが。サーヴァント中最も扱いにくいバーサーカーを使役する程の実力を持っている。

「…新八、お前は下手に手を出すなヨ。お前が来ても正直足手まといになるだけネ」

「神楽ちゃん…」

神楽は頬に冷や汗を垂らし、バーサーカーの方を向いたまま新八に言う。

そして、もう一言付け加える。

「その代わりと言っちゃなんだが、凜と一緒に士郎を護ってるネ。凜だけじゃ荷が重いはずアル」

「……わかったよ、神楽ちゃん。士郎さんの護衛は任せて」

新八の答えに神楽は満足そうににやけた。

そして、イリヤが歌うように言う。

「そろそろいいかしら？ それじゃあやっちゃえばーさーk……っ
て何やってるの？」

バーサーカーに命令を下そうとしたが、言葉を区切り呆れ顔になりながら”ナニ”かをしている人物に言う。

神楽たちもイリヤに釣られて目線の先を見ると、イリヤと同じく呆

れ顔になってそれを見る。

そんな神楽たちの目線の先には、近くにあつた自販機の取り出し口に頭を突っ込んで”ナニ”かをしている銀時だった。

新八はジト目で銀時の近くに寄って言う。

「…銀さん、何やってるんですか？」

「…い、いや。ちょっとガンダーラの入り口を探して…」

「そんなところにある訳ないでしょう？ ……ってかアンタビビってますよね？」

「え？ いや、俺ビビってねーから。俺全然ビビッてねえーから」

「いや、…あの、完全にビビってますよね？ その、無理しないでくださいよ？」

「だからー、ビビってないって言ってんじゃん。これはくだからアしだつてアレアレ。どこでも アの入り口を探してたから。断じてビビってないからね？」

「いや…、さつきからどんどん理由が変わってるんですけど。ってかやっぱりビビってますよね？」

「いい加減にしろコノヤロー！！ ビビってないって言ってんだから、ビビってないってことにしとけよ！！」

銀時はビビっていないと頑なに否定するが。思いつきりガタガタと全身が震えており、明らかにどう見てもビビってるのが丸解かりな銀時に対して。

凜、神楽、アーチャー、イリヤは冷たい目で銀時を見る。

士郎はどう反応すればいいのかこまった表情をしており、セイバーも士郎と同じような表情をしている。

「…じゃあ、何でそんなに震えてるんですか？」

「いや、だからこれはアレだよ。アレアレアレ、ちょっと小便がしたくて震えてるだけなんだって」

「じゃあさっさと済ませてください。このままじゃ話が進まないんで」

次々と言いつくを変えていく銀時に新八は呆れながら言い、銀時は近くにあった電柱の前までそそくさと小幅で走り、電柱の前に着くと自分の股間のチャックを下ろして用を足す。

新八は「…本当にしたよこの人」と言いつて完全に呆れている。

凜とセイバーは一緒に後ろに向く。そして用を終えたのか銀時は「もういいぞ」と言いつて凜とセイバーは振り返る　　っが。

「ぶっ!!!?」

「なっ!!!?」

二人は顔を赤くして思わず噴き出してしまった。

なぜなら、銀時が戻ってきた。っと言つてもただ戻っているだけなのではなく、社会の窓全開の状態で、ナニをぶら下げた状態で戻ってきたのだ。

「ん? どうしたオメーら。何か問題でm」問題ありまくりじゃああ! ボケええええええええええ!!!」オンドウルルラギツタンデイスカアアアアアア!?!?」

銀時のセクハラの混ざったボケに新八を先頭に、神楽と凜の三人が銀時に跳び蹴りでツッコミ、銀時は三人の強烈なツッコミをされ、蹴られたところからアスファルトを削りながら滑って約5mくらいのところで停止した。

「マジいい加減にしてくださいよアンタ!! 何女の子のいる前でフルンで戻ってきてんですか!!!? 少しは自重してくださいよ!!!」

「全くよ！ アンタ、場の空気ってモノを読みなさいよ！ 台無しじゃない！！ さっきまでのシリアスな雰囲気は全て台無しじゃない！！！」

「まったくアル！ もう銀ちゃんに主役は任せられないネ！！ この小説のタイトルを「fate unlimited China Girl」に変更して主役の座を要求するアル！！」

「いや！ 何さり気なく主役を独占しようとしてるの神楽ちゃん！！？ それ色々とやっちゃまずいから！！」

さり気なくタイトル変更しようとし、拳句には銀時から主役を独占しようとしている神楽に新八はツッコむ。

そんな三人を他所に。三人に蹴られてぶっ飛ばされた銀時は何事も無かったかのようにたち、社会の窓をちゃんと閉まって新八たちに向く。

すると、イリヤがお腹を抱えて笑い出す。

「あははははは！！！！ 面白いね！ そのお兄さん。…それじゃあ、まずはそのお兄さんからやっちゃえ、バーサーカー」

「なんで俺だけええええええええええ！！？ フルンか！ フルンをさらけ出したことに根に持ってるの！！？ 絶対そうだよね！！？」

「いいえ、私は全然根に持ってないわよ。ええ持ってないよ。…だからバーサーカー、ソイツのそのお粗末なモノごとソイツヲ殺ツチャツテ」

「おいしいiiiiiiii！！？ やっぱ根に持ってるんじゃないかアアアアア！！！！」

笑い出した後、イリヤはバーサーカーに何故か銀時だけにご使命。笑ってはいるのだが…、心なしか頬に青筋が立っていた。仕舞いは最後の機械のように無表情になり、片言なつたイリヤに、銀時は

大声を上げてシャウトする。

…ってか銀さん、そりゃいくら小さいからって女の子で、尚且つ戦慄な状況だったのにいきなりフルンになったりしたらそら誰だつて怒る。

「……………!!!」

「うおわあ!!!?」

バーサーカーは、大気を揺るがさんばかりの咆哮を上げ地面を蹴る、2 m以上の巨体がいとも容易く空を跳び、持っている大剣を片手で軽々と振り上げ銀時に一直線で降りてくる。

銀時の第六感が 危険。 っと警告する。

とっさに避けてバーサーカーの攻撃をかわす。

銀時が避けたところにバーサーカーは大剣を振り下ろして着地すると、大剣はアスファルトを砕き瓦礫が吹き飛ぶ。バーサーカーは避けた銀時に視線を移す。

何とか回避した銀時は体制を立て直して腰から木刀を抜いて構える。

「……………!!!」

再び咆哮を上げ銀時に突撃するバーサーカーは大剣を振り上げ、そして振り上げた大剣を振り下ろし、銀時の命を刈り取らんとする。振り下ろされた大剣は、情け容赦なく銀時に直撃し、アスファルトを凹ませて砂煙が舞い、視界を遮断する。

「銀さん!!!」「銀ちゃん!!!」「銀時!!!」「ギントキ!!!」

「……」

四人の声が重なる。

凜は銀時の名を叫びながらも、おそらく彼はもう先ほどの一撃で絶

命したと確信する。

視界を遮断していた砂煙が徐々に晴れてき、視界がクリーンになると、凧は目の前の光景に驚愕した。

『なっ！！！？』

「…………へえ」

それはセイバーと士郎も同じだったのだろう、三人は驚きの声を上げ、イリヤは感心の声を上げる。

その目線の先に見たのは、なんと銀時が木刀でバーサーカーの大剣を受け止め、足が地面にめり込みながらも踏ん張っていた。

「銀さん！！」「銀ちゃん！！」「」

「アーチャー！　お願い！！」

何とか無事だった銀時に、安堵の混じった声を上げる新八と神楽。

凧はアーチャーに指示を出し、いつの間にか遠くにいるアーチャーが弓で援護射撃をする。

その数八連、一撃一撃が岩盤を穿ちかねない威力を誇っている。

それに、バーサーカーに命中するが、目の前の黒い巨人には何ら効果を持たなかった。凧は全く効いていないことに驚く。

それを他所に。全身から襲ってくる重圧に耐えながらも、銀時は脳裏に一人の男がよぎった。

ふざけやがってっ！！　たった一撃。　たった一太刀受けただけで気力も体力も刈り取られるようなこの馬鹿力…。　野郎、鳳仙並かそれ以上に厄介だ！！！！

それは、銀時がまだ元の世界にいた頃。　吉原という町で一人の男と戦った。

その男の名は夜王・鳳仙。神楽と同じく夜兔族の一人であり、かつて夜兔の王に君臨し、エイリアンハンターで宇宙中を旅をしており、それと同時に神楽の父である星海坊主と互角の勝負をした男である。銀時たちは仲間と協力し、朝日を浴びさせ、やっとのことで倒した男。

銀時には、目の前の巨人の底知れぬ力が鳳仙と重っていたのだ。

「…すごいねお兄さん、バーサーカーの一撃に耐えるなんて。でももうお仕舞い。バーサーカー、そいつを潰しちゃえ」

バーサーカーはイリヤに命じられ、空いている片手で銀時を掴まらなかった。

なぜなら、銀時を掴もうとしていた手はセイバーの剣によって弾かれたのだ。

「ギントキ！ 大丈夫ですか！！」

「これが大丈夫に見えるんだったらっ、お前眼科行った方がいいぞっ！！」

セイバーは、前を向いたまま銀時に言う。

バーサーカーの剣を受け止めたまま減らず口に、まだ銀時は大丈夫だと分かるとセイバーは口を吊り上げる。

「フツ…。この状況で減らず口を叩けるのでしたらまだ大丈夫でしょう。銀時、もう少し耐えて頂けますか？」

「了解…っついていいてえーところだが…。どうやらもう、その必要は無いみてえーだ」

「……え？ 「ふっ！！」…なっ！？」

「ふあちよおおおおお！！！！」

「なんと！！！！」「うそっ！！！？」「えっ？」「」

銀時の物言いに、セイバーは一瞬間の抜けた声を出したと同時に人影がバーサーカーが大剣で銀時を押しつぶそうとしている腕に渾身の蹴りをお見舞いすると、バーサーカーの腕が跳ね上がる、そして影は着地するとさらに追い討ちを掛けるようにバーサーカーの顔面の近くへと跳び、渾身の回し蹴りが炸裂すると2 m以上の巨体が宙を飛び、4 mほど吹き飛んだ。

そして丘に落下し、轟音を響かせながらアスファルトにめり込み、砂埃が舞う。

その光景に。凜や土郎はおろか、セイバーまでもが驚愕した。

「なっ!!!?」

それは、イリヤも同じらしく。声を荒げて吹き飛ばされたバーサーカーの方に目をやる。

バーサーカーの腕を蹴り上げ、さらに蹴り飛ばした人影は神楽であった。

神楽は夜兎族特有の馬鹿力を活かしてバーサーカーの腕を弾き上げ、顔面に回し蹴りを叩き込んだのだ。

ようやく重圧から開放された銀時は、セイバーと共に地面を蹴って後ろに下がり、体制を立て直す。

その後から神楽もバク転をしながら銀時の近くに下がる。視線を前に変えないまま銀時に訪ねる。

砂煙が舞ってよく見えなかったが、徐々に視界がクリアになってゆくと、バーサーカーが何事も無く平然とそこに立ちすくんでいた。

「銀ちゃん、無事アルか？」

「なんとかな。…それよりあのヤロー。…神楽の蹴り受けても全く答えてねえぜ」

「…分かってるアル。逆にこっちの足が痺れてるネ。…銀ちゃん、

アイツから漂う気迫は夜王並に凄まじいアル。……考えたくはないけど、下手したらあの夜王以上かも知れないネ」

「…俺もそれ思ってたところだ。……ん？ そういえば」

銀時は黒き巨人とどうやって打倒すべきか考えていると、ふと自分たちが丘から下っているときに途中で墓場を見かけた。

つい先ほどは特に気にしてはいなかったが、この広い場所であるの巨人と対峙するより、障害物を利用すれば有利に近づけるのではないかと、銀時は思いついた。

「お前ら、ちょいと思いついたことがあったんだが。聞いてくれ」

「何アルか？」

「聞きましょう」

銀時に呼ばれ、セイバーと神楽はバーサーカーに注意を向けながらも銀時の話に耳を傾ける。

「この広い場所じゃ俺たちが不利だ。…だから俺たちがこの坂道から下りてる途中にあった墓場を利用すつぞ」

「…なるほど、貴方の意図は読みました。カグラ、貴方も協力してください」

「大体は読めたアル、あのデカブツをその墓場まで誘導すればいいアルな？」

「…そういうこつた、頼むぜテメーら」

「合点アル」

「了解しました」

銀時たちの作戦会議が終わると、それを見計いイリヤが声をかける。

「会議は終わった？ …でもどんなことをしても無駄よ。だって私

のバーサーカーが一番強いんだもん。それじゃやっちゃえ、バーサーカー」

「—————!!!!!!」

「バーサーカー。私が相手だ!!」

イリヤは歌うようにバーサーカーに命令し、雄叫びを上げて地面を蹴り、バーサーカーは一息で銀時たちの所へ近づき、振り上げていた大剣を横薙ぎに振り下ろす。

セイバーは前に出て、見えない剣を下から打ち上げる。

そして刃と刃がぶつかり、魔力が溢れて火花が飛び散る。

刃と刃がぶつかる度に大気が揺れて突風が巻き起こり、魔力が放出され火花が飛び散る。

だが、力はバーサーカーが勝っているのか。徐々にセイバーが押されはじめると、セイバーは全く引かず、バーサーカーと対峙している。

アーチャーは遠くからバーサーカーを射撃しているが、バーサーカーの強靱な肉体の前では差ほど効果は期待できない。

そして銀時は、セイバーに気を取られている隙にバーサーカーの背後に回り、後頭部に一撃を与えた。

だが、それでも少しだけ仰け反っただけでバーサーカーは振り向き際に拳を握り締め、銀時に殴りかかるうとするが、それを神楽が蹴り上げ難を逃れる。

「

銀時たちは何度もセイバーがバーサーカーの注意を引き付け、その隙に銀時が攻撃し、攻撃されそうになったらセイバーか神楽のどちらかがバーサーカーの攻撃を弾く。暫くそんなやり取りが続いた。その途中。

「うぐっ!?!?」

セイバーは手で胸を押さえて苦しみ出したのだ。
実はセイバーは士郎に召喚された時に青い槍使いのサーヴァント、ランサーと対峙した際に、ランサーの宝具で胸に傷を覆ったのだ。彼女自身加護があつたのか、外傷はそこまでひどくは無く、あつという間に傷を癒してしまつたが。
宝具を受けた時の呪いがまだ残つてたらしく、それが今になって効果を発揮し、セイバーを苦しめたのだ。

「……………!!!」

「しまつた!?!?」

「…っち!」

バーサーカーは吼え、横なぎに振りセイバーを断たんとする。
銀時はセイバーの前に出て庇い、バーサーカーの剣戟を何とか防御するも、衝撃に耐え切れずセイバーと一緒に吹き飛ばされる。

「銀ちゃん!!! セイバー!!! 銀さん!!! セイバーさん!」
「銀さん!!! セイバー!!!」

新八、神楽、凜、士郎は吹き飛ばされた銀時とセイバーの名を叫ぶ。バーサーカーは4人に目もくれず、吹き飛ばした二人を追いかけた。神楽は全力でバーサーカーの後を追い、少し遅れて凜、新八。最後に士郎の順番で追いかけていった。

Side Change: sabber

ギントキと私は一緒にバーサーカーに吹き飛ばされ、そしてとある場所まで吹き飛ばされ、地面に激突する寸前、ギントキは私を抱い

て身体を捻り、自身の体をクッションにして自分だけダメージを覆う。

「いつつ…、大丈夫か？ セイバー」

「ギントキ！ 私ならあの程度なら大丈夫です。なぜあのようなことを…！」

私は納得できず、声を荒げてギントキに詰め寄る。

ギントキは頭に傷を覆ったのか、頭から血を流している。

「さーな…。ただ、体が勝手に動いただけだ…」

「バーサーカーの一撃を受け止めるにしろ、私を庇うにしろ無茶が過ぎます！」

「気にすんなつての…、！？ 来るぞ…！」

「！？」

振り向くと、バーサーカーが大剣を振り上げた状態ですぐ近くまで迫っていた。私はとっさにギントキの服の袖を掴んで飛んで回避する。

私たちがいた場所にバーサーカーが大剣を振り下ろされ、地面が削られ、瓦礫が吹き飛び、砂煙が舞って視界が一部遮られる。

そしてあまり地形が入り組んでいない場所に着地し、ギントキを降ろす。

すると、砂煙の中からこちらに突撃してきたバーサーカーに対し、私は前に出て応戦する。

「ハアアアアアア…！」

「……………！！！」

だがやはり単純な力では負けており、さらにはランサーの槍で呪い

を受けているため、うまく力が出し切れずバーサーカーに押されている。

バーサーカーと打ち合いをしている途中、私はあることに気づく。

ここは、つい先ほどギントキたちと作戦を計画していた時に利用しようとした墓地ではないか！！ 本来の計画が狂ってしまった、これはこれで好都合。存分に使うまで。

そして、私はバーサーカーの一撃をいなしながら後ろに下がり、バーサーカーが追いかけて私を切ろうとするも、墓石などの障害物が邪魔でうまく私に攻撃を当てることができていない。

この入り組んだ地形では、巨体であるバーサーカーには不利のようですね。この調子であれば　　！

私は、バーサーカーの攻撃を避け、隙あらば攻撃しながら戦っていた。

＼side　saber　end＼

「…すげえな、コイツがサーヴァント同士の戦いってヤツか」

銀時は、セイバーとバーサーカーの2体のサーヴァントによる超越した戦いに見とれていた。

銀時はサーヴァント同士の戦いに見とれていると、後ろから神楽の声がしたので振り向くと、神楽が銀時の名を叫びながら駆けてきた。

「銀ちゃん！　大丈夫アルか？」

「ああ、大丈夫だ。ただちつと頭ぶついただけだ」

「そうアルか、それじゃあ私は…何するネ銀ちゃん？」

セイバーの助太刀をしに行こうとしていた神楽の肩を掴んで制止させる、目を瞑り首を横に振って言う。

「やめとけ、今俺らが言っても完全に足手まといになるだけだ。…あれをみりやな」

そして神楽も銀時と同じ視線を向くと、銀時と同じく啞然としてしまった。

その後からさらに凜、新八、士郎の三人もついてセイバーとバーサーカーの戦いに見とれる。

暫く見とれていた銀時は、ふと遠くから殺気を感じ、感じた方へ振り向くと。

遠くてよくは分からないが、アーチャーが弓と矢のようなものを構えており、バーサーカーではなく、セイバーに狙いを定めていた。

「…！！？ あのヤロー！！」

銀時はそれをいち早く察知すると、セイバーの元に駆け寄る。アーチャーがセイバーを狙っていたことに気づいたのか、士郎も続いてセイバーに駆け寄る。

「…！！？ ギントキ！！ シロウ！！ なぜ近づいてきたのです！！ 危ないですから離れてください！！」

「バカヤロー！！ そんな悠長なこと言ってる場合じゃねーぞ！！ 今アーチャーがこつちに狙ってきてんだ！」

「それは本当ですか！！ …！！？」

セイバーも、やっとそのことに気づいたらしく土郎と一緒にその場から離れようとするが、既にアーチャーが発射し、もうすぐにバーサーカーに当たりそうだった。

くそ！！ 間に合わない！！

土郎がそう思ったとき、自分とセイバーを大きい影が庇うように覆いかぶさり　そして。

凄まじい轟音と爆炎と共に瓦礫が吹き飛び、バーサーカー一帯が炎に包まれる。

土郎とセイバーは、とっさに瞑っていた目を開けると、背中に石などか刺さって血を流して気絶している銀時が目に飛び込んできた。そう、先ほどの影は銀時だったのだ。

「　！　銀さん！！」

「ギントキ！　しっかりしてください、ギントキッ！！」

セイバーは銀時の背中を軽く叩きながら聞きより、息があることを確認すると、安堵のため息をこぼす。

そして燃え盛る炎に目を向けると、バーサーカーは最初の時と何ら変わりなくその場で立っていた。

何処からとも無く、イリヤの声が聞こえてくる。

「へえ、凄いな。その銀髪のお兄さんとリンのサーヴァント。ちよつと気に入ったからまた今度にしてあげる。それじゃ、また今度会いましょう」

イリヤがそういうと、バーサーカーの姿が消えた。　おそろく霊体化したのだろう。

そして、イリヤも帰っていった。

目の前の脅威がいなくなり、緊張の糸が切れると。
神楽、新八、凜がセイバーたちに駆け寄る。

「銀さん!!!」

「銀ちゃん!!!」

「銀時は大丈夫なの!?!」

駆け寄った三人は、気絶している銀時の安堵を確かめ、セイバーは神楽たちの方に顔を向けてコクリッと首を傾け、凜たちはホッと胸を撫で下ろす。

「とりあえず、ここじゃ治療しにくいから。衛宮君の家に行きましょう」

「分かりました。では、私がギントキを背負います」

「ええ、お願いセイバー。…それと、アーチャー」

「ふむ、何か用かね? 凜」

セイバーは銀時を担ぎ、銀時を治療するために衛宮邸へと足を急いだ。

行こうとしていた凜は突然足を止め、何時の間にか近くにいたアーチャーに凜はキツと睨みつけて言う。

「事が済んだら、後で貴方と話があるから。覚悟してなさい」

「ふむ、どうして覚悟をしなければ些か理解しかねるが。…」

まあ、了解したよ」

相変わらずのアーチャーの態度に苛立ちを覚え、突っかかりそうになりながらも理性で押し止め「行くわよ、アーチャー」といってセイバーたちの後を追った。

そして土郎の家である衛宮邸に着いて銀時の治療を行い数分であうやく治療を終え、凜は土郎に一言いうと自分の家に帰っていった。セイバーは土郎が使っている寝室で寝ている銀時が心配なので銀時のところに行き、神楽も銀時のことが心配だったので同じくセイバーと一緒に銀時が寝ている部屋へと行く。

残された土郎と新八は居間でとりあえず布団を用意して寝ることにし、一夜を明かした。

第四訓「戦闘前には用を足せて言うけど空気を読むのは大事だよね？」（後書

ちよつと、今回は最後の部分は即席（しかも深夜に）考えたので色々と抜けてるところがあると思います。

後日に自分も読み直そうと考えていますが、その前に何かありましたら言ってください、修正します。

士郎「次は俺か。次回、fate unlimited silver soul第五訓「知らない人が突然家に居たらマジで焦るよね？」トレス・オン 次回を投影・開始」

P.S

番外編は後日書きます。

番外編第一話「イケイケ！僕らの屁怒組さん！！」（前書き）

注意！！

この回は、原作設定ブレイクや、とんでもないギャグ要素が含まれています。

それでも、私は一向にかまわんツッ！！　っという方のみ進んでくだしあ。

番外編第一話「イケイケ！僕らの屁怒組さん！！」

そして士郎たちも話し合いが終わり、凜は別の方角で帰ろうとして突然足を止め、「ぶツツ！！！！？」と噴き出した。銀時たちも凜につられて前を見て。

『ぶふうっ！！！！？』

士郎とセイバーと、いつの間にか実体化していたアーチャーも壮大に吹いた。

万事屋一向に関しては、信じられないのと、また悪夢がよみがえったかのように啞然と立ちすくんでいた。

目の前にいたのは、紫色の高級そうな服装と、雪のような白く長い髪をした少女と、それに不釣り合いなとんでもないモンスターが目の前にいた。

そのモンスターは、ごっごっごっしい顔。

顔には傷があり、体は緑色。

頭には角が生え、獅子の鬣のような黒い髪。鋭い牙に、目の白い部分は漆黒に塗りつぶされ、瞳は禍々しく紅く、おでこに不釣り合いな可愛い花が咲いている。

なんかこう「わたし、地球征服しにきました」的な凄まじい顔をしたモンスターは、少女の傍らで佇み、銀時たちの存在に気づいたのか声をかけてきた。

「おや？ 坂田さんたちではありませんか」

「何？ 屁怒組、知り合いなの？」

「ええ、私の住んでいる世界で万事屋というものを営んでいるお隣さんだよ。…まさかこんなところでお会いできるとは」

「そう、それじゃあ挨拶してくれば？」

「ええ、ではお言葉に甘えて」

イリヤは笑顔で答え、屁怒紹と呼ばれた顔面凶悪モンスターは銀時たちに近づき挨拶する。

「どうも、お久しぶりです。坂田さん、志村さん、神楽さん」

「……あ、あのぉどうして貴方様がこんなところにいらっしやいますのでしょうか？ 屁怒紹伯爵」

「屁怒紹でいいですよ。…いやね、話せば長くなるので。よろしければ暖を取れる場所でゆつくりとお話をしたいのですが…」

「え、ええ…。それなら衛宮士郎さんの家が一番近いですし、そこでゆつくりしていきましょ屁怒紹大魔王さま」

「いや、屁怒紹でいいですよ。…ですが、衛宮さんという人に許可を取って貰い、その後でイリヤさんにも確認を取らないといけません。それで、その衛宮さんという方はどなたですか？」

「……………」
「…えっ！？ ちょ、遠坂！！？ しかもアーチャーまで！！？
裏切ったな！ 俺の気持ちを裏切ったなあぁ！！？」

訪ねてきた屁怒紹に凜、アーチャーが同時に士郎を指を指し、士郎は某鬱になあるアニメの主人公のように叫ぶ。

ちなみに、セイバーは屁怒紹を見たまま、完全にフリーズしている。そうしている内に屁怒紹は士郎に近づいき、視線を士郎に移す。

「どうも、はじめまして。あなたが衛宮さんですね？ 私は屁怒紹ヘドロと申します。放屁の屁に怒りの怒、紹ロレンマスク鬚魔須苦の紹と書いて。屁怒紹です」

「……………」
「少しお訪ねしたいのですが、実は貴方の家にお邪魔させていたただきたいのです。私がどうしてもこのようなところにいるのか、坂田さ

その光景にイリヤと屁怒紹を除く全員が驚愕する。

実際、屁怒紹は腕をかざしただけ…なのだが、ただでさえ重い漬物石という石を片手で軽々と空の彼方へと投げ飛ばせるほどの怪力を持っているのにさらにとある過程でサーヴァント化し、さらに力が跳ね上がっているのだ。

以前とは力の加減の違いにまだまだ慣れていないため、腕を振っただけでセイバーは凄まじい勢いで叩きつけられたのだ。

それに、よく見ると腕とか足だとかが曲がってはいけない方向に曲がっている気がするが、気にしてはいけない。

屁怒紹はしゃがむと近くにいた虫を指に乗せてゆっくり立ち上がると、セイバーの方を向いて。

「いやあ〜危なかった。危うく虫を踏み潰すところでした。殺生はいけない」

『!!!!!!』

屁怒紹はギョロつと瞳をセイバーに移すが、残念なことに気絶しているのだが。見た場所が丁度士郎たちや銀時たちを一眼できるのだ。そんな屁怒紹の瞳を直に見てしまった士郎たちは、体を強張らせ、硬直してしまった。そんな人たちを他所に、イリヤは近づいて屁怒紹の腰に抱きつく。

「すごーいすごーい！ 屁怒紹はやっぱりとて強いね！」

「いや、別に私はそんな立派じゃないよ。…それより、あの衛宮さんという方に家に来ても良いと許可を頂いたから、いいね？ イリヤさん」

「んー、でも今聖杯戦争中だし。本当は行ったら駄目なんだよ？」

「ですが、イリヤさんはあの方と遊びたいって言っていたじゃないですか。折角だし、いい機会だと思っただけどねえ〜」

「うう〜…、屁怒紹がそこまで言うなら。私行く」

「それでは、皆さんも行きましようか。倒れてしまった方は私が責任を持って担いでいくので。それでは衛宮さん、家までのご案内よろしくお願いしますね」

「……（コクツ）」

屁怒紹は自分が気絶（？）させてしまったセイバーを腕に担ぎ、土郎はぎこちなく首を傾けるとこれもまたぎこちない動きで屁怒紹を家に案内する。

それに、銀時たちや凜たちもぎこちない動きで土郎に続く。

イリヤは屁怒紹に肩車を要求してそれを屁怒紹は承諾、差し出された屁怒紹の腕に乗っかり肩まで案内され、自分で屁怒紹の首に跨る。野獣に肩車してもらっている少女と案内している土郎を先頭に、第三者が見たらとてもシュールな光景だっただろう。

そして、土郎の家に着き。屁怒紹は事の顛末を簡単に説明する。

「どうやら、屁怒紹は誤って虫を踏みそうだったところを避けようとし、勢いあまって足を挫いて部屋の家具の角に頭をぶつけ。

「気絶して暫くして目を覚ますと全身白いタイツを着た二人組みがいて「お前かなり強いからテキストに英霊にするから」っと言って屁怒紹を英霊にし、そしてそれをイリヤが召喚したらしい。

それを聞いた凜は怒りを通り越してもう色々ついていけずに気絶し、それにつられて銀時たちも気絶したのだった。

ちなみに余談ではあるが、後日衛宮邸に来た土郎の姉代わりの教師と、土郎の後輩が来て。他の面々にも驚いたが、それ以上に屁怒紹に驚いて大騒ぎになり、その騒ぎを駆けつけた土郎は二人にこっぴどく質問攻めをされて、納得してくれるまでほぼ一日を要したとか。なんとか。

おわれ

番外編第一話「イケイケ！僕らの屁怒紹さん！！」（後書き）

えーはい、番外編とある登場キャラとは屁怒紹さんのことです。

何かですね、書いている途中バーサーカーと屁怒紹って似てるんじゃない？的な考えで、その次の瞬間このような電波を受信してしまっただけですはい。

ぶっちゃけ、衝動で書いてしまいました。

反省は半分しているが、後悔はしていない。（キリッ

第五訓「知らない人が突然家に居たらマジで焦るよね？」（前書き）

三週間くらいにはできるとか言っておきながら、それから1週間以上投稿できなくて済みませんでした、更新です。

後、この前受けた就職での面接なのですが…落ちました。（ノ、）

また新しく見つけないとなあ…。

まあ、そんなこんなでまだまだ忙しい日々が続くそうなので、更新や修正など遅れるところもございしますが、これからもお付き合いくださいませ。

第五訓「知らない人が突然家に居たらマジで焦るよね？」

ある夢を見ていた。

そこは、いたるところに屍、屍、屍、屍の群れが倒れていた。

ある者は刀によって斬られ、首を刎ねられ絶命した屍。

ある者は槍によって突き穿たれ絶命した屍。

そしてまたあるモノは、矢が脳天に突き刺さり絶命した屍。そんな色んな形で絶命した屍たちを狙ってか、数羽の鴉が餌にあり付こうと屍の肉を食らっていたりしていた。

そんな死地とした場所に、一つの人影がポツン、と屍の上に腰をかけていた。

それは一人の幼い少年だった。

薄汚れた水色の着物を着て、髪が所々ボサボサでうねっており、特徴的な髪型をしている少年が、屍からはぎとった刀を肩にかけ、同じくはぎとった握り飯を口周りにご飯粒を付けてパクパクと食べていた。

おにぎりにまた口をつけようとした途端、ポンっと頭に軽い衝撃が走り、あり付いていた飯を食い損ねる。

少年は顔を上げると、そこには一人の男が少年の頭に手を置いて立っていた。

少し間が空き、男は微笑むとポツリと言う。

「屍を食らう鬼が出ると聞いて来てみれば、君がそう？　また随分と、カワイイ鬼がいたものですね」

男が言い終わると、少年は自分の頭に置かれている手を払い、

即座に立ち上がり地面を蹴って後ろに下がると、手に持っていた刀を鞘からゆっくりと抜く。

その刀は屍から剥ぎ取ったためなのか、所々に血や錆などがこびり付き。

刃こぼれもしており、罅も入っていてとても使えるような物ではなかったが。

それでも、少年は古びた刀を鞘から抜き、その鞘を投げ捨てて構えるが。

「刀も屍からはぎ取ったんですか。童一人で屍から身包みをはぎ、そうして自分の身を護ってきたんですか」

つと、男は先ほどと変わらず穏やか笑い、感心しながら少年に言う。

「たいしたもんじゃないですか。……だけど、そんな剣。もういいりませんよ」

「……」
「…他人に怯え、自分を護るためだけに振るう剣なんて、もう捨てちゃいなさい」

男はそういうと、腰に差している刀に手をかける。

少年は一層顔を険しくさせ気構えるが、男は鞘から刀を抜かずに抜き、軽く投げつける。

少年は予想だにしていなかったのか、慌てて刀を受け止めたためバランスを崩すが、何とか立て直すと、男が言ってきた。

「くれてあげますよ、私の剣。　　剣の使い方を知りたきゃ、ついて来るといい。」

…これからは、そいつを振るいなさい」

男は後ろに振り向き、歩きながら少年に言う。

「敵を斬るためではない、弱き己を斬るために。」

己を護るのではない、己の魂を護るために」

その男の声は、決して大きい声と言うわけではないのに。少年の心の中で大きく響いていたような感覚だった。そして、少年はその男の背中を、ずっと見つめていた。

「…ん。夢か」

銀髪の男、銀時が夢から目を覚ますと、そこには見慣れた天井があった。

「それにしても…また随分と懐かしい夢見たな」

ぽつりと、呟いて暫く天井を見ているとあることに気づいた。

そういや、この天井見たことあるな。

「…まさか、戻ってきたのか…っつ！…：どうやら、全然そうじゃないみてえだな」

彼は一瞬だけ元の世界に戻ってきたのか？ まさか、あれは夢だったのか？ と思い、勢いよく起き上がった瞬間に背中から走る激痛と上着を脱がされ体に巻かれている包帯と視界に入ったモノで夢ではないことを思い知った。

銀時の目にしたモノとは、昨日着ていた青いドレスの上に銀色の

甲冑着ていたのだが。今は白いYシャツに青いスカートを履いており、正座をして転寝をしているセイバーと、自分の布団の中に包まれている神楽が居たからである。

「……んっ。あ、起きたんですね。おはようございます、ギントキ。怪我の具合はどうですか？」

「おう。…まだちっと痛むだけだ、こんぐれーだったら大丈夫だ」「そうですか」

銀時の返答に、セイバーは胸をなでおろす。
すると、神楽が目を開けて目を擦りながら起き上がる。

「んんっ…ん？ あ、銀ちゃん!!」

擦っている目で銀時の姿を確認すると、神楽は一気に覚醒したように銀時に詰め寄ってきた。

「銀ちゃん、怪我は大丈夫アルか？」

神楽の目を見ると、本気で心配していることが伺える。

銀時は頭をポリポリ掻いた後に、逆の手で神楽の頭に手を置く。

「ああ、こんぐれー全然平気だつての。こんなもんじゃ俺アくたばるわきゃねーだろ」

「銀ちゃん…うん、そうアルな!! 銀ちゃんがこの程度で死ぬような馬鹿じゃないネ!!」

「おい、お前今さり気無く俺のこと馬鹿つて言つたろ？」

「言つてネーよ、馬鹿も休み休み言えヨこの馬鹿が」

「へん！ 先に馬鹿つて言つた奴が馬鹿なんだよバーカ!!」

「上等アル!! かぶき町の女王に喧嘩を売つたことを後悔するが

いいネ！」

銀時と神楽の低レベルな言い争いをセイバーは微笑ましくも羨ましそうな目で見つめていた。

神楽と睨み合っている銀時はふと、時計を見ると、6時を差していた。

「…そいやあ、士郎たちは居間に居んのか？」

「はい、今はおそらく食事を取っていることでしょう」

「わあつた、そしたら居間に行くか」

「ギントキ？ 立ち上がって大丈夫なですか？」

「ああ、別に普通に動く分にゃ、大丈夫だよ。（…本当は少し動いただけで背中がズキズキ痛むが、変に心配はかけられねえからな）」

銀時は枕の後ろにおいてある白い浴衣を取って立ち上がり、戸を開けて居間に行こうとする、セイバーの心配に、銀時は後ろで手を振って大丈夫だと言うが。

実際のところ昨夜戦った傷は割りと深かったらしく先ほどから動く度に痛みが走るが、セイバーに心配かけまいと無理をして大丈夫だといった。

セイバーは暫く黙り。

「……分かりました。ですが、あまり無理はなさらぬよう」
「わあつてるって」

そして3人は部屋から出て居間へ移動し、居間へ着いて戸を開けると士郎と新八たちが既に食事の準備が出来ていたようだ。

銀時に気づいた新八が銀時に声を掛けてきた。

「あ、銀さん。目が覚めたんですね。怪我は大丈夫ですか？」
「おう、ぱつつあん。バリバリ大丈夫だぜ」

銀時は近づいて返した。 新八が置いた眼鏡に対して。

「……あの、銀さん。本体こつちです」

「何言つてんだぱつつあん。どう見てもお前眼鏡に話しかけてんだろ？」

「だからそつちじゃなくてこつちだつて言つてんだろーがああああ
ああああ！！ 本当何回言えば僕が本体だつて認識してくれる
んですか！！？」

「何言つてるアルか新八、お前は95%が眼鏡で出来てるアル。だ
からそこに座つているお前は眼鏡掛け機であつて新八じゃないネ」

「んだとゴルアアアアアアアアアアア！！ いつもいつも遠まわし
に地味つて言いやがつて！！ そんな遠まわしに言うくらいならい
つそのこと地味つてはつきり言つたらどうだコラア！！！」

「「地味」」

「ブルアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
アアアアア！！！！」

「うっさいアル」

「ひでぶっ！！？」

新八はまたもや自分の存在感の薄さ 略して地味と読む也

を銀時と神楽にからかわれ、拳句の果てに銀時と神楽に一刀さ
れ某人造人間のように、これジェットエンジン並に声出てね？

と思うくらいにうるさい声でシャウトして神楽に殴られ、これまた
某モヒカン野郎みたいな奇声を上げて倒れた。

そんな新八を放置して、食事にありつこうと食卓の前に置いてあ
る座布団に腰をかけた銀時が、ふと疑問に思ったことを口にする。

「…？ そういや土郎、気になったんだがよ」

「？ なんですか？ 銀さん」

「この食器、2人分多くねーか？」

「あ、そういえばそうですね…。土郎さん、後他に誰か居るんですか？」

「あれ？ なんで俺2人分多く出したんだろ…」

はて？ つと土郎は首をかしげて考えていると。

不意にハッ！ つと何かに気づくと物凄い勢いで立ち上がったと同時に元気な女性の声が聞こえてきた。

「おっはよー！ しろー！！ 今日のちよーしよくなんじゃーろけ

ー」

「やべえ！！ 藤ねえたちが来るのすっかり忘れてたアー！！！！」

土郎は大声で叫び、大慌てで玄関へと急ごうとしたが、それと同時に障子が開かれ、緑と黄色の縞々模様の上着の上に緑色のワンピースを着た女性と。

制服を着て、腰近くまである紫色の髪を赤いリボンで左に束ねている少女の二人が佇んでいた。

まず、ワンピースを着ている女性の名前は藤村大河、土郎の姉代わりであり藤原組の一人娘で、こう見えて土郎の通う穂群原学園で英語の教師をしたり。

冬木の町で起こっている事件を解決したり、彼女の学生時代で別名「冬木の虎」と呼ばれたんだとか。

そして、もう一人の少女の名前は間桐桜。衛宮土郎の後輩で、弓道部の部長を務めるだけあり、弓の腕前はかなりの物。

引っ込み気味な彼女だが、家事全般以外にもマッサージが得意で、彼女にマッサージをやらせると、下手をすればそのマッサージ中に経絡秘孔を突かれるらしい。

入ってきた二人はその場で固まり、同じく出ようとしていた土郎も固まっていた。

そして、土郎はこの後起きるであろう最悪の展開を予測していた。

「おろ？ どうしたの土郎？ 立ち上がったまま固まっちゃって。

早くご飯食べましょう！」

「え？ あ、ああ……」

土郎は疑問に思いながらも何とか返事を返して座り、大河と桜の二人も普段座っているポジションに座った。

間桐桜は、最初見知らぬ銀時たちに戸惑っていたが取り合えず座る。

「ふむふむ、今日は焼き魚に野菜の漬物。豆腐入りの味噌汁かあ。取り合えず、いったただきまーす！」

と言ってお碗を手にとって食べようとしたときに、ふと銀時に気づいて食べようとするのをやめて、銀時の方へ視線を向ける。

視線に気づいた銀時が平然と挨拶をしてきた。

「あ、土郎さんの保護者の人ですか？ ちょっとお邪魔させてもらってますから」

「あ、はい。ゆっくりしていつて」

大河は言いかけいる途中で言うのをやめ、硬直した。そして

「って、土郎んちに知らない人たちがいるうーーーーー!!!!!!?」

それはもう大きかった。下手すりゃ世界中に聞こえたんじゃないかというくらい凄まじい叫び声が響いた。

そんな重たい空気の中、士郎を含む万事屋トリオが一斉に心の中で叫んだ。

本来衛宮邸の食事は賑やか　主に藤ねえが馬鹿騒ぎしているせい。by士郎　なのだが物凄く黙々と食事を取っている。

『ヤベーよコレ。…なんでこんなに空気がおもてーんだよ。俺か？俺たちがいるからこんなことになってんのか？　つーかさつきからこの猛獣が俺らのことジツと見つめてくるんすけどお！　蛇に睨まれた蛙ってレベルじゃねーよこれ。虎に睨まれた子羊だよおー！』

『銀さん、それも違うと思います。…っというか！　そんなことよリコレ何とかしてくださいよ！！　こんな空気じゃ食う気も起きませんよ！？　あなた主人公なんだからこの空気くらいなんとかできるでしょう！！？』

『ばつかオメー！！　いくらなんでもこんな空気どうにもできるわきゃねーだろ！！　ちよつとでも変な動きでもしてみろ、あの虎の鋭い牙で一瞬で首を搔っ切られちまうってばよおー！！　…というわけで士郎、お前が責任を持ってこの空気を中和しろ』

『って俺ですか！！？　できるわけじゃないですか！！　あの状態の藤ねえは、下手に何か言えばさつき以上に暴れますよ！？』

『オメーだつてこの作品の主人公だろうが！！　テーマんこの作品の主人公らしく、キリツと丸く収めやがれ！！　つーかテーマーハレムで羨ましいんだよこの天然スケコマシが』

『いや、なんでさ！？　なんで俺そこまで言われなきゃならないんだ！！？　つーか何の話それ！！？』

『つてか銀さん！　何軽々しくメタイ発言しまくつてんですかアンタ！！？　つてかそんなこと言つてないで早く何とかしてくださいよおー！！　このままじゃ僕たち狩られちゃいますよおおおお！！』

銀時たちのアイコンタクトを取っているが、全く持って打開策が見つかっておらず、メタなことを口走る始末。

ここで、士郎が腹を括ったのか。

大河に説得を試みようとして、話すタイミングを伺う。

『…は、話を切り出すタイミングが見つからない…だと…？』

士郎は心の中で某死神アニメの人物みたいにはいて箸を進めながらも様子を伺うが、一向に話しを切り出せず。

結局朝食を食べ終えるまで話しを切り出せなかった士郎はがっくりと手と膝を突いてうな垂れていて。

そんな士郎を銀時は背中をさすって励ましていた。

「それで、貴方たちは一体何者なんですか？ どうして士郎…衛宮くんの家にいたんですか？」

食卓で座っていた大河が口を開いて、銀時たちに訊ねてきた。

いつの間にか気を取り直していた士郎は頭を回転させ、どう言い訳するが考えるが、混乱してあまりいい案が思い浮かばなかった。

そんな中、新八が口を開いて。

「ええ、実は。僕たちは万事屋銀ちゃんというものを営んでいるんです」

新八の言葉に大河と桜は顔を見合って首を傾げて新八に訊ねた。

「…万事屋銀ちゃん？」

「用は何でも屋みたいなもんです。自己紹介が遅れました、僕は万事屋銀ちゃんに従業員をやっている、志村新八って言います。」

それで赤いチャイナ服を着ているのが僕と同じ従業員の神楽ちゃん。

そしてそこで土郎さんを慰めているのが、僕たち万事屋銀ちゃんのオーナーの坂田銀時さんです」

新八は簡単に万事屋のことを説明し、自分たちの自己紹介を済ませる。

大河は腕を組み、首を縦に振ってなるほどつと納得したようにはき、銀時たちの名前を確認する。

「なるなる。えーつと、眼鏡を掛けて冴えない顔してる貴方が新八くん「ちょ！ ひどくないですかそれ！！？」で、そこで桜ちゃんが持つてきた牡丹餅をバクバク食べてるのが、神楽ちゃん。それでー、さつき土郎を慰めてた銀髪の人が坂田さんね。それでえ、…えーつと。その金髪の方は…」

新八の抗議の声は無視され凹む新八、そして皆からもスルーされていた。合掌。

金髪の人…つとえばこの中ではセイバーしか居まい。

セイバーは、大河に気づいて視線を向けて答えた。

「私はセイバーと言います。実は銀時たちに依頼を持ちかけたのは私なのです」

「なるほど、セイバーって言うんだ。変わった名前だねえ…。…つて坂田さんたちを依頼した人？」

「ええ、私は切嗣の親戚、切嗣が私の国に出る時に頼まれごとをされていたのです」

「へえー、切嗣さんの親戚さんだったんだー。…つてマジで？」

「ええ、本気と書いてマジです」

「そ、それで。頼まれごとってというのはやっぱり坂田さんたちに関係してるのかしら？」

「ええ、それを今から簡単に説明します」

そういい、セイバーは大河に簡潔に説明した。

セイバーは士郎の父、切嗣が旅の途中で親戚であるセイバーの家を訪ねて泊とまり。

その時に切嗣はセイバーに頼みごとで、「十数年後に自分の息子を万事屋銀ちゃんという人たちと一緒に鍛えなおして欲しい」と言われ。

数十年後、約束どおり日本に来たセイバーは地図を頼りに、万事屋がある場所へと目指し、ようやく万事屋へと着き。銀時たちに依頼したらしい。

ちなみに、なぜ切嗣が万事屋のことを知っていたのかというと。

どうやら、旅路の途中で万事屋のことを噂に聞いて、知っている者から住所と連絡先を聞き出したらしいのだと言う。

まあ。そんなことがなんやかんやあつて、セイバーたちは昨夜士郎の家にとり着き、暫く候することになったんだという。

…ぶつちやけ真つ赤な嘘なのだが、本当のことを言うわけにもい

かない。
「なるほろ、そんな経緯があつたんだねえ。…でも、どうして坂田さんたちだったの？」

鍛えるにしても士郎はもう体は出来上がってるし…もしかして、剣術の稽古とか？」

「そうですね。聞けば、あなたは学校の教師を務めていると聞きます。

おそらく、切嗣があなたの体調に気を使ってギントキたちに依頼を申し込んだのかと」

「もう切嗣さんつたら、私はこのくらい全然平気なのに。」

まあ、あの人々が直々に依頼した人たちを寄越したんだつたら。遠慮なく甘んじようつかなく」

大河が若干黄色い声を出しながら頬に手を置いて舞い上がっている。

そんな大河を他所に、士郎はセイバーに近づいて耳打ちする。

『なあ、セイバー。それって俺がこれからセイバーたちの稽古に付き合わなくちゃならないんだよな？』

『ええ、大河たちを欺くためとは言え。何もしなければ流石に怪しまれるでしょう。』

士郎には申し訳ありませんが、構いませんか？』

『ああ。正直、藤ねえたちを騙すのは気が引けるけど…』

本当のことを言うわけにはいかないとは分かっていても、家族同然の大河や桜に嘘をつくことに罪悪感を感じる士郎。

大河は、「あ、そうだ！」といって銀時たちに向き直り元気よく言う。

「私の名前は藤村大河。士郎の学校の教師と監督役をやってまーす！ 今後ともよろしくー」。

んで、この娘は間桐桜ちゃん。士郎と同じ学校の後輩で、ちょっと照れ屋なところがあるけど、とっても良い娘だから仲良くしてあげてねー」

「ふ、藤村先生。先生からしなくてもよかつたのに…。あ、こ、今後ともよろしくお願いします」

「……おう、よろしくな。(はい、こちらこそ)(よろしくアル！)(これからもよろしくお願いします。」「」「」

桜はじどろもどろながらもはつきりと挨拶をする。そんな桜に万事屋メンバー+ は挨拶をした。

新八はふと何かに気づいて、士郎たちに訊ねた。

「そついえば気になったんですけど、時間は大丈夫なんですか？
今日も学校があるんですよね？」

「え？」「え？」

すると、土郎、大河、桜は一斉に時計へと視線を向けると。時刻は7時を過ぎていた。時は止まる（主に大河が）。

「ってもうこんな時間！！？ 会議に送れちゃうよー！！！！
土郎、桜ちゃん！！ 私先に行くからっ、後はお願いー！！」

大河は騒々しく足をばたつかせ、土郎たちに戸締り等を任せ。衛宮邸を後にして大急ぎで学校へと駆けていった。

残ったメンツは大河が出て行った、開けっ放しの戸に顔を向けたまま硬直していた。

土郎はようやく思考が戻ったのか、桜の方へ顔を向けた。

「あゝ、桜。俺たちも行くか？ もう時間もないし」

「…え？ あ、はい。わかりました」

「それじゃあ、俺は着替えてくるから。桜は塀の近くで待っていてくれ」

「はい。それじゃあ、お先に失礼しますね」

桜は立ち上がり、居間を後にする。そして自分の部屋へと着替えにいく土郎の後を追うセイバー！

残った銀時たちはどうしたものかと考えていると、障子の向こう側から桜がそつと顔を出して銀時たちと目が合うと大慌てで出てきて、向き直ると遠慮がちに言う。

「あのおゝ…。さつきも聞いたと思うんですけど。これから学校へ行くので誰も居なくなるんですけど、大丈夫ですか？

まだ学校まで時間があるので冷蔵庫の中にあるものや、お風呂場の場所など教えますけど……」

何が大丈夫なのかと言うと。他に誰も居なく、士郎たちが帰ってくる間、家事は銀時たちがしなくてはならない。

家の構造を知らない銀時たちには不憫かと思いい、冷蔵庫にあるものや風呂場の場所などを教えようと戻ってきたのだ。

「あ、はい。それじゃ少しの間よろしくお願いします間桐さん。銀さんも神楽ちゃんも案内してもらいましょよろよ」

「んゝまあ、そうだなあ。めんどくせーけど、少しはこの家の構造くれーは知っておかねえとな。んじゃ行くぞ、神楽あー」
「うん」

銀時はめんどくさそうに頭をボリボリとかいて立ち上がり、桜に少し案内させてもらうことになった。

桜はまず、台所の説明を始めた。

「えつと……台所なんですけど。何処に何があるか分かりますか？」

「はい、ついさっき士郎さんにある程度食器と器具の場所とか教えてもらったのである程度は大丈夫です」

「そ、そうですか。……そ、それじゃあ。次はお風呂場へ案内しますね」

居間を後にした銀時たちは、少し歩いて風呂場の前に着いた。傍から銀時と神楽がなにやらひそひそと話をしていたが、新八は取り合えず無視をして風呂場近くの洗面所へと入った。

「ここがお風呂場です。お風呂を沸かすときはあちらの機械がありますのであの機械を使ってください。タオルはこのタンスの上から

2番目から3番目にあります」

「わざわざ案内してもらってありがとうございます。間桐さん」

「いいえ、お気になさらず。家の構造とかを教えないと何かと不憫かと思っただので」

「そこまで考慮してもらっていたなんて…、本当にありがとうございます」

「ふふっ、それじゃあお言葉を受け取っておきますね。志村さん」

「あ、あの、僕の話は呼び捨てでも構いませんよ？ 見たところ
同い年みたいですし」

「そうなんですか？ それでしたら私のことも呼び捨てで構いませ
んよ？」

「え？ い、いいんです？ 自分で言っというてなんですけど…。あ
って数分くらいで呼び捨てで呼び合うのはどうかと思っただんですけ
ど…」

「別にそんなこと気にしませんよ。それに、志村さんとは何か近し
いものを感じるので」

「そ、そうですか？ …そ、それじゃあ。改めて…ゴホン！ …よ
ろしくね、桜ちゃん」

「はい、こちらこそよろしく。新八くん」

案内してもらった桜に感謝の言葉を送って、以外に気が合ったの
かこれから仲良くなるうと呼び捨てで呼び合おうと持ちかける新八
桜は心よく承諾し、改めてお互いに呼び捨てで呼び合って、自分
から持ちかけてきた新八は照れていた。

そこで、何やら若干良いムードになっている二人に銀時と神楽は
ヒソヒソ(?)と話している。

「おいおい、新八の癖にあんなムードになってるぜ」

「まさかの展開アル。でもどうせ新八ネ。長続きしないアルよ」

「…アンタら、聞こえていますから。って言うか、僕がこんな雰囲気

になつちやダメなんですか!？」

「当たり前アル。お前は一生童貞のまま生涯を終えるという宿命の下に生きているネ。だからお前に彼女という存在は言語道断ネ」

「何だとコラアアアアアアアアアア!!! 上等だ!!! 30過ぎまで童貞を貫いて、魔法使いになってやんよおお!!!」

やかましく吠えている新八をほっぽって、桜を連れてそそくさと風呂場前を後にする銀時たち。そして、相変わらず煩く吠えているどうて…もとい新八はその後を追いかけた。

そして、玄関前に着くと。制服に着替えた士郎とセイバーが玄関前にいた。

士郎は銀時たちに気づいたのか、銀時たちの方に向いた。

「あれ、外で待ってるもんだと思ったら。銀さんたちとどこに行っていたんだ桜？」

「この家、結構広いですから。ちょっと屋敷内を案内してました」

「そうか、本当は俺がやるべきことだった事を桜にやらせてしまつてすまない」

「いえ、お気になさらないでください」

士郎は桜の物言いにいまいち納得できず、口を開こうとした時にふと時計を見ると時刻は7時半を過ぎていた。

少しあわて気味に士郎は話しを切り上げた。

「ん〜、桜がそういうんなら。…ってもう結構時間が迫ってるな、少し急ぎ足で急ぐぞ、桜」

「あ、はい。先輩」

「それじゃ、セイバー。留守番よろしくな」

「士郎、何かあればすぐに呼んでください」

「だから大丈夫だって。…あ、銀さんたちもよろしくお願いします」

ね

「おう、きいつけてな」

「いってらっしゃい。士郎さん、桜ちゃん」

「帰りに酢昆布買ってこいヨ」

士郎と桜は、銀時たちに見送られ。衛宮邸を後にする。

そして、残った銀時たちは。

「銀さん、これからどうします？」

「どうするも何も、テキトーに寛げばいいだろ。俺ちょっと寝足りねーから寝なおしてくるわ」

ダルそつに頭をボリボリと掻いて玄関前を後にする銀時。残った新八、神楽、セイバーは一先ず銀時の言つとおり、居間で寛ぐことにした。

第五訓「知らない人が突然家に居たらマジで焦るよね?」(後書き)

関係ないのですが、サッカーで日本が大活躍しましたなあ。

あの調子だったら日本もしかしたら結構いけるんじゃない? って思いました、パラグアイに負けちゃいましたねえ。(ノ、)

さて、次回予告です。

次回予告!

「銀さん! その人一体誰なんですか!!?」

「あー、いや。何か散歩してたら道端に倒れてたから回収した」

「いや、人を物みたいに言わないでくださいよ!! どうするんですかこれ!!?」

「落ち着くアルぱつつあん。そんなだから何時まで経っても新八ネ」

「んだとー!!!」

「私の名はマジカルメディア! 古代から呼び出されたマジカル美少女よー!!!」

「...誰?」

「次回! Fate/Unlimited Silver Sou
1、第六訓「真夜中にフードを被ったヤツにはご用心」!! 次回にステータップアップ!!!」

...キャラブレイクで申し訳ないです。orz

第六訓「真夜中にフードを被ったヤツにはご用心」（前書き）

どうも、作者です。この頃更新が遅れて申し訳ありませんようやく更新です

銀時「ったくおせーんだよ。もつと早く書き上げろってんだよ」

神楽「全くアル、お前の更新の遅さで楽しみにしている読者の気持ちを考えるヨ早」

新八「いやちよつと待てエー！ー！ー！ー！ 神楽ちゃんいくらなんでもそれを言うのはまずいって！ー！ー！ 本当にこの小説終わっちゃうよ！？」

神楽「うっさいアル新八。チェリーボーイは大人しくママの乳でもすすってな」

新八「だから童貞舐めんなアー！ー！ー！ー！ 俺が30過ぎて童貞貫いて、加藤の鷹という存在に転生してやんよおー！ー！ー！」

まあ、そんな童貞は放っておいてそろそろ本編始まりますよー。つてな訳で…

「」「」「どござー！ー！ー！」「」「」

新八「おiiiiiiiiiiiiiiii！ 俺を無視すんじゃないやねえー！ー！ー！」

第六訓「真夜中にフードを被ったヤツにはご用心」

「ZZZZ、ZZZZ……ZZZZZZZZ……。……んがつ。んつ……
…卍解、月牙　しょー…」

しよっぱなから某死神アニメの主人公の必殺技を寝言で言う。
今作品の我らが主人公坂田銀時。

前回銀時たちは学校に行く士郎たちを見送った後。

銀時は先ほど自分が使っていた寝室で寝直した銀時は、それはもう気持ちよさそうに口を半開きにし、鼾いびきを掻いて寝ていた。

「……んつ。ふつわあ………寝不足だった分すつきり寝れたぜ。
あーよく寝た」

そういうとまた大きな欠伸をかき、頭をボリボリと掻いて視点が定まっていない目でふと時計を見ると、時刻は丁度3の刻を指していた。

あゝそりゃ眠気もすつきり覚めるわなんぼやき、よっこいしよと体を起こして立ち上がり取り合えず居間に向かうことにした。

居間に着き、ういーっす銀さんインしましたよおーと言いながら障子を開けるが、そこには誰もいなかった。

はてと銀時は居間を後にして玄関に行き、靴箱を調べるが新八や神楽の靴があるので外に出かけては居ないことが分かれると銀時はその場で考えた。

んん、別の部屋で寝てるってのはねーだろうし。はて、あいつら何処に行った？

ちっと1から3までの選択問題で考えてみよー。

？、この屋敷に道場があると聞いたので、おそらく新八たちは道場で稽古している。

？、やっぱり客間の寝室で3人一緒に寝ている。

？、風呂場でまさかのぱっつあんがハーレムを満喫している。（爆）

えーつと、まず？は論外。

ぱっつあんがハーレムなんてありえねーだろ、ダメガネだし童貞だし。

？は…ねーだろ、川の字で添い寝ですかコノヤロー。

ってか実際にそんな状況になってたら逆に寝ぼけた神楽に潰されそうだしな、うん。

…ってことあーやっぱ？かね。

相変わらず新八の言われようには目も当てられない酷い言われようである。

実際に新八が銀時の心を読み取れる能力があるとするならば、きっと絶叫しながら吼え続けていることだろう。

まあそんなことはさておいて銀時は早速道場へと足を運ぶ、すると奥から乾いた音が絶え間なく響いてきた。

その音は道場に近づいて行くにつれて徐々に大きくなっていき、道場の前へついた銀時は戸を開けるとセイバーと新八が竹刀で打ち合っていた。

そして横目でチラッと見ると、神楽が横になって頬杖を付きながら寝ていた。

神楽を見つめていた視線を前に戻し、精がでんなあなんてぼやきながら銀時は戸を閉め腕を組んで壁に腰かけ、二人の稽古を観戦する。

それから約数十分ほどして二人は構えを解き、一礼して銀時の方へ戻ってきた。

「あれ銀さん、何時の間に起きていたんですね。疲れは取れましたか？」

「おう、ぱつつあん。もうぶつちぎりだぜ。それよか随分精がでてんじゃねーか」

「はい、セイバーさんに剣術の心得があるのかって聞かれて。そうですって言ったら、稽古してもらっていたんですよ」

戸を腰掛けている銀時に気づいた新八は銀時に軽く挨拶して、新八が顛末を簡単に説明してもらつと、銀時が口を開き心にも無いことを言う。

「へー、俺を差し置いて他のヤツに浮気ですかコノヤロー」

「…いや、浮気するも何もアンタ一度も稽古してくれたことないでしょうが」

新八の言うことはごもつともである。

第三者も大半がご存知だろうが、銀時は新八に稽古のけの字も教え込んでいないのだ。そりゃ他の人にチェンジするのは当たり前だ。そんなことも何処吹く風と気にせずスルーし、セイバーが銀時に話しかけてきた。

…心なしか、目が輝いているような気がする。

「ようやく起きましたかギントキ。それよりも今は暇でしょうか？」

「んーまあまあ暇っちゃ暇かねえ」

「それでしたらー！ 私と試合を」だが断る「む、なぜですか。理由を述べてください！」

「いやー、俺ちよつと急用思ひ出したわー。んじゃなー」

そして、銀時はその場から逃げるように道場を後にした。

そんな状況に唾然としているセイバーに、新八はセイバーの傍らによって言う。

「無駄ですよセイバーさん。銀さんは普段そういうのやりたがらない人ですから、諦めた方がいいですよ？」

「…むむむ、一体どうやったらギントキをその気にさせることができるのでしょうか…」

「まあ、方法はあるにはありますけど…。でもどうしてそこまで銀さんと試合と試合をしたがるんですか？」

新八の問いにセイバーは答えず、目を閉じて顔を少し伏せた後語り始めた。

「私が最初、ギントキを敵と勘違いして襲い掛かった時に、彼の剣から迷いは無く強い意志を感じ取りました。

…それと、彼が一瞬見せたあの俊敏な動き。並の鍛え方ではありません、おそらく相当の戦闘経験を積んでいるのでしょう。

そして、彼が言い放ったあの一言。迷い無く、そして彼の瞳から強い意志を感じました。

ですから私は知りたいのかも知れません。…彼の強さの秘訣を「セイバーさん…」

新八は思う。

英霊とは優れた働きをした者に対して敬意を込める言葉、という意味で知ってはいた。

だが、この世界での英霊とは一体どういった意味なのだろうか？自分の推測でしかないが、きっとこの世界の英霊たちは過去に偉大な功績を残し、そして長い月日が経つてもなお伝説として語り続けられている者たちを言うモノなのだろうか？

そういった疑問は数多くあるが、新八の中で…否恐らく侍の国と

呼ばれていた江戸にとって知らない人などほほ居ないだろうという者が頭に過ぎる。

その人物の名は”織田信長”。

自分たちが生まれるずっと前、尾張国守護代の一家老に過ぎない織田家を見識の広さや合理性と冷徹さを兼ね備えた知性によって、全国第一勢力まで押し上げた人物である。

もう少して天下を取れると思った矢先に重臣の一人である明智光秀率いる明智軍の謀反により、織田はほぼ壊滅。

本能寺に戻った信長はその本能寺にてその生涯をとじた。

そしてその伝説は今も語り継がれ教本にも載るほどの有名人だ。

おそらくセイバーも、そんな教本などに載りそうなほど有名な人物なのだろうと予想する。

正直聞きたいと思ってはいたが、セイバーにも語りたくない話の一つや二つはあるだろうし、それに今はその時ではないだろうと思いい、それ以上深く考えないことにした。

「それよりも、シンパチ。ギントキをその気にさせる方法とは一体なんなのか教えてくれませんか？」

「え？ あ、ああそれはです　　って言えばいいんですよ」

「なるほど……ですがあまり気が乗りませんね。そのような嘘をつくなど私の騎士道に反します」

「ですけど、銀さんをその気にさせる方法なんてそれ以外思いつきませんか？」

「むむむ……」

新八の提案に乗るか否か、彼女にとって苦渋の選択をせまられるセイバーなのであった。

さて、衛宮邸の道場から場面が変わり。

色々言われている坂田銀時かというと、寝室で外にでる準備をしていた。

黒いコートを着ているときに銀時はそういえばと思い出して着込んだコートを見る。

そついや、このコート凜に借りっぱなしだったな。今度あったときに返すか。

銀時はそう思いながら完全に着込んだコートのポケットの中に財布を入れると寝室を出て玄関へ向かう。

そしてブーツを履いて戸を開けて衛宮邸の門をあけて外に出た。

そんな彼が目指すのは言わずもがなコンビニである。

そして数十分後、あるコンビニ着き中へ入る。

んで、銀時は彼の愛読しているジャンプを手にとって睨めっこしていた。

「……」

確認よし、金は…うっしこの前凜からもらった金でギリギリ買える！！ 後は…。

手に持っているのがジャンプであることをしっかりと確認した後、ポケットに手を入れ財布の中身を開き、金が足りていること確認しレジへ行き、少々込んでいるため並ぶ。

ようやく自分の番になりレジの前に立ちジャンプを置くと、店員がお決まりの台詞を言ってジャンプを手に取り機器でバーコードを

side gintki end

Side Change:?????

「ハア…、ハツ…ハツ…」

どうやらそろそろ限界の時がきたようだ。

私は自身のマスターを殺し、他のマスターを求めてさ迷っていたが結局良いマスターは見つからず、自身の魔力でこの体を留めるのに限界がきた。

なぜ自身のマスターを殺したのですって？ それは私のマスターは私を召喚した瞬間にこう言い放ったのよ？

「なんだ。一番最弱のサーヴァントじゃないか」って。

私は最初それでかなりむかつかっていたけど、トドメとばかりに「ただど美人だしスタイルもそれなりにいいから俺の肉奴隷にしてご主人様と呼ばせてやる」といったのよ？

そこで私の堪忍袋の緒が切れたつてもよ。

そしてマスターを殺して令呪も奪い取って、今に至るといわけ。

ああ。でも消える前にせめて。良い男に出会いたかった。…まあ、裏切りの魔女と言われている私にはそんな資格はないのでしようけど。

徐々に薄れゆく意識の中、一つの人影がこちらに歩み寄ってきた。近づくにつれその人影の容姿が明らかになってゆく。

その人物は男だった。

男は真っ黒なコートを着て髪は銀髪で天然パーマな髪型をしていた。

視界がボヤけてよく見えないが、その男がこちらの顔を伺うようにして私を抱き上げてきたので何とか動く目を向けて見ると中々に男前な顔立ちだったが、その男は死んだ魚のような目をしていて、とても頼りなさそうに見えるが、その赤い瞳の奥底には強い意志を宿しているように見えた。

この男だ。この男であれば、私の全てを捧げていいかも知れない。この男だったら。

私は最後の力を振り絞り、顔を上げて男の唇と自分の唇を近づける距離が零になった。その間に、私は男の左手にあるものを施した。マスターの証である令呪を。

そこでようやく唇を離し、私は人形のように力なくうな垂れた。男が何か叫んでいるようだがもはや限界を超えたのか視界と聴覚が正常に機能していない、消える危機から脱したためなのか、それともこの男の腕の中にいるのが安心したのか、どちらか分からない。だが今はそんなことはどうでもいい。今は、魔力を回復させるために寝て魔力を”貯え”なければ。

そして私は意識を手放す寸前。

何とか機能している唯一の感覚で、上下に揺すられているような感覚を覚えた。

どうやら、私はおんぶをされているようだ。

本来なら気恥ずかしくはあるが、今はそれどころではない。早く休んで魔力を回復させなければ。

そんな気持ち之余所に、私は本当はこう思っていたのかもしい。

ああ、他人の。しかも男の背中がこும்大きくて。広くて。

力強くて。そしてとても優しく、安心できる背中なのだろうと。

そして、私は意識を手放した。

side ??? end

「…あゝあつ。まったくこれどう説明すりゃいいんだ？」

銀時は背中に抱きかかえた人物を脇見見ながら歩いて言う。

帰り道の途中倒れている人影が見えたので銀時はその場まで駆け寄り、仰向けに倒れていた体を上向きにし、抱き上げると被っていたフードが取れ、中からかなりの美人の女性が出てきた。

銀時は一瞬あまりの美人に見とれたが、肩を軽く叩くなどして容態を確かめっていると、いきなり自分の肩を掴んで自分の唇と重ねたのだ。

突然のことで戸惑い、声を荒げて当事者を追求しようとした途端、その女性が力なく人形のようにうな垂れそのまま眠ってしまったため、どこにぶつけていいか分からない疑問を心の片隅に押し込めながらも、この後どうすれば言いかと少々考える。

しかし、途中でめんどくさくなり。

取り合えず衛宮邸に帰ることにした銀時は、女性を背中に抱き上げて帰ってゆく。

それにしても、と銀時はもう一度担いでいる女性の顔を見て思う。

よく見りゃかなりの美人じゃねーか。こんなべっぴんとキスしちまったことといい、ずっと前に月詠の胸を触っちまったことといい。俺に女難の相でもあんのかこんちくしょう。

色々心の中で愚痴を零しながら、銀時は衛宮邸へと帰っていった。

そして、彼が衛宮邸に帰ってみると。

玄関でセイバーが待ち受けていてまた試合を申し込もうとしたときに、セイバーは銀時が担いでいる女性に気づいて突然臨戦態勢をとり。

何事かとそろそろと玄関に集まっていき、そして何故か衛宮邸に居る凜が銀時が抱えている女性に気づいてまた臨戦態勢でまさに一触即発の状態。

何とか土郎と新八によって何とか抑えてもらい一先ず居間へ移動したのだが、戦慄とした空気が漂い本日2度目の気まずい空気に。後に凜の説明で、銀時は自分が担いできた女性がサーヴァントだということ教えられ。

事の重大さに気づいた銀時の顔が見る見る内に青くなっけいき、そしてまたサーヴァント勢が臨戦態勢になり一触即発。

銀時がこの騒動に試行錯誤を凝らし、解決するのに深夜すぎくらいになったのはこの際余談とさせていたどころ。

第六訓「真夜中にフードを被ったヤツにはご用心」（後書き）

新コーナー

銀八「おしえて!!」

みんな「銀八どうじょー!!」

銀八「ハアアイ。新コーナー始まりましたあ銀八道場。まあ、つまるところアニメの銀八先生とタイガー道場を組み合わせた新コーナーですね、はい。」

さあそんな訳でこのコーナーは読者の質問などを受け付けるコーナーです

??「ちよーつとまったー!!」

銀八「ん？」

??「この私たちを差し置いて何が新コーナーかああ!!」

銀八「ああ、虎とブルマね。んで? なんのよう?」

師匠「ちよつと!! Fateといったら私たちでしょ!! 私たちを差し置いて何新コーナー仕切つてんのよ!!」

弟子一号「そーだそーだ!! 部外者はかえれ!!」

師匠「チェスト!!」

バジーン!!

弟子一号「あいたつ!!? な、何をしますかししよー!!」

師匠「弟子一号! 今作品は銀魂とFateのクロス小説から生まれたコーナーなのよ。つまり! 銀八先生もメンバーの一人!! それを、部外者は帰れとは何事かあー!!」

弟子「うう…、申し訳ないっす」

銀八「んじゃまー、これからこのメンツでたまにはゲストも参加す

るって形でこれから質問やリクエストなどにお答えしていくんでえ、
よろしくおねがいしまーす」

虎&ブルマ「それじゃ、またねー!!!」

次回予告!!!

新八「ちよつとおー!! 銀さんが聖杯戦争の『マスター』になつち
やったよ!!!? この後一体どうすんの!?!」

凜「落ち着きなさい新八。こういうときは素数を数えるのよ」

新八「いや…素数なんか数えても落ちつかないし、それに何処の漫
画だよそれ!!!」

凜「あら、意外に詳しいのね新八」

士郎「…俺はお前がそんなことを知ってることに驚いてるよ」

銀時「さて次回、Fate/Unlimited silver

Soul第七訓「物語の主人公は何かと厄介ごとに巻き込まれやす
い」…んじゃ、投影開始!」

士郎「…銀さん、俺の台詞をパクらないでください」

第七訓「物語の主人公は何かと厄介ことに巻き込まれやすい」（前書き）

ようやく書き終えた…。

新八「お疲れ様です。粗茶どうぞ。…それにしてもそろそろ夏も終わりですかねえ〜」

ああ、こりやどうも。…ん〜何か夜になるとめっさ涼しいんだよねえ〜。こりやそろそろ夏も終わりがねえ〜。

新八「こうしてまた冬が来て、そしてまた一年が過ぎちゃうんでしようねえ〜」

そうねえ〜。

『ゴクゴク…はあ〜。というわけで始まります』

第七訓「物語の主人公は何かと厄介ごとに巻き込まれやすい」

落ちた日は昇り太陽が山の向こうから顔を完全に出し、冬木市を照らす頃にある家で一人の人物が目覚めます。

「……んっ、…ここは？」

目を覚ますと、見知らぬ天井が視界に入ってきたため開口一番がこれなのはいたし方ないことだろう。

その人物はどうやら女性のようだ。腰まである綺麗な紫色の長髪に、美しく整った顔立ち。

そして、昨夜銀時が担ぎ込んできた女性で。

凜の説明で彼女は人間ではなくサーヴァントであることがわかり、女性の着ている服装や特徴から、おそらくキャスターなのではと推測する。

だがあくまで推測でしかないので、この女性が起きるまでは保留ということになっていた。

話を戻そう。

そんな彼女は上半身を起き上がらせ、辺りを見渡すと。ここはどうやら風流な武家屋敷のようだ。

「…？ ……ヒイツ！！？」

不意にキャスター（仮）は横に視線を向けると、銀髪の男…銀時が胡坐を掻き、腕を組んで転寝している…のだが、何故か目を全開にしているのか、眼球がものっそいカツサカサになっていた。つてか心臓に悪いのでやめて頂きたい、ぶっちゃけ超怖い。

いやどんな寝顔してんのよこの男！！ 瞼半開きは聞いたこ

グスタートしながら寝てるのよ！！

私が余所見してた間にどうやって用意したのよ！！？ 絶対に寝てないでしょっ！！ だってクラウチンググスタートだもの！！どこかに走り出すつもりだもの！！！！

大声を全開で出していないにも関わらず、何故か肩から息をして額には冷や汗が流れており、毛布を思いつきり握り締めこの男から遠ざかるにはどうしたらいいか必死に思考を駆け巡らせていた。

って、何で何もしてないのはずなのにこんなに疲れなきやならないのよっ。…冷静になりなさい私、深呼吸…深呼吸…。

キャスターは息を深く吸って吐いて吸って吐いてを繰り返してようやく落ち着きを取り戻し、銀髪の男を再度見ると、彼女はあることに気づく。

そういえば…この男どこかで見たような気がするわね。…少し確かめて見ようかしら。

キャスターは早速銀時の様子確かめながら、ガン開きな瞳孔を気にしながら恐る恐る腕を組んでいる左手をゆっくりと手の甲が見えるところまで持ってゆくと、手の甲には表現しにくい刺青のようなモノが浮かび上がっていた。

やはり、この男は ！？

キャスターは何かを確信したかと思った瞬間、突然銀時が頭を上げて目を擦り始める。

どうやら左手をいじっていたせいでおきてしまったようだ。

「…んあ？ もう朝か…。ふわあ〜…ん？」

欠伸を掻いた後、銀時は起きている女性に気づいたのか、カッサカサに充血して真っ赤になった目を向けて言う。

「おう、やっと起きたのか。どうだ？ 身体の具合は、どっか痛むところとかあるか？」

彼を知ってからあまり月日が経っていないモノが見たら思わず凝視してしまいそうなほど、嫌に親切な銀時が女性に近寄っていく。

だから、目が真っ赤ッ赤になりすぎて某舞台監督みたいになっている目でそんなに詰め寄らないで頂きたい、ガチで怖い。

女性も怖いのか、銀時が近寄っていくにつれ、女性も徐々に後ずさりする。

「どうしたんだ？ そんなに顔が蒼くなっちゃまって…。やつぱどこか調子悪いんじゃない？」

そんな彼女の心境など一切気づいていないのか、相変わらず親切に対応している銀時がどんどん女性に詰め寄り、女性は後ずさると言う、どう見てもホラー映画のワンシーンにしか見えない。

そして後ずさっている女性の後ろの壁が立ちはだかり、これ以上後ろに下がることができない。

徐々にお目々が真っ赤な銀時が近寄ってゆき、そろそろ彼女の恐怖心も最高潮に達した時。

「…エ、冥火^{エトナ}—————！！！」

「ぎゃあああああああああああああ！！！！！」

つい彼女は自身の得意技を炸裂させてしまい、その瞬間物凄い爆

発音が衛宮邸に鳴り響く。

そして、その騒動を聞きつけて複数の足音が銀時たちのいる寢室へと駆けてくる。

「どうした！！　なにがあったんだ銀さん！！！！？」

まず最初に障子を開けて入ってきたのは少々ボサボサとした短い赤毛、ジーパンと青と白の長袖という普通の格好をした少年、衛宮士郎。

その後ろに白いYシャツに藍色のスカートを履いた金髪の少女セイバーと、赤いチャイナ服を着た宇宙最強の戦闘民族、夜兎族の一人である少女神楽と、地味眼鏡どうていこと新八が続いて入ってくる。

「おいしいおいしい！！　何で俺のだけ説明がアバウトな上に酷い言われようなんだああああ！！！！　それと童貞舐めんなアーーーー！！！！」

「うっさいわよ新八、近所迷惑を考えなさい」

「うっげっ！！！！？」

後から送られて学生服の時と違い、赤い服と黒いスカートを履いている少女遠坂凜が新八にガントと呼ばれる呪いの魔術をお見舞いし、それに撃たれた新八は変な悲鳴をあげて気絶した。

そして凜もきたところで凜も障子の奥を確認してみると、そこにはなにやら肩から息をして自分の身を護るようにして身体を抱いている女性と　なぜか真っ黒にコゲた銀時っぽいものが煙を立てながら倒れていた。

一同はそんな光景に沈黙。

そして、黙っていた者たちの一人である士郎は閉じていた口を開き、全員の疑問を代表して言う。

「
なんでさ」

「なんやかんや色々な疑問が混ざり合って混乱している中で、なんやかんやで唯一言うことができたのが、自分の口癖だった。」

「そしてなんやかんやで一度キャストを落ち着かせ、銀時を起こした士郎たちは取り合えずなんやかんや居間に移動し食卓の前にそれぞれ座った。」

「…いや、なんやかんやばっかで全然説明する気ないよね？ めんどくさがってるよね？」

「新八、誰に話しかけてるんだ？」

「虚空に向かって話しかけている新八に対して、士郎からツッコミが入る。」

「んで、神楽とか凜に何かちょっと汚物を見るようなジト目で新八を見ながら吐く。」

「凜！。新八がとうとう薬にまで手を染めちゃったみたいアル。幻覚に喋りかけてるアル」

「それは言っちゃダメよ神楽。彼が見ているものは薬による副作用で幻覚を見ているだけなの。今新八は頭がパーン！ 状態なの。だからそっとしておいてあげましょう？」

「…いや、薬に手を染めてねーし頭もパーンなんてしてねーよ！！！ 正常だから！！ 僕の脳は至って正常だから！！！！」

「そんなことより。「そんなことってひどくないですかセイバーさん！！？」 …その、ギントキ。大丈夫なのですか？」

「新八のツッコミを総員スルーし、セイバーも空気を読んで次の話

題へと移行することにした。

んで、新八の必死の講義をBGMにセイバーはまっくるくろすけもびっくりなほど真っ黒コゲになり、頭も天然パーマからパンチパーマになっている銀時に問う。

「ああ？ 大丈夫ってなにが？」

「ですから…、全身が真っ黒ですけど大丈夫なのですか？」

銀時はチラッと自分の体を見て「ああ」っと吐き。

「大丈夫大丈夫ー。こりゃドリフ爆発後スタイルって言ってな、大体3台詞後には何もなかったように元に戻るから」

「…いや、ドリフ爆発後スタイルってなんですか、銀さん…」

「まあこういうこと」

「って本当に直ってる!?!?」

意味不明なことを言っている銀時にツツコムんだ士郎は、瞬きをするにあら不思議。綺麗に元通りになっているではありませんか。それはさておき、いつの間にか実体化していたアーチャーが凜の方を向いて言う。

「マスター。そんなことより、話があるのではないか？」

「え？ …あ、ああ。そういうえはそうだった」

そういうと凜は両肘を付いて両手を重ね合わせ、真剣な表情になった。

騒いでいた新八たちは大事な話があるものだど雰囲気を感じ取り、一旦喋るのを止めて凜の方を向く。

だが、銀時は相変わらず真面目に聞く気がないのか頬杖を付いて鼻を穿っていた。

凜はそんな銀時を無視して口を開く。

「まず、単刀直入に言うわね。…私、衛宮君と手を組むことになっ
たわ」

「手を組んだって…：どういうことですか？」

「今は聖杯戦争中でしょ？ 今回の戦争は手ごわいヤツが結構いる
し、そいつを潰すまでの間衛宮君と手を組むことにしたの」

「確かにサーヴァントは手ごわい人たちばかりですけど、凜さん
がそこまで危険視するサーヴァントって一体…」

「まず、バーサーカーよ。アレほど強力なサーヴァントをどうやっ
て倒すか、今後の課題ね。…それと、学校に結界を張ったヤツね」
「穴力ニ？ それって食べられるアルか？」

神楽の予想だにしていなかったポケに、凜の片肘がズルツと食卓
からずり落ちる。

「んな力ニ居るわけねーだろアホ」

「でも銀ちゃん。もし居たら力ニなんだからひよつとしたらおいし
いかも知れないアルよ？」

「やめとけやめとけ、んな力ニが存在するとしたら、きっとその力
ニを食おうとしたら多分ケツをきられて四等分にされちまうぞ？」

「マジで力。ケツの裂け目が二つから四つに増えるちゃうアルか。
でもなんか格好よさそうアル」

「ばっかおめつ、全然格好悪いっつーの。考えてみる、ケツが四つ
になるってことはケツ顎が2つから4つに増えたみてーなもんだ。
想像したらメツチャ気持ちわりいだろーが」

「…っええ、確かに気持ち悪いアル。そんな怖いことをする力ニ
は恐ろしくて近づきたくないネ」

「だろ？ んな怖い力ニはやめといて他の力ニに…」

「いや、そもそもんな卑猥な力ニいる訳ねーだろ！ つーか何で力

二の話になるんだよ！！ 全然かんけーねーよ！！ ボケるのも大概にしる！！！」

先ほどのシリアスになりそうな雰囲気は何処にいったのか、完全に銀時たちの空気になってしまった。

セイバーと士郎はまたかと言うような感じでため息を吐き、アーチャーは頭を抱えていた。

そんな光景を唾然と見ていたキャスターは、近くにいる士郎に耳打ちをする。

「…ねえボウヤ、あの人たちは何時もあなの？」

「俺も最近知り合ったばかりなんだけど、あの人たちが何かしらすると必ずあなる…」

「…なんというか、あなたも苦労しているのね」

わいわいと騒ぎ出したギャラリーに、凜は肩をわなわなと振るえさせ、顔を伏せていて表情が伺えない。

その横に居たアーチャーはとてつもなく嫌な予感がしたので数センチ以上凜からずれる。

凜が「ねえ…」と言うと、がやがやと喋っていた銀時たちが凜の方に向いた。そしてそれを見計らい、顔を上げると。

「…お取り込み中申し訳ないんですけど。そろそろ本題に戻らせても構わないかしら？」

銀時たちがここに来てから本日二度目、”あかいあくま”ならぬ…、”あかいだいまじん”が最高の笑顔で訊ねしてきました。まるで、心なしか、最初銀時たちが遠坂邸に落っこちてきた時よりもさらに怖さと気迫も倍増しているのはお約束。

そんなあまりの凜の気迫に一同は完全沈黙、すると姿勢を戻して

背筋をまっすぐに伸ばして。

『イエス、ママ』

全員が軍人のような掛け声になってしまった。

騒いでいた銀時たちはともかく、大人しくしていた土郎たちもついつられて掛け声をしてしまうほど、凜の気迫は凄まじかったのが伺えるだろう。

しかも凜の横に居るアーチャーに限っては、「あれ？ 遠坂ってこんなに怖かったっけ？ ……なんていうか俺が居た世界の遠坂より怖さが次元違いなんですけど」なんてぼやいている始末。

偶然アーチャーのぼやきは他の人たちには聞かれてなかった。

まあ何がともあれ、取り合えず凜はゴホンと一つ咳払いをして姿勢を立て直す。

「…話を戻すわ。…それで、その結界が質が悪くてね。その結界内に居るヤツ全員を溶かして自分の栄養にしてしまう下衆なヤツよ」「なっ！！！？」

新八は目を見開いた。

神楽はどういうことなのかいまいち理解できず、頭にハテナを浮かべて首を傾げる。

「どうということアルか？」

「…つまり、簡単にいやあ人間を胃の中で溶かしてその栄養を自分の体に取り込んでしまうってこったる」

銀時は険しい顔で神楽にその結界が如何に恐ろしいものを簡単に教える。

すると神楽もようやく事の重大さと結界の恐ろしさをようやく理

解したのか、新八と同じように目を見開く。

「そんなものをそんなところで使ったら…!!」

「…少なくとも穂群原学園の生徒は数百は居るわ。そんなところで使ったら被害は甚大かもね」

「かもねって…、そんな他人事みたいに…」

言い終える前に、新八は途中で言うのを止めてしまった。

それは凜が重ね合わせた手を血がにじみ出ろつかというくらいに握り締めている、だが顔を伏せているため、表情が伺えない。

「これが戦争なのは十分理解しているわ。関係がない、罪のない人たちが理不尽な戦いに巻き込まれて。たとえルールを破って禁忌を犯そうと、他人を犠牲にしても聖杯を手に入れようとする。それが聖杯戦争。…十分分かってるわよ」

凜は顔を伏せて長々と、独り言を言うように語り始める。

凜もまた、聖杯を欲する一人であり。

それは自分の亡き父、遠坂時臣の意思を継いだからこそ自分は今の戦争に参加している。

だから勿論、参加するからには甘えなど彼女にしてみれば心の贅肉でしかない、だからそれを捨てて他の奴らを切り捨てても自分が聖杯を手に入れる。

だが、だがそれでも。

「…けど、気に入らないのよ。他の人たちを犠牲にするような下衆な思考してるヤツが…!!…そしてなによりも　私の土地で好き勝手しようなんていい度胸してるじゃないの」

彼女が顔を上げるとそこに居たのは怒りに染まった顔ではなく、

自分の土地で好き勝手やっている愚か者を捻り潰したいという闘志を燃やして不適に笑っていた。

士郎は啞然と凧を見ていて、神楽や新八も似たような顔をして凧を見ていた。

だが銀時は、そんな三人の反応とは違う反応だった。

この娘。最初はただのじゃじゃ馬娘かと思っていたが、なかなかどうして…こんな真つ直ぐな目してるもんかねえ。

それとよ、凧。お前さんの言う気に入らない奴をぶちのめしたっていうヤツは建前で、本当は関係のねえ一般人を巻き込みたくねえってという思いが見え見えだぜ？

銀時は凧に感心し、微笑んでいた。

最初凧に初めて会ったとき、彼女に聖杯戦争いうものを教えてもらい、自分もその聖杯を求め参加している一人と聞いて、最初彼女はその魔術師たちと同じ必要ならば姑息な真似をする奴らと一緒になのかと思ったが、だが彼女の場合、ただのじゃじゃ馬娘程度しか思っていないかった。

確かに、気に入らない奴をぶちのめしたいというのは誰しもあるだろう。

だがしかし、彼女が先ほど言ったことは裏腹に、実は関係のない人たちを巻き込ませたくないという、人情に満ちた心の裏返しだということに銀時は気づいていた。

そして良く見れば、新八や神楽にセイバーや士郎が彼女の心の意図を理解したのか、銀時と同じように感心して微笑んでいた。

凧は自分に向けられている視線にきづいたのか、怪訝な顔で言う。

「ちよ…何よ。みんな変な顔してこっちみて。気持ち悪いわねっ…。私の顔に何かついてるのっ？」

凜は銀時たちの視線や優しい微笑みに気恥ずかしさを覚えたのか、顔を赤く染めて顔をあさつての方向に向けて言う。

「いんあやあゝ、別に何でもねーよ。な？ 神楽」

「そうアルな。特に意味はないアルねゝ。な、新八？」

「そうですねゝゝ、特に何の意味はありませんね。そうですね、セイバーさん？」

「そうですね、全くといいほど深い意味はありませんよ。…

そうですね？ 土郎」

「ん？ ああ、遠坂がすごくいい奴なんだなってことだけだから」

「なつつつ！！！！？」

土郎が言った言葉がトドメになったようで、凜の顔が耳までトマトのように真っ赤に染まり、もの凄く動揺していた。

何気なくいったつもりで土郎は頭にクエスチョンマークを浮かべて顔を傾げる。

銀時たち万事屋ファミリーはしてやったりな顔をしていて笑いを抑えながら笑っていた。

そんな銀時たちに、セイバーは「まったく、あなたたちは…」と腕を組んでやれやれとため息を吐いた。

「な、なななななにバカなこといつてるのよっつ！！ い、今はそんなことどうでもいいでしょうがこのバカ土郎！！」

凜はどもりながら土郎に怒鳴りつける。

怒鳴られている土郎はどうして怒られているのか理由がわからず、凜に訊ねた。

「なんでさ。ただ俺は思ったことを」

「あああああ！！　もうるさいっ！！　アンタはもう喋るな、このペッポコ！！！！　……と、取り合えず話を戻すわよ」

凜がゴホンと一つ、咳払いをして取り合えず立て直す。

「えーっと、何処まで話したっけ……ああそうだ。それで、取り合えずその結界とそれを張った下衆なヤツをどうやって見つけるかは、士郎と対策を練るとして……。それで、次はこのサーヴァントだけど……ってアレ？　いない……何処にいったの？」

凜が次の話へ進もうとしたが、一つ席が空いていることに気づき、辺りを見渡して居なくなつた人物を探す。

そして見つけたようだが　。

「あ、いた。………」

確かにいた。居ただけけれど、片隅で物凄くどんよりとした空気がその人物周辺に漂っていて、体育座りをして指でのの字を書きながらいじけており、非常に近づきにくい雰囲気をもつている。

その人物とは……言わずもがな紫の女性、キャスターである。

「ふん……いいわよ。……どうせ最弱のサーヴァントだし、……F a t e の人気投票では所詮10位程度だし、裏切りの魔女ってレッテル貼られて悪女扱いだし。……いや、私だってね？　悪女と言われているけど根は清純で恋なんかもしちゃう純粋な女なのよ？　ピュアな心を持つてるのよ？　こう見えてもガラスのハートなのよ？　もういいわよ……。空気は個性って何処かの偉い人が言ってたもの。空気だつて私頑張れるもの……」

…かなり自虐的な独り言を長々といつているキャスターに、土郎にセイバーやアーチャーや新八や凜までもが冷や汗を流して苦笑している。

そんなキャスターの傍らにいつの間にかいた神楽がキャスターの肩に手を置いて励ましていた。

「お姉さんの方がまだいい方アルよ？ 私なんてゲロインなんてレツテル貼られて、周りから白い目で見られてるんだからネ」

神楽が他人を励ますのは珍しいとお思いがちだが、神楽は普段どんな人に対しても毒舌だが、本気で落ち込んでいる人には優しい一面がある。

そんな優しい言葉を掛けてくれる神楽に、キャスターは顔を上げて目じりに涙をためて神楽を見上げる。キャスターが見上げた瞬間、神楽が不覚にもちよつとムネキュンしたのは内緒だ。

「あ、貴女も私と同じように人気がないの…？」

「そうアル！ 私と同じ嫌なレツテルを貼られているもの同士これからも仲良くするヨロシ…！」

「…ぐずつ、ありがとう。私のことはキャスターと読んでいいわ。それで貴女は？」

「私は神楽アル！ これからもお互いよろしくネ！」

「ええ…これからもよろしく神楽。…同じ嫌なレツテルを貼られている者同士、頑張りましょう」

「…ああ、でも私銀魂の人気投票で6位だったアル」

その言葉を聞いた瞬間、キャスターが石のように固まり、しかも心なしかピシッと彼女の心に罅が入ったような音が鳴り響いた。

神楽はクエスチョンマークを浮かべて訊ねる。

「? どうしたアルか? 何か食ったもんにも当たったアル。バカヤロウ、どう考えても今お前がトドメ刺したじゃねーかよ!」
「いたっ!」

ワザと惚けている神楽に、銀時がグーで頭をド突く。

銀時はその後、何時の間にか再起動して顔を伏せているキャスターに近づいて謝罪の言葉を述べる。

「ああ…悪かったな。後でこのバカチャイナにはきつく言っておくからよ。…その、元気だせよ? な?」

銀時はそういつてキャスターの肩に手を置く。
すると、キャスターが顔を上げて。

「うぐっ…、うう…ひぐっ…えぐっ…。…もういやだ。わたしもうお家へかえる…」

涙を流して、しかも幼児退行していた。

銀時はそのまま思考を含む全てが停止した。

数秒後。

「おいしいおいしいおいしい!!!! キャスターさんあまりのシヨックに幼児退行しちゃったぞ!?!? どうすんだこれええええええええ!?!?」

「知らないアル。銀ちゃんが連れてきたんだから銀ちゃんが責任を取るべきアル」

「いや、お前せいじゃん!?!? お前がトドメ刺したからこんなことになってんだろーがあああ!?!? 何さも俺がやったことにしてんの!?!?」

「そうよ銀時、あなたが責任を取りなさいよ。自分の厄介ごとも解

第七訓「物語の主人公は何かと厄介ごとに巻き込まれやすい」（後書き）

銀八「おしえてえ〜」

みんな「銀八どうじょー！ー！ー！！！」

銀八「ハア〜イ。銀八道場始めましたよお〜」

大河「いよいよ私たちの初仕事ね！！ 気合入れていくわよ！！
弟子一号！！」

イリヤ「オツス、師匠！！」

銀八「元気いっぱいねえ〜。それと、早速ゲストをおよびしていま
〜す。今回のゲストはこちらで〜す」

セイバー「どうも初めまして。…ってギントキ…ですよね？ 一体
何をしているのですか？」

銀八「いいえ、違います。ここに居る俺は銀時 銀八なので予めこ
了承ぐださ〜い」

セイバー「は、はい。わかりました…」

銀八「…んじゃ、質問いきま〜す。ペンネーム【武士堂】さんか
らの質問で〜す。【1、これから先、士郎が銀さんの洞爺湖の木刀
を投影する展開はありますか？

他作品との f a t e クロスで士郎がクロス先のキャラの武器を投影
する展開がよくありますので。】…ズバリお答えします。恐らくは
あると思います」

イリヤ「アーチャーはともかく、今の士郎じゃ洞爺湖を投影するの
はまず無理でしょうねえ〜」

大河「え？ 銀さんの使ってる木刀ってそんなに凄いものなの？」

イリヤ「ええ、資料による情報だけ。完全に名前が洞爺湖で定着
しているけど、本当はギントキの世界の辺境の星にある金剛樹と呼

ばれる樹齡1万年の大木から作られた木刀で本当の名前は【妖刀・星碎】っていうの。だから、今の土郎じゃまだ投影はできないし、投影できるようになったとしても多分それなりに時間が掛かるんじゃないかしら」

セイバー「ほう、私の聖剣を受け止め、尚且つ神秘を感じ取れたのでただの木刀ではないと思っただけでしたが…まさかそれほどのもとは思いませんでした。そんなものを授かっているということは、やはりギントキは只者ではありませんね」

イリヤ「…（これが実は通販で普通に売られていることを言ったら、絶対にまずいことになるわね）」

銀八「まだあるぞ。【2、セイバーって物凄く強いですが、その強さの源はよく考えると聖剣やら鞘やら竜の因子やらある意味『外から与えられた』物ばかりな気がします。もしセイバーにそれらの物が始めから全て無かったとしたら、セイバーは自力で英雄になれたでしょうか？】」

セイバー「難しい質問ですね、その質問についての答えは私が…。確かに、私の強さの源は聖剣エクスカリバーや、その鞘アヴァロンなどがあつたからこそ、私はアーサー王として生きてきた。

…ですが、もし私が仮に選定の剣を引き抜かなかったとしたら、恐らく私はアルトリアと言う少女として育ってゆき、想い人と結ばれ、結婚して子を授け、成長してゆく我が子を見守り、そして老いて支えてくれた家族の中で生涯を終えていたかも知れません。

ですが、私はこの人生でも良かったと思っと思っています。なぜなら、きっかけが重なり合い、シロウと出会い、そしてなにより…ギントキたちに出会えたのですから。

それならば、こんな波乱に満ちた人生でも悪くはなかったのかもしれません。

…長々と失礼しました。私からは以上です。どうぞ進めてくれても構いません。…ってどうしました？」

大河「…ぐずつ。わだじは感動じだ！！ もじ自分が選定の剣に選ばれず普通の人生を歩んで行くはずだったかもしれない。しかし！！ それでも自分はこんな波乱万丈な人生でも構わないと言い切った彼女の真っ直ぐな心と健気さに全私が感動した！！！」

イリヤ「…そうね、私も柄じゃないんだけど。なんだか感情移入しちゃったわ。感動をありがとうセイバー」

セイバー「いいえ、私はただ質問に答えただけですので…」

銀八「セイバーさん、長い受け答えありがとうございましたと…」
「…つと言うわけで【武士堂】さん。廊下に立ってなさい」

大河「それじゃ！ 続いての質問ね！！ …えーつと、ペンネーム【サディスト】さんからの質問です。【銀さんが【キャスター】のマスター になっただけ…魔力うんたらはどうすんの？】…つとことなんですよ、ズバリお答えします。それは凜ちゃんや士郎の血液や食事などでのいでいくそうです」

銀八「確かこの世界の設定には、血にも魔力があつてそれを与えて魔力とか補充したりとかもするんだっけ？」

イリヤ「厳密に言えば、魔術師の血液の方が魔力が溶けやすいから魔術師の方がいいってだけの話、後セイバーみたいに魔力の供給不足を補うために食事を取ったりとか、そういうのもあるわね。」

えーと、2番目の質問【慎二と万事屋は【本編】で出会うんですか？】ズバリお答えします。勿論出会います」

銀八「多分次回あたりに出てくると思うんで、楽しみに待っていてください。そういうわけで【サディスト】さん、廊下に立ってなさい」
大河「これで終わり？ ん…合計で4件かあ…。まあ、初めにしではちょっといい方？」

イリヤ「まあ少しはマシな方じゃないかしら？ 少なくとも質問数が0よりはマシな方ですよ。えーと、質問やリクエストなどいつでも受け付けているのでどしどしご応募ください」

銀八「それじゃー」

全員『まったねー！！！』

次回予告！！

神楽「大変アル銀ちゃん！ 若布が陸を歩いてるアル！！」

銀時「はあ？ んな訳ねーだろ、若布が陸を歩くなんて…ってマジだよ！！？ マジで若布が陸をあるいてやがる！！？」

神楽「これは新スクープアル！！」

銀時「取り合えず、家に持ち帰っていつて若布味噌汁だな」

若布（慎二）「だから僕は若布じゃなあああああああい！！！」

銀時「次回！ Fate/Unlimited silver S
O U I 第八訓「陸を歩いているワカメを見かけたら、迷わず110
番通報しなさい」新八いゝしろゝ。いいワカメが取れたぞゝ。今日
は若布味噌汁たのまあゝ」

士郎「へえゝ若布かあゝ。どれどれ…って慎二！！？」

第八訓「陸を歩いているワカメを見かけたら、迷わず110番通報しなさい」

えーみなさま…1ヶ月ぶりです。

大変遅くなって申し訳ございません。

活動内容にも書いたとおり、今度からは今よりもう少し早く投稿で
きるよう頑張ります。

それでは本編をどうぞ。

第八訓「陸を歩いているワカメを見かけたら、迷わず110番通報しなさい」

それから4時間後、ようやく落ち着きを取り戻した女性は、先ほどの気恥ずかしさからか顔を赤面させながらも正座をして顔を伏せており、なにやら気まずい空気が漂っていた。

そして、彼女は意を決して顔を上げて口を開いた。

「さ、さつきは取り乱してごめんなさい。でも落ち着いたから大丈夫よ」

「…びやぼびぶいべびよはつびやへえー。…ぼんほびやひびよびやわ、びよへがびやひびよびびやわ(…やっと落ち着いてよかったですねえー。…ホント何よりだわ、それが何よりだわ)」

「…本当にすみませんでした」

彼女の眼前に佇む…何かこう、謎の物体Xみたいに真っ赤に晴れ上がっている生物みたいなモノがなにやらもごもごと喋っており何を言っているか分からなかったが、彼女はその物体Xに土下座をし、心の底から謝罪すると言う、とてもシユールな光景が展開されていた。

んで、目の前にいる生物Xは何を隠そう…坂田銀時その人なのである。

どうして銀時がこんな状態になっているのかは、説明するまでもないと思うが、知らない人のために一応説明すると。

先ほど、神楽の追撃による一撃(第七訓参照)によってシヨックのあまり幼児退行して幼児よろしく泣き喚いていた女性を慰めていた銀時。

その途中何とか正気に戻った女性は、先ほどの一部始終を鮮明に覚えていたらしく、顔全体がトマトよりも真っ赤になり、機関

車にも負けんくらいの水蒸気みたいなのを吹き出して、超が付くほどの気恥しさを紛らわすためか、銀時に凄まじい勢いのパンチやキック、魔術ラッシュが展開され、さらには「斗！！ 百拳！！」なんて技を放っていて色々やばげだったが、何故彼女がこの技を放てるのかはこの際ノーコメントとさせていたいただきたい。

んで、数十分後にようやく落ち着きを取り戻した女性が目にしたのは 冒頭のような有様になっていた銀時が倒れていたのだ。た。

それからまたまた数分後、ようやく意識を取り戻した銀時は何事も（？）なかったかのようによ元の位置に座り、キャスターは気になつて、何度も銀時をチラ見しながらも黙々と元の場所に座る。

あまりにも酷すぎる銀時の有様に凜たちは汗を流して苦笑しており、彼女は申し訳なさそうに銀時を何度もチラ見している。

ちなみに神楽は、土郎に出してもらった牡丹餅を夢中に頬張り、現状のことなどアウトオブ眼中。

縮こまっていた女性は、恐る恐る銀時に訊ねてきた。

「…えつと、マスター？」

「あん？ ますたーって誰？」

「貴方のことだけど…」

女性はそういい、何時の間にか元通りになっていた銀時に指を指す。

神楽は未だに牡丹餅を頬張っており、全く話を聞いていなかったが、セイバーと凜、新八とアーチャーは驚愕の色を浮かべていた。

銀時は「はて？」と彼女の指を指している方向にこそつてキョロキョロと周りを見渡し、ようやくそれが自分に向けられたものと気づいたのか、自分自身を指を指して聞き返した。

「え…俺？」

ることができずにいた。

その隣では、真横で思いつきり叫ばれたため、強く耳を押さえて忌々しそうに銀時を睨みつけるチャイナ娘が忌々しそうに言う。

「…うつせーなこの天パ野郎。何赤ん坊みたいにぎゃーぎゃー騒いでるネ。ママの乳でも恋しくなったアルか？」

「…いやあねえ、聞いてよー神楽ちゃあ〜ん。銀さんなんかマスターって言うのになっちゃったみたいなんだけどさあ〜」

「マスタード？ ホットドックでも奢ってくれるアルか？ …はんっ！！ そんなもので釣ろうたってお母さん騙されないからネ。巧妙な手口で詐欺ろうったってそうはいかないネ」

「…いや、あのね神楽ちゃん？ 最後まで聞いて？ だからね、そういうこと言ってるんじゃないか？ 銀さんサーヴァントのマスターってのに選ばれちゃってね？」

「大丈夫アル。銀ちゃんはなんやかんやでしぶといアルからな。んじゃ、そういうわけで死に物狂いで頑張るヨロシ」

「神楽ちゃあああああああん！！？ 俺を見捨てないでええええ！！！！ 頼むっ、見捨てないでっば！！ 三百円上げるから！！！！」

神楽に罵倒され、見捨てられてしまい拳句の果てにはその傍らで、士郎たちは完全に呆れ果てられ、冷たい目で見られちゃっている我らが主人公。

…まあ、ぶつちやけ情けない姿で神楽にすぎる銀時に、これには流石の士郎たちも呆れ果ててしまっても致し方がないのだが、もう主人公としての威厳もへったくれもねえのである。

そんな銀時をほっぱいて、紫の女性の方へ顔を向きなおすと、真剣な顔で凜に訊ねた。

「でもどうするんですか？ 銀さんがマスターになってしまったん

だとしたら、それって…」

「…もちろん、私や衛宮君と戦わなければならなくなるわね」
「なっ！！？」

無常な現状に、何の躊躇もなく吐く凜に対し、士郎は目を見開き勢いよく立ち上がり、凜に食って掛かる。

「そんな！！ 銀さんまでもこんな戦争に参加しなきゃならないのか！！？」

「… ええ、その通りよ衛宮君。必然的に銀時も私たちの敵になるということになるわ」

「くそっ！！ どうすりゃいいんだよ！！ 銀さんは強いと言っても一般人なんだから巻き込むわけにはいかないだろ！！？ 遠坂、何とかならないのか！！？」

「…… 落ち着きなさい衛宮君。一応方法はないでもないわ。令呪を奪い取るか、または使い切って契約は破棄すれば、その後は聖杯戦争が終結するまで協会で匿ってもらえるし、この殺し合いに参加しなくて済むわ」

凜は目を瞑りながら冷静に説明すると、目を開き、銀時の方に視線を向けて言う。

「… まあ、それは本人に聞いてみないことにはわからないことだけど。…それで、どうするの？ 銀時。アナタ、聖杯戦争に参加するの？」

「ああん？ あアーそうだなア…… まあ、ところでよ凜。聖杯って言うものは何でも叶えられるもんだったよな？」

「え？ …… ええ、余程のモノでない限りは叶えられるわ。…それで、何を願うつもりなの？」

「ああ…俺の願いは…」

銀時が最後の言葉は新八のド突きツツコミによって無効になってしまった。

新八にド突かれて食卓と接吻を交わしている銀時を余所に、新八はさらに怒涛のツツコミをする。

「もったいぶらせて出てきた願いが結局甘い物ですかアンタは！！！！何その衛生的にも管理的にも悪そうな甘ったるい願いは！！！！甘すぎる上に小さいんだが大きいんだがよくわかんねーよ！！！！他の魔術師だったらもつとマシな願いをするぞ！！！！」

すると銀時は何事もなかったかのように顔をあげ、何やらキザったるいポーズを取って言った。

「…何言ってやがんだ新八ィ〜。…人はな、願いを叶えようとする時は皆、己の理想に溺れるのさ…」

「お前だけ溺れてる！！二度と這い上がってくんな！！！！」

「それにだよ？確かにパフェは管理的に衛生的にも悪いよ。でもよ、もし残つちまつてるパフェが痛んだり溶けたりしたら、そのときはまた新しいものに変えてもらうから。…ほら、これだったら管理的に問題ねーだろ？」

「そういう問題じゃねーよ！！！！…ってゆーかそれ明らかに一生分じゃなくて永久的になってるよね！！！！？…つーか、管理的に以前の問題だつーの！！！！」

「わかったわかったって…。。じゃあ新品のを常に永久的に出してもらうようにすつから…」

「だからそういう問題じゃねーつつつてんだろおおおおおおおおお！！！！！！」

銀時のポケラッシュに負けじと、新八も怒涛のツツコミで対応。そんな二人の様子を見ていた凧は半ば呆然としながらも、感じた

感想をそのまま述べた。

「…毎度のことながら、新八のツッコミって凄まじいわね。普段はあんなに地味なのに、ツッコんでるときだけはものすごく輝いているもの」

「当然ネ。新八はツッコミそのものに存在定義があるようなもんネ。もし、新八からツッコミという要素をとってしまったら、残るものは眼鏡しかないネ」

「…で、ですが。疲れないのでしょうか？ 毎回あんなに大声を出しながらでは、いつかは喉がつぶれてしまうのでは…？」

確かにセイバーのいうことはもつともである。

だが、彼女の心配を余所に。神楽は冷静に答えを返す。

「安心するヨロシ。この程度のツッコミができないようじゃ、私たちの世界でやっていけないネ。もし、お前らが万が一ツッコミをする場面に遭遇してしまったら、この程度はできないとお話にならないネ」

「…い、色々な意味で厳しい世界なんだな……って私たちの世界？ 神楽、それってどうということなんだ…？」

士郎はふと、神楽が言った言葉に疑問に思い、神楽に訊ねた。

「だって、私たちはこの世界の住人じゃないネ。…あまり難しいこととはうまくいえないから単刀直入に言うと、私たちは異世界から来たネ」

「はあ？ い、異世界って…」

今まで口には出さなっていたが、元々銀時たちがどこから来たのか知らされていなかったため、士郎は今まで気になっていたが、こ

の気に彼らの場所を知っておこうと、質問をぶつけてみた。

が、神楽が異世界から来た。っとさらに訳の分からないことをストリートに言うものだから、士郎は尚のこと混乱した。

その様子を見ていた凜が、「ああ、そういえば」と言葉はいて、続けて言う。

「銀時たちが異世界から来たってこと、衛宮君は知らなかったわね。でも今はそんな暇はないから、後にも銀時たちに聞きなさい」

凜は言い終えると、視線を士郎から紫色の女性へと方に向けて言い放つ。

すると銀時たちは一旦喋るのをやめて、視線が凜へと注目が集まる。

「…それで、銀時のサーヴァントのことだけど…単刀直入に聞くわ。アナタ　クラスはキャスターであってる？」

「……………」

凜の言葉に、キャスターと呼ばれた女性は目を細めて凜を睨みつけ、凜もお返しするように目を細めて睨みつける。

暫くの間、二人の沈黙の睨み合いが続き、重苦しい空気が漂う。

その沈黙を破るように、キャスターと呼ばれた女性が口を開いた。

「…ええ、そのとおりよお嬢さん。まあもつとも、私がキャスターだと薄々感じていたみたいだけど…」

「　アナタのその特徴から予想するに、バーサーカーは論外、そしてセイバー、ランサー、アーチャー、ライダーのクラスはまずないことだけは分かっていたわ。…見た目がセイバーやランサーのような白兵戦を得意としたサーヴァントとはあまりにもかけ離れすぎていたわ。」

ライダーみたいに騎乗を得意とした英霊には見えないし、かといってアーチャーのように弓を使うようにも見えない」

長々と説明していた凜は、ふと人差し指と中指の二本を前に出して続けて言う。

「残っているものは後2つ、アサシンとキャスターのクラス。

…はじめはちょっとアサシンかと思っていたけど、仮にアサシンだったら、相手を暗殺するための武器　例えばアサシンダカーか小太刀つてところかしら？　…それを隠し持っているようには見えないし、アサシンに適した体格でもなかったから。…私はそこからキャスターだと予想して、後は確信を領けるきっかけを待っただけ。そしてらドンピシャ。アナタがいつさっき銀時に放った魔術がそれを証明してくれたおかげで、あなたのクラスが特定できたって訳」

「…すごい」

凜はこの短時間である程度に範囲を絞り込み、尚且つキャスター放ったという魔術によって確信へと至るまでの彼女の凄まじいまでの分析力、そして見落とすことのない優れた洞察力、新八は彼女の凄まじい洞察力と分析力に大きな感心を抱いていた。

「なるほどね。凄まじい分析力と、洞察力ね。…貴女将来策士に向いているんじゃないか？」

「お生憎様、策士って言うのも魅力的だけど。今はある目標に精一杯なの」

「あら、それは残念……」

凜とキャスターは、お互いに皮肉の言い合いを軽く交わしながら不敵に笑う。

数秒お互い笑いあいながら見詰め合っていた後、凜は視線を移し

て銀時を見て言う。

「ねえ、銀時」

「あん？」

「今私は衛宮君と同盟を結んでいるんだけど…。銀時も私たちと手を組まない？」

「同盟ねえ〜……」

「戦力が多いに越したことはないし…それにアンタはかなり強いから、銀時がいれば戦術の幅が大いに広がる。戦力は一人より大勢いた方がやり易いでしょう？」

「…つつてもなあ〜。んなメンドクセーんだよなあ〜…」

頭をボリボリと掻いて唸る銀時に、凜は近づいて銀時に耳打つ。

「…もしアンタが同盟結んでくれたら。パフェを沢山奢ってあげるわよ？」

「よし!!! 手を組もうぜ凜!!!」

「早!!!? 間髪入れずに承諾したよ!!!? 絶対甘い物だ…。絶対甘い物に釣られたよこの人!!!?」

コンマ1足らずの内に凜と組んだ銀時に、士郎は大声でツツコム。この男の甘い物に対する執念を侮るなかれ。

其の天パは甘い物のためなら例え火の中水の中、嵐の中、戦場の中に居たって、そこに甘い物があれば最速のサーヴァントと言われているランサーさえもびっくりな超スピードで甘い物に喰らいつく男なのである。

「…さて、それじゃあ作戦会議といきましょうか」

凜はどこからともなく取り出したか、眼鏡を掛けた。

眼鏡を掛けた凜に、士郎は頭にクエスチョンマークを浮かべて凜に訊ねた。

「？ 目が悪かったのか遠坂」

士郎の問いに最初は首を傾げた凜だったが、士郎の訊ねてきた意図が分かったのか「ああ、そういうことか」と小さく吐き、士郎に言う。

「いいえ、コレは只の伊達眼鏡よ。別に目が悪いんじゃないわ。ただ人に説明とかするときは、コレを掛けてた方がしっくりくるからそれだけのことよ」

「そういうことなのか。…でも、確かに遠坂のその眼鏡はかなり似合ってるし、眼鏡掛けてる遠坂もしっくりとくるな」

「。べ、別に煽ってたって何も出ないわよっ……」

凜は顔を少し赤くさせ、そっぽを向いて少々突き放し気味に吐く。あまり褒められることに慣れていない凜は、士郎の純粹な褒め言葉に気恥ずかしくなり、少し突き放し気味になったのだ。ようは照れ隠しである。

そんな凜に、ニヤニヤしながら見つめていた銀時たちに、凜は咳払いをして気恥ずかしさを紛らわして言う。

「ゴホン！ …と、とにかく。さっさと会議始めるわよ！」

そして凜は素晴らしい、作戦会議をするのだった。

Side Change:…???

僕は今ある教会の中庭で、地下室へと続く道を霊体化している僕のサーヴァントと一緒に、目の前でヘッドホンとサングラスに革ジャンに、その格好に不釣り合いな三味線を背負っている男に案内されている。

たしか、河上…なんていったっけ？ …まあいい、そんなことはどうでもいい。

「…なあ、アンタ」

「……………」

「これからお互い協力することになったんだ。折角なんだから、お互いの中を深めるために何か話しをしないか？」

「……………」

こちらの話などまるで耳に入っていないのか、そのまま前を歩き続けている。

…聞こえていないのか？ もう一度試してみよう。

「…おいおい、シカトするのは無しにしてくれないか？ 僕が折角アンタなんかのためにお話をしようって言うてるんだから、僕の厚意を無碍にしないでくれないか？」

だが、男はそのまま歩みを進めているだけで、僕には全く眼中がない。

コイツ……………っ!!!??

「……………っ。おい!! この僕を無視するなよ!!! 聞いているのか!!!??」

「…? お主も聴くでござるか? この曲ついこの間でた寺門通っという人気アイドルの…」

「…いや、僕は別にそういうのはあんまり聴く趣味はないんだ。

…つと言つかそういうことを言ってるんじゃないか？ 人と話す時くらいはヘッドホン取れよ!!!？」

「イヤでござる」

「なつ……はあ。…本当に大丈夫なのかねえ？ 部下がこんなに抜けてるんなら、あんたらの上司は相当バカなんじゃ」

僕が言葉を言い終える前に、僕は正面から突然現れた影によって進行を阻まれた。

「うわっ!!!？ ……つて、なんだ。ライダーか、驚かすなひっ!？」

僕は目の前に居た影が、僕の従者だったことに安堵し、そのクラス名を呼んで目の前の光景に目にする。

どこからともなく取り出されていた河上の刀と、ライダーの持っていたダカーと拮抗していて、しかもライダーと拮抗しているのも関わらず、僕に凄まじい殺気をぶつけてきている河上が僕に喋りかけてきた。

「小僧。一つ忠告しておくでござる。…貴様如き青二才に拙者のこと好きに言われようが何とも思わん。…だが、次にあの男を晋助のことを愚弄して見るがいい、その命。無様に散らせてやる」

「……あ、あつ……。…あ…あつ。あ…」

僕は恐怖のあまりに身が竦み、理性が保てず全身がまるで自分の体じゃないのように震え上がり、蚊のようにか細く鳴くだけしかできないほど、僕の心身は完全に目の前の化け物に対して恐怖していた。

「 シンジ。しっかりしてください。私は桜からアナタを護るように令呪で命じられ、今私はアナタのサーヴァントなのです。

第一、英霊であるこの身が人に対して遅れを取るなどあり得ません」

「あ」

…そうだ。今の僕には護ってくれる盾がいる！！

あつは！ 僕は一体何を恐れていたんだ！！

そうだ！！

今の僕にはこの従者ライダーが付いているじゃないか！！

そうだともし！ 今の僕に恐れるものなどないんだ

！！

「…くくくく、お前にしては随分といい事を言うじゃないかライダー！。 そうだ、僕にはお前がいるじゃないか。恐れるものなんて何もないじゃないか！！」

今の僕は最高に気分がいい！！ 俗に言う、最高にハイってヤツだよ！！！

すると、河上がライダーのだからを弾くと同時に後ろに下がりながら言う。

「 随分と自信過剰でござるな。拙者たちのように、人では貴様のような英霊には勝てんと？」

「そうです。 私たちサーヴァントは人を超越した存在。故に、アナタ方が勝てる道理などありません」

「…なるほど。確かに、この世界の魔術とやらの技術は凄まじいでござるな。特殊な儀式で過去の英雄を呼び出し、其れを式神のようにに使役することができる。 其の技術には感服するでござる。

だが 思い上がるなよ亡霊が」

「 なんですって？」

河上の言葉を聞いた瞬間、ライダーの気配が一変して、まるで射殺すような殺気が空間を支配した。

そんな戦慄とした空間の中、河上はまだ続ける。

「貴様らがいくら人を超越した存在と言えど、其れを超えるに至る例外は常に存在するものでござる。何時までも驕っていると、今この場で足元を掬われるかもしれんでござるぞ?」

「ほう…この私に　サーヴァントを相手に勝つつもりでいるのですか?」

「無論。　何時までも驕っている其の傲慢を完膚無きまでに切り捨ててやる」

「いいでしょう。サーヴァントを相手に勝つつもりでいるその態度を訂正させる必要があります。　人を超越した存在と対峙すると言つことがどういうことか、其の身をもって思い知らせてやります」

「いいぞライダー!!　そのままムカつくソイツを殺してしまえ

!!!!

「　　おいおい。来るのが遅えと思つたら……随分と楽しそうなことしてるじゃねえか」

戦慄とした空間の中、男の声が響き渡った。

僕は声が聞こえた方に目を向ける。

そこには壁に腰掛け影になっていて顔がよく伺えないが、女物を思わせる着物を着込んでいるおり、その人物はその場に佇んでいた。

その人物はこちらの視線が集まったことを確認したのか、壁を使って腰を起こし、こちら側に歩み寄ってきた。

すると、その人物の全貌が露になってきた。その人物が着ている

着物は、蛾が散り散りに飛んでいるような模様を着て腰には日本刀を差して片腕を捲くり腕掛け代わりにし、もう片方の手にはキセルを持ってている。

そしてその人物は整った顔立ちをしており、片方の目に包帯を巻いていており、その整った顔立ちと、体つきから男であろう。

「 晋助」

唐突に、河上はそんなことを口にした。

晋助と呼ばれた男は、河上に向かって「よう」というとその近くで止まった。

河上は、刀を三味線の中にしまうと。晋助と呼ばれた男の方を向いた。

「 万斎、使いご苦労だったな」

「本来ならば拙者がお前のところまで向かわねばならなかったことを、自らお主が来てもらってすまなかったでござる」

「別にいいってことよ。…こうしておもしれエもんが見れたんだ。…それにしても万斎。テメーも人が悪いぜ？ この俺を差し置いて楽しそうにイチャつきやがって…そんなに心躍るもんだったのかイ？」

「そうでござるな。英霊というものがどれほどのものなのか、試してみたいという好奇心で心が躍っていたでござる」

「クククク…。そいつアなによりだ」

男は手に持っていたキセルを啜え、口の中に入った煙を吐いた後、河上から僕の方に視線を変えると、僕に喋りかけてきた。

「わざわざ使いに来てもらい、感謝するぜ。間桐慎二。…紹介が遅れたな、俺の名は高杉晋助。 鬼兵隊のリーダーだ」

「…ぼ、僕の名前を知っているんだね」

「ああ、お前の爺さんから名前は聞いていたんでなア。どんなヤツかと思ったが…なるほど。あのウジ虫翁に似て、小悪党な目をしてやがる。…いいぜ、気に入ったよ」

そういつと、目の前の男はツクツクと笑っていた。

Side Change: Ride

一体なんなのですか、この男は…。

シンジのようにただ虚勢ばかりを吐いて、非力な上にプライドだけが高く、思い上がりでもはなく、マトウゾウケン見たいに薄暗く、コソコソと隠れながら動き回るようなものでもない。

その男の瞳に映るものは狂気　　そう、まるで血に飢えた獣…

…だが、其の中に冷静に相手を見極めるような鋭さも感じ取れる。

私は無意識の内に、シンジを庇うようにしてその場に佇んでいました。

「　　ほお」

タカスギは、私に関心を抱いたのか。私に語りかけてくる。

「いきなりどうしたんだア？　ライダーさんよ…。…いや、ここはメドウーサといえればいいか？」

「っ…！？　…なぜ私の真名を？」

「なんのこたアねえ。ただあの爺さんから聞いたただけだ」

……ゾウケンめ……。余計なことを言ってくれましたね

！

私は静かに表情を表に出さず、この場に居ないゾウケンを怒る。

「おいおい、そんなにピリピリするもんじゃないぜエ？ 折角の美貌が台無しだ」

「…黙りなさい。今私は虫の居所が悪いのです。用があるのなら率直に済ませたいのですが？」

「まあまあ、そう急かすな。今回お前たちを使いによこしたのは…。特に深い意味はない。だが、強いて言うなら。…今夜寺

小屋…今で言う学校に行けば、面白いことがあるかもなア…」

「…その宛のない情報などで、信じるとでも？」

「信じるか信じないかはお前たちの自由だ。…行くかいかないかはそこのポーズと決めな」

「用はそれだけですか？」

「ああ、もう帰っても構わねーぜ。重ね重ねご苦労だったな」

「…マスター、行きますよ」

私はシンジに一言そういい、霊体化すると。シンジは気の抜けた声で「あ、ああ・・・」と返事を返すと、若干早歩き気味にその場を後にした。

私も、シンジの後を追おうとした時。タカスギが口を開いた。

「いい日が昇ってるじゃねーかア。ククク……こういう日はいい月が昇りそうだア。…ククククククク　　また逢えるのを楽しみにしてるぜエ……なあ。　　銀時イ」

タカスギは空を仰ぎ見、独り言のように吐いていた。

そして瞳孔が大きく開かれ、その瞳に写すものは、狂喜に満ち溢れている目だった。

なんとなく思いついたちょこつとN・Gみたいなもの。

「あ、そうだ」

つと、突然慎二は何かを思い出したように手をポンつとたたき。もう一度晋助の元に戻ってきて、懐をぐそぐそと探るように手をいれ、そしててを取り出すと。

「・・・ウイッス」

と、片手を前に出して挨拶をしてきたのは、髪の毛は金髪で、ネコ(?)のような顔立ち。目の色は真っ赤。

んで、白いロングTシャツと紫色のロングスカートを着込んだ。ネコのようなネコじゃないような生き物が、慎二の手に握られていた。

晋助や万斉、それぞれどこかライダーまで絶句している中、慎二は気にせず続けて言う。

「コイツ、アンタたちの所に行く途中で拾ったんだ。コイツちょっと、面白くてね。…どんな生物か知ってるか？」

晋助は無言のまま、前に差し出された生き物を手に取ると。それをジッと見つめた。

「いや、あちしはコスモパトロールをしているモノでしょ？パトロールしてるときに、SOS信号をキャットしたんだにやあ、これが。んで、その信号に向かって飛んでいたら、何時の間にか道端に倒れているところにワカメに拾われたんだにや」

「……………」

なにやらネコ（のようなモノ？）が長々と喋っているが、晋助はソレをジツと見つめてるだけだった。嫌な空気が漂う中、突然晋助が慎二に対して口を開いた。

「…おい、坊主」

「な、なんだ？」

「…この動物（？）を貰ってもかまわねーか？」

「あ、ああ。別に構わないよ。…僕は動物（？）は飼わない主義なんでね」

「そうか…。…わざわざ来てもらってご苦労だったな」

「そ、それじゃあ。僕は帰るよ…」

「おう…」

晋助はネコ（？）を見たまま慎二に返事を返し、慎二は振り返ってその場を若干早歩き気味に帰っていった。

それはなぜかって？ 晋助が若干不気味にニヤけてネコ（？）を見つめていたからである。

ちなみに、これは番外編なので現在のご本人の性格とは一切関係ありません。

そして歩いていると…。

「……………ぐへッ。…ぐっへっへへへへ。ぐへへへへへ……………」

なにやらものっそい気持ち悪く笑っていたのである。

万斉は、サングラス越しからでも分かるくらいに、晋助をキチイ見たいなものを見る目で見つめていた。

フアンのために補足としていうと、これはあくまで番外編なので、先ほどのご本人の性格とは一切関係ありません。大事なことな

ので二度言いました。

んで、そんな不気味気持ち悪く笑う晋助の笑い声をBGMに、慎二はそそくさとその場から去っていった。

おわれ

第八訓「陸を歩いているワカメを見かけたら、迷わず110番通報しなさい」

銀八「おしえてエー」

皆「銀八どうじょおー！ー！！！」

銀八「はアーい、今日も始まりました銀八どうじょー」

タイガー「今回も、迷える子羊を由緒正しい道へと導くコーナー。

…それが、銀八どうじょー！！！」

ブルマ「道を外す、の間違いじゃないかしら…？」

タイガー「チエスト！！！」

バシーン！！！！

ブルマ「あいた！！？ とても痛いであります！ ししよー！！！」

タイガー「安心せい…峰打ちじゃ。…っというか弟子一号！！！」

応本編では教師を務めている私が、道を踏み外すなどとはどういうことかアー！！！」

ブルマ「へえー…、まあ、学校ではちゃんと生徒指導してるけど。

シロウに対してタイガはちゃんと指導できているのかしら？」

タイガー「うっ……」

銀八「まあんなことはいいととして、ちゃっちやと初めんぞオー。…

えーまず最初は、ペンネーム『サディスト』さんからの質問」

タイガー「…土郎、セイバー、凜、アーチャーに質問。万事屋三人を正直どう思う？ 出会ったときと今、それぞれ答えてくれ」という質問です」

ブルマ「今回その四人に質問してきました。テーブルコーダーに保存してありますのでそちらをお聞きください。…えーとまず最初は

シロウから」

士郎「え？ まあ最初は突然やってきて、人の家で随分とふてぶてしい態度をとる人たちだなとか、縦横無尽な人たちだなアとは思っただけ。」

特に銀さんは何か一本の芯みたいなものを持ったような人だなんて思ったな。

神楽も、人に対してもの凄く毒舌な事を言うけど、なんだかんだで結局優しい子なんだなって思った。

…でも、一番驚いたのがあの子の人並みはずれた怪力だったな…。

…え？ 新八は？ …えっと…。…すまん、あまりいい言葉が思い浮かばない…」

セイバー「ギントキたちのこと、ですか？ …ふむ、そうですね。やはり私とその三人の中で一番注目しているのは勿論ギントキですね。」

…彼はとたったの数合程度、剣を交わっただけですが、彼の剣には色々な感情が混ざり合っているようなモノを感じました。

…後悔、絶望。そんな感情が入り乱れている中で一つだけ、そんな負の感情にも汚されず、真っ直ぐに佇む芯のようなものでした。

其れがどのようなものかはまだ分かりませんが…。それは後に分かっただけのことでしょう。

…この戦時中に、それを見極めたいと思っています。これで以上です。長話になってしまって申しわけありませんでした」

凜「あの三人のこと？」

ん〜そうねえ〜…。まあ一言で分かりやすく言うなら、やかましいの一言に尽きるわね。

…だって、人の真面目な話を折るわ、ジャ アンもびっくりするくらいマイペースだわで…。あいつらと付き合うのはホント疲れるけど…。何でか退屈しないのよね。

…ホント、こんな気持ちあまり持たないようになってきたんだ

けど…あいつらと居るとどうもね。

理屈より感情が表に出やすくなっちゃうのよねえ。ホント不思議な奴らよ」

アーチャー「…ふむ。あの三人のことをどう思うかと問われてもな。私の他にも訊ねていたのだろう？」

今更私があの人三人に対して語るのが、前者たちと被ってしまつてはどうにもなるまい？

ならば、私が語るまでもないということだ。…ただ強いていう

なら、あの銀髪の男 坂田銀時と言う男は何故か あまり

初対面という気はしないとだけ言っておこう。私からは以上だ」

タイガー「 はい！ 以上四人によるテーブルコーダーによる質問の返答でしたー！」

ブルマ「まだあるわね。…えと『キャスターに質問。コレか

らかなり苦労すると思うが大丈夫そうか？』…つと言う質問です」

銀八「えーこの質問に対してはアー。直接ご本人にお答えしてもらいましょー。…んじゃ、そういう訳でキャスターさんご本人のお答えエー」

キャスター「え？ ま、まあそうね。…確かに色々と苦労しそうだけど。…まあ、頑張るわ…（虚ろな目で）」

銀八「はい、つという訳でキャスターさんからは以上でエーす」

キャスター「ちょー！！ 私の出番これだけ！！？」

銀八「えエー次の質問はアー…キャスター「聞けえええええええええええー！！！！」どぶろおー！！？」

ブルマ「…えー、ギンパチせんせーが只今キャスターにフルボツコ中なので、代わりに私が読みます。

…えと、『アーチャーに質問。動揺した時、昔の自分がもろに出てるが…正体バれない自信ある？』つとのことですが…、アーチャー自身はどうなの？」

アーチャー「…む、むう。あまり素は戻らないと思つていたのだが…やれやれどうしたものか。…ま、まあ 善処は…する」

ブルマ「はい！！ 以上アーチャーのトゥーアバウトな質問の返答でしたアー！！！」

タイガ「っという訳で、こんなに長々しい返答にさせた『サディスト』さん！！ 廊下にたつてなさい！！ …さて、続いてペンネーム『武士堂』さんからの質問。

『凜はよくツンデレだと言われますが、ツンデレってのは要するに『ただヒステリックに喚いて自分の悪い点を全て人に押し付け他人のせいにしよととする空気読めない周囲爆散型の人間』の事ですよね？

凜は照れ隠しなお人好しですのでツンデレの定義に当て嵌ってませんよね？』っという質問です」

銀八「えーっと、まあ極端に言ってしまうえば。それは人の価値観だと思います」

ブルマ「うわ！！？ 復活早！？」

銀八「まあ確かにツンデレっていうのは、例で言うと、エ アのアカヤ、ゼ 魔のルズとか、後、涼 ハ ヒとか、そんなもんとかが代表的ですね。

…まあ、主人公とか周りに迷惑をかけるだけ掛けといて主人公と二人つきりになると変にしおらしく接したりとか、後中途半端な色目使ったりとかもします。

最初は作者もツンデレって何かまどろっこしくて好きじゃないって言ってましたけど、あるとき友達にタイプムーンを進められて、それで初めにアニメの Fate を見ていたときに遠坂凜に出会ったわけですよ。

他のツンデレっ子とは違って、ちゃんと自分の欠点も見つめて、尚且つ魔術師として聖杯戦争を戦っている中でも、心の贅肉とか言いながらもやっぱりお人好しな彼女に、作者の中で電流が走ったらしいんですよ。

…それでツンデレ（ごく一部を除くらしい）好きになったららしい

んですけどねえ？

…まあそれはどうでもいいとして、用は作者にとってツンデレとは女性としての母性本能に満ち溢れて、尚且つ相手突き放すようにでちゃっかり他人のために真剣に怒れる、面倒見のいい女性が好きってことですよ。

…っというわけで『武士堂』さん。廊下にたつてなさい」

タイガ「さて、以上で質問の返答を終えたところで。今日はこれで銀八道場をお開きにしまーす！！」

ブルマ「それと、次回はまたゲストも呼ぶ予定です。一体誰か来るのかは…次回のお楽しみみてことで」

銀八「それじゃーいー」

タイガー&ブルマ「まつたねえーいー！！！！」

次回予告

銀時「テメーは高杉！！？ テメー…どうしてこんなところにいやる…！！？」

晋助「ああ、随分と面白いもんに参加してるじゃあアねえか。…居てもたつてもいられなくなつてなア」

士郎「…な、なんだ。コイツ…」

セイバー「士郎！ 下がつて！！ この男は危険です」

晋助「残念ながら、テメーらの相手は俺じゃないぜ？ …今回、あのボーズたちの強力な助っ人を寄越してきただけだ」

銀時「なっ…。高杉…テメーその女が持つてる刀はまさか…！！？」

晋助「クツクツ…。次回、Fate/Unlimited si
lver Soul第九訓「赤い満月が異様に輝くときはよからぬ
ことが起こるもんだ - 前編 -」…言つたはずだぜエ銀時イ。…俺
はこの腐った世界を徹底的に潰す。それがたとえ異世界だろうがな

「んだろっがなア」

お知らせ

どうもお久しぶりです。ジエロニモです。（誰

じやなくてギンタマンです。

3ヶ月の間何の活動報告や生存確認を要れずに申し訳ありません。

現在最新話を書いているのですが、その前までの全話を現在修正中です。

後々読み返してみると、私の納得がいかかった点があった（というよりありすぎた）ため、現在全力で修正中です。

まだプロローグしか修正は完了していませんが、一話ずつ修正していつているので、一話修正し終えた毎に活動報告にて毎度報告いたします。

後、できれば感想にて修正した話の感想を書いて下さると幸いです。

いや〜それにしても今日で一年最後の日ですか、胸が熱くなるな…。
じゃなくて、一年が過ぎるのって長いようで早いですよねえ〜。

…って、言ってること超親父くさいやないかい俺。（・・・）

そんなことより、小説っていうのはホント難しいものですね〜。
私はネットで見たものも含めて色々な小説を見てきましたが、私を含め、書いている人たちって、途中何度も挫折している人やスランプが続いて中々続きがかけない人って大勢居ますよね。

そんな状況になっても続きを書き続けていられ人たちって本当に、尊敬します。

っと、何かこれ以上語りだすものすごく長くなりそうなので、こ

の姿でお暇をさせてもらいます。
それでは。(・)(・)ノシ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2910/>

Fate/Unlimited silver Soul

2011年7月1日00時33分発行